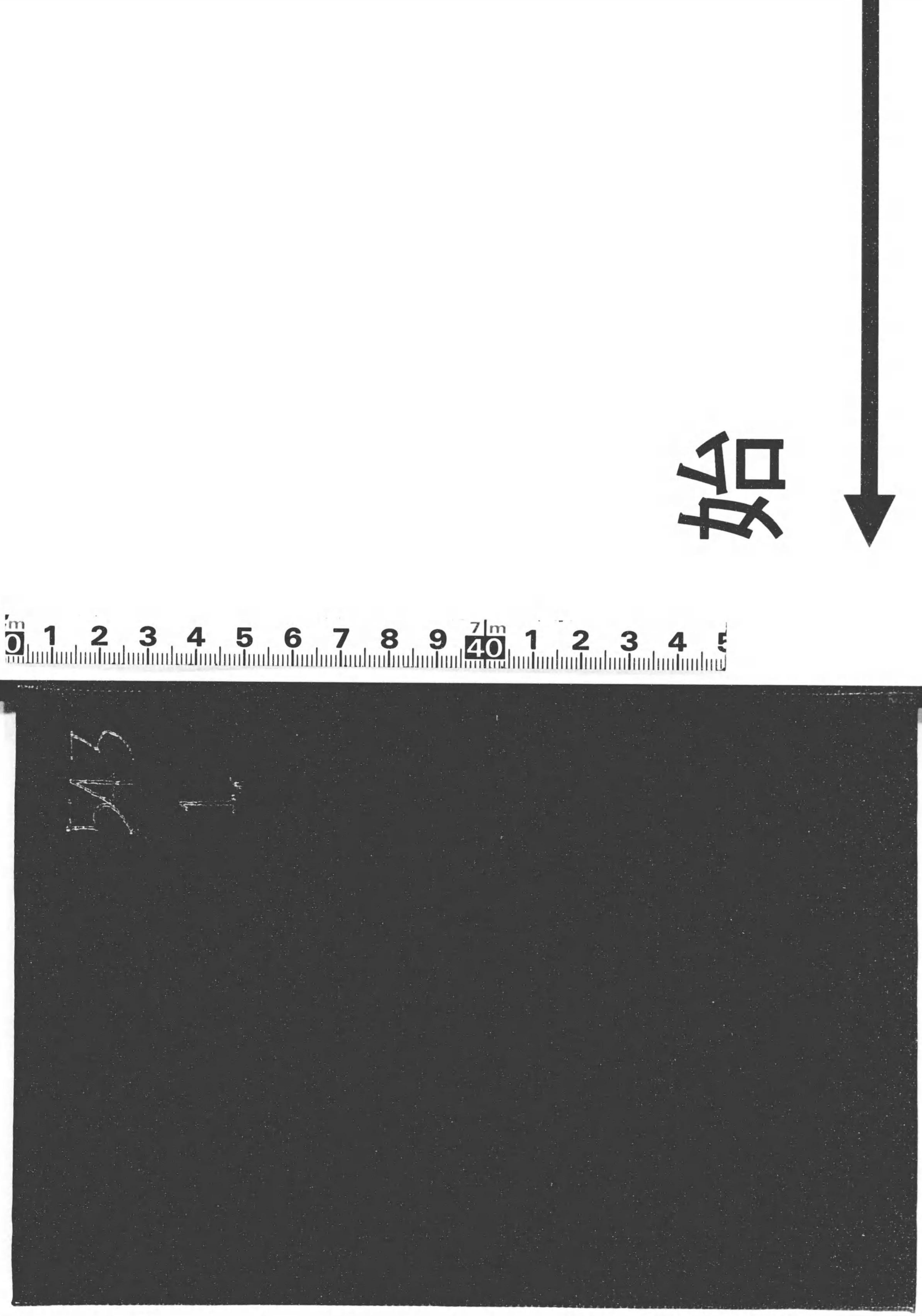
上
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4

6N70

第十三卷

大正
15. 10. 14
内交

豐太閤畫像

文學博士　笹川種郎

豐太閤の畫像、世に傳ふるもの數幀あり。京都高臺寺に藏するもの、高野山蓮花定院に藏するもの、尾張中村常泉寺に藏するものを初めとして、狩野永德筆と傳へて、狩野晴川院の藏するもの、今は其の原本を失へるあり。今此に載するところの侯爵伊達宗德氏藏するものは傳へて狩野山樂筆と稱するものなり。慶長四年四月、太閤蒲去の翌年、富田左近將監知信がさる畫工に命じてこれを寫さしめたるなりと稱せらる。鹿苑院承兌長老の題贊あり。當時名うての畫家にして、一世の英傑豐太閤の像を畫きて神采奕々の面目を傳ふべきものありとせば、そは山樂を措きて他にあらざるべし。此の圖の筆者が山樂と傳へらるゝも、決して虛託にあらざるべし。太閤は鳳采揚らざりしも、眼光の烱々たりしは諸書の傳ふる所、今此の圖に對すれば、海内の諸豪を威服し、鶴林八道、明國を此咤するの概、おのづから其の眉宇の間に現はるゝを見るべし。以て豐太閤の面目を髣髴するに足れり。

豐太閤畫賛

文學士　田辺静波

豐太閤の画賛を揮毫するに当りて、

内の賛を以て題し、郷村小景、漁翁を画部するの際、はじめて其の深き意の関に懸るを見るべし。且つ

こゝにあるべしと。太閤は賛を作るやうに、那波の歌をかゝげ、所謂、

まるものをこそ、さる山桜を指さしたるあるべし。浪の間の雀落ち山桜と解べしと。

詩を文学の題材とする。常識をもつて書家にして、一所の英雄豪傑太閤の歌を愛でて無学者の面目を解ふ

事四月、太閤秀吉の学、富田宗弦孫蔵流を以て、

いるものゝ今世に残るあるこゝの為指南書完成せしるものゝ如き、

中世宗易に賛するの号はやうにて、

豐太閤の賛歌、有り得べきの理論なり。京都高雄寺に蔵するもの、高雄山医師宝蔵に蔵するもの、風

流

543-1/1

例言

一、本卷には月のゆくへ、池の藻屑、豐鑑、義經記を收めました。

一、本卷は野村宗朔が擔當しました。

一、月のゆくへ、池の藻屑は史籍集覽本を、豐鑑は羣書類從本を、義經記は元祿刊本を本とし、本朝通鑑、大日本史野史、公卿補任、尊卑分脈、本朝皇胤紹運錄、信長記、太閤記、聚樂第行幸記、義經記大令、義經記評判註等を參照校訂しました。

註校 日本文學大系　第十三卷目次

月のゆくへ……一―一〇六
池の藻屑……一〇七―三三六
豐鑑……三三七―四三三
義經記……四三三―七〇八
解題……文學博士　尾上八郎……卷頭一―四一

解題

月のゆくへ

文學博士　尾上八郎

いはゆる雅文體の國史が出來はじめてから、大鏡に文德天皇から、後一條天皇（萬壽二年）までの記事があり、水鏡に、神武天皇から、仁明天皇までのがあり、今鏡に、後一條天皇（萬壽二年）から、高倉天皇（嘉應二年）までのがあり、增鏡に、後鳥羽天皇（元曆元年）から後醍醐天皇（元弘三年）までのがある。これで、大體上代から建武中興までの事蹟は傳はるのであるが、猶その間に、高倉、安德二天皇の記事が缺けてゐる。これを遺憾と思つて、補足を思ひ立つたのが、荒木田麗女である。

麗女は、荒木田武遠の子、享保十七年三月に、伊勢國、山田の下中之鄕町で生れた。幼年から學問が好きであつて、兄達の讀書するのを聞いて、大學をも諳誦した。これに感じて、兄の正富

が、古今集の序や、伊勢物語を教へた。長ずるに從つて、種々の漢籍をも習つた。後に、叔父の荒木田武遇の養女となつた。この人は、文選、その他の詩文を教へ、また和歌をも學ばしめた。麗女はいよ〳〵長じて、連歌をも習ひ初めた。

麗女は、その後、慶德家雅に嫁した。夫にすゝめられて、支那小説を摸したり、雅文體の小説を書いたりした。事があつて、大阪に出て、住吉にもゐた。故郷の家が燒けたので、また新築すべく故郷に歸つた。これが、明和二年であつた。かくて、新築が終つたので、また和漢の書籍に親しんでゐたが、明和七八年の頃、日本書紀、その他の國史に關する記錄を愛讀した。良人が、その方面の著述をと勸めたので、これに應じて著はしたのが、この「月のゆくへ」と後に云ふ「池の藻屑」とであつた。

「名をばいかゞいはむと思ひわづらひたるに、月をみる〳〵、人の『月のゆくへ』などこそいはめ、ときこえたまふに、いと嬉しう、まことにいみじき名なりと、ゆゑありて覺えぬ。」と跋にあるので、この書の名の出來たのが知られるが、更に、深意は同じ跋の「あくがるゝ心のはては千とせとも限らぬ月のゆくへとぞおもふ。」といふにあると思はれる。

この書は二卷に分たれてゐる。第一卷も、また二つに分たれてゐる。その二つともに、高倉天皇の御上である。第二卷は、專ら安德天皇の御上である。これらの事は、いづれも平家物語、または源平盛衰記等にあるのであるが、それらの書は、いづれも、軍旅を談ずるに急で、文事に多く顧慮しない。故に殺氣が紙上に迸つて、劒戟の音、流血の臭のみが感じられる。それに加ふるに、厭離穢土を唱へる新佛教の匂が充滿してゐるので、全體はたゞ幽鬱であり、黯淡である。これが當時の眞の世相であらうが、前期の悠揚の趣、高雅の態は、殆んど味ははるべくもない。乃ち榮華や、大鏡の遺風は、たづねることも出來ない。著者は、この幽鬱と黯淡との中から、刻意光と匂とを求めて、優婉に華麗に、榮華、大鏡の遺風を發揮しつゝ、この時代を描かうとした。これに於いて、著者は著しい成功を示してゐるので、平家、盛衰記にあらはれてゐる事實と、この書に示されてゐるのとは、全然處を異にし、世を一にせぬかの如くみえる。

しかし著者の資料としたものは、猶平家、盛衰記等が主なものであるのは、當時、他にかく豐富な内容をもつ資料は少ないので明らかである。たゞ、著者は、これらをよく選擇し、十分に取捨して、優美高雅の趣致を害さないやうにしてゐるのである。戰鬪のことも、事實であるから描かざるをえないが、これは簡明に寫し了り、卻つて、それに附帶した情的説話に、力を込めてゐる。平家の人々の都落、實定の上洛、月見の條などは、これであるが、これらは、皆、他書にも

精細に敍述せられてゐるものである。この重複した事件を、重複せざるが如く、語を換へ、句を改めて書き上げた著者の技倆は、なみ〳〵ではない。

語句に於いて、作者は、極めて巧慧である。前述の都落でも、「保元よりこなた、二十年に餘りて住みなれし古郷も、今日を限りと覺ゆるこゝちどもには、『いとゞ深草』とのみ思ひて行きもやられ給はず。」の如く、古歌の一句を點綴し、實定の上洛でも、「加茂川の流、八幡山の姿のみなむありしにかはらぬも哀れにて、『門前改めず。』とまづ覺えたまひ……そことしもなき『三の徑』をたどりつゝ、『黄菊猶存す。』と忍びやかに獨ごちて見めぐらし給ふ。」の如く、古詩、古文の語句を挿入して、他書と異なつた趣を呈せしめてゐる。この後者は少ないが、前者の類は頗る多く、聯想から情趣を生んで、文の生彩はこれから生じてゐる。「内わたりは、御節會、何くれの御儀式のいとめでたきに、『紫の袖をつらねて』參りたまふ君達の御樣はしも、『これやうれしき』といふばかりなり。」とか、「げによる浪の『ひまなく岸をあらふ』こゝちして、院も『渚きよく』御覽じつれば。」とか、「都の山もけさは霞みて、日の光のうらゝかさは、『宮もわらやもへだてなけれ』ど、」とか、皆それである。時に、兩者を混じて、「所々には物の音もひまなく、笛竹のよな〳〵、『木枯に吹き合』はせたる聲は、空にすみ上り、琴の調は『獨り秀でたる松』にひゞき通ひて、とゞこほりなき聲にきほひて、月さへいとゞ澄みまされるは、よのつねに『すさまじき』影などいふべくもあらず。」といふやうなのもある。すべて、和と漢とを兼ね、詩文とをとはず、時と處とに應じて、自在に引用して興趣を新たに湧かしてゐる。

かくの如くして、著者は平家、盛衰記等と異なつた境致に讀者を引き入れてゐるのであるが、猶その他に於ても同樣のものがある。歌集に限つてみると、建禮門院の右京大夫集、源三位頼政集、後德大寺實定の林下集、西行の山家集も、資料としてゐるのであるが、右京大夫集をことに屢引用し、その家集の端詞を、巧みに書き改めて、新らしい説話のやうに作り上げてゐる。家集に、「いつの年にか、月明かりし夜、上の御笛ふかせおはしましし、ことにおもしろく聞えしをめでまゐらすれば、『かたくなはしきほどなる』と、此の御かたに笑はせおはしまして後に語り參らせさせたまひたりけるを、『それは空ごとを申すぞ』と仰事あるとてありしかば、『さもこそは數ならざらめ一筋に、心をさへもなきになすかな』とつぶやくを、大納言の君と申すは、三條内大臣の御女とぞきこえし、その人のかく申すと申させ給へば、笑はせおはしまして、御扇のはしにかきつけさせたまへりし『笛竹のうきねをこそは思ひしれ、人の心をなきにやはなす。』」とあるのを取つて、「殊に晴れたりける夜、うへ中宮の御方に渡らせ給ふ。御笛ふかせたまへるが、いと

おもしろきを、人々めでたう聞きけるに、右京の大夫の君とりわけめで奉るとて、宮『かたくなしき程なり。』と笑はせ給ひ、上に申させたまへば『そは空ごと』など仰せらるゝを聞きて、右京の大夫、『さもこそは數ならざらめ一筋に心をさへもなきになすかな』とひとりごつを、大納言とてさぶらひたまふ上臈ききつけて、御前へ啓したまへば、上いたう笑はせたまひ、御扇にかきつけさせ給ふ、『笛竹のうきねをこそは思ひしれ人の心をなきにやはなす。』と書き改めてゐるが、後者の方が語句も直截で、意義も明瞭である。この笛の條につゞけて、著者は、すぐに、林下集を引用する。それは、同集に、「内裏に參りて侍りしに、主上の、御笛萬歳樂吹かせ給ひしを始めてうけたまはりて、女房の中に申したりし『笛の音の萬代までときこえしを山もこたふるこゝちせしかな。』とあるのから、「上は、こと物よりも、笛をのみなむ、いみじきものにせさせ給ひ、御心入れさせたまへば、常にめでたき音に吹かせたまふ。實定の大納言内に參りたまひける折、萬歳樂をいとおもしろう吹きすましておはしましける。大納言は、上の御笛はじめて聞き奉りたまふに、いたう驚かれたまひけるが、まかでたまひて、又の日、内の女房の中に申したまふ。『笛のねの萬代までと聞えしを山もこたふるこゝちせしかな。』これは、此の年の事には侍らず、治承の比にもや侍りけむ。うち紛れて、おぼ〳〵しきこそかひなけれ。」と演繹的に述べて、しかも、年代の考證にも及んでゐる。すべて、資料を多少ながら變改して、趣致ある如くにした作者の技倆は、實に凡ではない。

著者の用ゐた語句は、をり〳〵後世風のところがあつて、純然たる平安朝の匂のせぬものもあるが、春蠶の絲を吐く如く、縷々として盡きず、しかも、新彩の鮮明なのは及び易からずとおもふ。「春日の藤のしなひも長く榮ゆる春にあひ、源の清き流の末ひろごりて數そふ星の位の光も曇なき御代とて」とか、「庭の砂は猶殘れる雪の色も寒からず、外の衞もる衞士の燒火の煙さへ、まだき霞に立ちそひたるこゝちして、竹の臺に通へる風は、鶯よりさきに春を告げそめたり。」などは、漢文から來た跡も窺はれるが、いづれも流麗であり、暢達である。

著者は、この書の最初に、序文を設けてゐる。それは、「なにはの事の繁き世を觀じて、」山かたかけたるところに住んで居ると、蘆垣のあなたに老翁がある。をり〳〵訪ひ來て、くさ〴〵の物語をする。ある日、濁つた酒をすゝめると、身の上話を始める。「自分は都のもので、その昔今鏡と云つたものの緣故であるゆゑか、長命で百歳以上になつてゐます。」と云ふ。驚かれて、「今鏡の次に彌世繼といふものはまだ知りませぬ。その次の增鏡ははやく見ました。その間のことが知りたいから、話して戴きたい。」と云ふと、老人は、「さらば、くた〴〵しくても御話しませう。」と云

つて、話し出したのが、この書であると云ふのである。これは、大鏡、水鏡、增鏡ともにあるのに倣つたものである。が、卷中に、高倉院、安德院とのみ大綱をあげて、事件によつての題目をつけぬ處は、大鏡や水鏡に似てゐる。が著者は、これらの中どれといふ目標をおかず、たゞ前者の缺を補ふに努めたのであらう。それにしても、故萩野由之先生の言はれたごとく、大日本史、野史などの出ぬ前、史料の繁雜な時に、よくも、かく取捨編纂したものである。實に著者の力は大である。しかし、これは、次の「池の藻屑」をも含んでの言である。

池の藻屑

荒木田麗女が、「月のゆくへ」を著はして、高倉、安德二天皇の御時のことを記したと同じ動機で、增鏡以後の國史を、四鏡の態に倣つて述べようとしたものが、「池の藻屑」である。

本書の記事は、以上の故に、後醍醐天皇の元曆年間から始まる。而して後陽成天皇の慶長年中に至る。約二百七十餘年の記事を、著者は、例の流暢な筆で、趣味多く記述してゐる。最初に序文のあることは、從來の四鏡と同じであるが、すでに、雲林院も、初瀨も、清涼寺も使はれてゐるのであるから、こゝには、別手に出て、石山寺を用ゐた。八月の頃、都に上るとて、途に石山寺に參詣する。秋の景色は物哀れで、岩の姿も、水の流もいみじく清い。御佛を拜んでゐると、傍に老尼が念誦してゐるのがある。所の物語を聞かうと思つて、何となく物語をすると尼は、「昔知つた人はなくなつて、語りあふ人もないので、穴を掘つてもいひ入れたいと思つてゐます。今夜嬉しい人に御逢ひ申した。老の思出に物語りしませう。」といふ。「それならば、後醍醐の帝の、芳野に移らせられた頃から末の事を御聞きしたい。」といふと、尼は、恥らひながら語り出したといふのである。これは、「月のゆくへ」の、名もしらぬ山里を使つたよりも古味があつて面白い。

すでに擬古文である以上は、飽くまでも古體に執著するのが到れるものと思ふ。

第一卷は、後醍醐天皇の御上である事前述の如くであるが、第二卷には光嚴院、第三卷には光明院、第四卷には崇光院、第五卷には後光嚴院、第六卷には後圓融院、第七卷には後小松院と、みな北朝の天皇を宗として、南朝の天皇はみな附載してある。この後は、南北合一であるから、只一系に、第八卷には稱光院、第九卷には後花園院、第十卷には後土御門院、第十卷には後柏原院、第十二卷には後奈良院、第十三卷には正親町院、而して第十四卷には後陽成院といふやうに述べてゐる。かく一卷に一天皇づゝ配當してあるのであるが、その記事は、「月のゆくへ」とおなじやうに、平安朝式の優美高雅の趣致の多からむことを欲して、極めて、朝廷の儀式、典禮、遊

宴、管絃、歌合等の事及び宮廷閒の情事、逸話等の、後に傳ふべきものを列記してある。その故に、南北朝の爭鬪、應仁の大亂、すべて、平安朝的情趣を破壞すべきものは、いづれも簡單に記述してゐる。これらも、事實に外ならぬのであるから、省畧はせず、あるべき事は遺漏のない樣にとは努めてはゐるが、目標が目標であるから、尊氏、義詮、義滿をはじめ、秀吉、家康に至るまで、皆平安朝化せられて、武人らしからず、生れながらの縉紳の樣になつてゐる。「關白殿、はた花やかに、にぎはしきかたによりたまへば、とりもちてせさせたまふ事も、萬おほやけしう、心ひろくおきてたまへるによりて、末が末までもうるほひわたり、宮の中こよなう今めかしうなれり。」とあるのを、何人が秀吉の事と思ふであらうか。しかし、かく平安朝化せしめたのは、作者のなみ〳〵ならぬ技倆であること、すでに「月のゆくへ」に云つた通である。

しかし、著者は漢學に通じ、漢詩に達してゐるのであるからとすれば、典據をそれに取る。師直の幡さしの落馬したので取り代へるのを、「北の翁のためしにやといへど、かかる折よからぬ事なりと、人々はさゞめきたり。」といひ、應仁の亂の長びくのを、「又の年も、また同じ樣にて烽火三月に連なりしかば。」といひ、また、人々の逃れゆくのを、「心々にあくがれ出でつゝ、桃咲く谷を尋ね入りたまへるさま、淺ましとも聞えむ方なし。」といふの類、あまりに唐めいて、當時には適切ならぬ感じがするのである。

以上のやうな事もあるが、出典を我に求めたものも多い。天文年閒の洪水を敍して、「『雲の八重たつ』ことは、横川の岸のみにあらず。遠近の山はみな雲に埋れたり。……隙なくよせ返る白波の聲は、『大宮の中まで聞』えけるが、やがて岸を越えつゝ云々。」と云ひ、信長と本能寺との事を述べて、「武庫の浦波は鼓の聲にきほひ、『津の國がひの駒』は朝風にいばえつゝ、『隙なきこや』の蘆茨は、兵の庫となり、『三津の濱邊に燒く鹽の』煙は消えて、烽火のみ明らかなるにぞ。」と云ふの類は、前者よりは、遙かに日本的で、情味も豐かである。しかし、辭句の配置は、四六駢儷の漢文體を脫してゐないので、平安朝盛時のとは、かなりの距離がある。

本書の資料は、初の方は太平記、吉野拾遺、新葉集、終の方は太閤記、豐鑑等種々であるが、それらを、いづれも適當に拮據し、よく消化してゐる。たとへば、太平記によつて、光嚴院の御行脚を簡明に敍してゐるが、吉野の行宮での御述懷を、太平記には、「天地分を革めて、讓位の儀出來しかば、鼙懷一時に啓けて、此の姿と成つてこそ候へ。」とあるのみであるが、著者はこの意に加へて、「かへりみすべうもなき塵の世は、『とく捨てざりし』とか、惟喬の親王の言の葉も、今なむ哀れに思ひしられ侍り。」と古歌を引用し、且つそれを敷演し、更にこれにつゞけて、新後拾

遺集の御製によつて、「山又山を分けゆかせ給ふに、松の嵐もいとひやゝかなる曙の氣色を、見わたさせ給ひて、古へ都にて、百首の歌めされしついでに、旅の心を、『草まくらかりねの露に我を おきて伴ふ月もあけがたの空』とよませたまひしも、我が御うへとぞ思召し出でさせ給ふ。」といふ一節を作り出してゐる。彼是の資料の連接結合は、著者の腐心したところであり、また、成功してゐるところである。

語句に就いて見るに、著者は極めて語彙に富んでゐるので、時に應じて、適當の言辭を使用して、その狀況を髣髴せしめてゐるのであるが、十四卷の長篇、時に同一ならざるを得ない。たとへば、尊氏の九州よりの東上に、「いつしか尊氏は、雲霞の兵を棚引かしつゝ、都をさして上るなりと聞ゆれば。」と云ふと同じく、秀吉の北條氏征伐に「二月の末、關白殿、雲霞の軍どもを從へて、都を出で給へり。」と云つてをる。これは皆、增境の、東軍の西上に、「弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。」の語句から脫化したのであるが、かくの如き類は、些事ではあるが、すべて無きがよいと思ふ。

大鏡にも、水鏡にも、增鏡にも、一篇の理想として見るべきものがあつた。それがあるので、全體に生氣と、光彩とがあつたのである。しかるに、この書には、それと指して云ふべきものがない。たゞ列敍である、記錄である。この外に何もない。最後に、細川藤孝が、「やすみしる君がめぐみを世にうけてのこるくまなき春は來にけり。」といつたのを擧げてあるので、こゝに到るまでの次第を敍して、天下の太平を祝したのであると云はれぬこともないが、それよりも、長年月の治亂興廢を順序に從つて、四鏡の如く書くのみが、著者の目的であつたといふのが、至當の如くみえる。これが、自分らの、聊か滿足し能はぬところである。

この書の名は、江村北海の序文に、「其所以名池藻屑、取義於堀川百首中、伊勢則可謂僻事之和歌云々。」とある。堀川百首中の、「池」忠房「伊勢ならば僻事ぞとや思はまし大和なるてふ美作の池。」といふのによつたと見える。しかすれば、著者自分は伊勢人であるので、云ふところは僻事である。その僻事を集めたのであるから、美作の池の藻屑と等しいものであるとの意に解せられる。あまりに持つて廻つた謎の如き云ひ方といはねばならぬ。しかし、語としては雅馴を失はない。これも才女の才の一端のあらはれであらう。

豐　鑑

「あやしの民の子にてありしが、かくまでなり出でたまふ。もろこしにも、日本にも、例なか

るべし。」と驚嘆した豐臣秀吉の一生を、秀吉に緣故の深い竹中重治の後の竹中重門の書いたものが、豐鑑である。

まことに、秀吉ほど成り出たものはあるまい。賴朝が流人でありながら、兵馬の權を取つたのは、主としてその系統が、淸和天皇の流といふにあつたのである。然るに、秀吉は、何の系圖もたず、一介の土民から、關白まで成り上つたのである。著者が再度まで、「あやしの民のかくなり出でしは、例あらじかし。」と驚嘆したのは尤である。

この秀吉の成り上つた次第、及びその榮華の情態を書くのが、この書の目的であるから、その出生から順次に說き始める。而して、その全體を四卷に分つて進む。第一卷の一は、「長濱眞砂」で、素生から姬路の築城まで、二は、「高松」、高松城の攻圍から信長の薨後まで、第二卷の一は、「袖露」で、信長の葬送から大地震まで、二は「吹上濱」で、紀伊征伐から、佐々成政の自殺まで、第三卷は、「內野行幸」で、全部行幸の次第、第四卷の一は、「淸見潟」で、北野の茶の湯から秀次に關白を讓る迄、二は、「高麗の亂」で、朝鮮征伐の出立から諸將の歸朝までを書いて擱筆してゐる。これらの卷中の題目は、篇中の歌から取つたものと、篇中の事實からつけたものとの兩方であるが、源氏、榮華から來た今鏡、增鏡の篇名に倣つたものであらう。それに、最初に、簡單ながら序文をつけたところは、猶それらの體裁に擬したものたる事を證する。

著者の竹中重門は、半兵衞重治の子であつて、父の緣で秀吉に仕へ、從五位下になり、諸大夫に列せられた。後德川氏に屬して、大阪の軍にも從つた。この故に、その云ふところは確實であらうが、またその一族を顯彰しようといふ氣が多かつたと見える。姉川の戰に、竹中久作が遠藤喜右衞門を討つことを記して、「江北のみならず、あたりの國まで名を擧げし遠藤氏を討つべきこと、かねて云ひかたりしに違はざりしぞ不思議に皆人思へりとなん。」といひ、又重治の卒去を記して、「秀吉卿のわざ、何事に付ても賴もしき人に思ひ給ひし竹中半兵衞主、例ならず心ち惱みしを、藥の道しる人、もてさわぎけれど云々。」といひ、更に、「六月中の頃、終に失せにしぞかし。劉備、孔明を失ひしに異ならず。」とも云つてゐる。これも、事實に遠くないのではあらうが、父を孔明に、秀吉を劉備に比した樣な書きぶりは、賞揚に過ぎて、卻つて當を得てをらぬと思ふ。

しかし、全體に於いて、巧みとは云はれぬが、達意であつて、修飾が少ないので、當時の情況はよく知られるのである。殊に光秀が、山崎の敗後、靑龍寺の城を逃れて、小栗栖を通る時、土寇が起つて、藪中から槍で刺したので、重傷を負うて、從者に頸を斬らせる所などは、敍述簡にして要を得てゐる。まづ土寇の一人が、「夜更、馬の音するは、如何樣にも落人にてこそあらめ。

いざ物具とらん。」といふと、一方では、「よしなし。」ととめるものもある。これを聞きつゝ、光秀等は行く。時は水無月十三日で、「月はたけ登りぬれど、いたう曇りてくら」かつた。この下を行くと、里の中道で、「垣越しに突ける槍、明智光秀が脇に」あたつたのである。しかし、光秀は、さらぬ體で、三町ばかり行つて、里はづれになつて、馬から落ちた。從者が立ちよつて、「こはいかに。」といふと、光秀は、「里の中の野伏のころにて、つき出せし槍あたりぬ。それにていはば、野伏も猶慕ひ來べきと思ひ、さらぬ樣にて、これまで過ぬ。今は行くべき樣にもあらず。首を切つて顏を深くかくすべし。」と云つて絶え入つたのである。朧夜の月下の土寇の相談、それにつぐ不意討、傷きながら追擊を慮つて、里はづれまでさり氣なく行く光秀の遠慮、事實はいかにもあれ、その狀は目睹するやうであつて、光秀の主將としての價値は、十分に察せられる。かういふ類は、所々に見えてことに興味が多い。

著者は、讀書を好み、和歌、書法に明らかにあつたといふ。そのためか、頗る勤王的思想に富んでゐる。信長が入洛する事を述べた序に、保元の頃から世が亂れ、王道が衰へた。平治に、清盛が勝を得てから、法皇の幽閉も行つた。賴朝が起つたが、平氏に代つて專横をした。義時になつては、三上皇を遠島にさへ御遷した。この故に、高時になつて亡んでしまつた。尊氏も、また後醍醐天皇を苦しめ奉つた。義滿は、いよ〳〵增長した。「將軍鹿苑院、太上皇などいひしこそ淺ましし。耳も塞ぎつべし。當時、孝謙帝、弓削の某、太上皇になさんと、宇佐の宮へ宣ひしを、神忿りたまはずや。かくなりもてゆくぞ、心あらん人は悲しびなげかざらんや。」と歎息してゐる。而して、信長に及んで、「織田の信長、帝をあがめ給ふやうなれども、政御心のまゝならず。なにくれの事も、信長はからひ、下が上をしたがへること、五百年許りに及べれば、今更いはん方なし。」と云つて、信長の皇室尊崇の徹底的でないのを不滿としてゐる。然るに、これらに反して、秀吉は、內野に聚樂の亭を構へて、行幸を奏請して、盛んな儀禮を行ひ、遊宴、奏樂、歌會等種種の催をした。猶三日の御豫定を五日にして、出來得るかぎりの饗應をした。而して、御土產に色々の品物を獻上したので、長櫃が三十も續いた。この皇室尊崇は、皇室の御稜威をあらはしたのみならず、秀吉の價値をも高めた。「誠に、天長く、地久しく、御代たもち給ふべき幸なりと、皆人仰ぎ奉るも理なり。」と著者は云つて居るが、これで滿足したらしく見える。この故に、他の卷々には、種々の大事件をも、二段づゝにして併記してゐるのであるが、特に、この事のみは、一卷一段にして、その鹵簿、舞樂、和歌等の次第を、出來るだけ詳記してゐる。秀吉の偉業は、この外にもなほ有る。朝鮮征討のことなどは、殊に大切な逸すべからざる事件である。然るに、

著者は、「高麗の亂」の卷で、極めて簡明に敍し去つてをる、これは、外國の事であるので、聞くところ極めて乏しかつた爲であるかも知れぬが、それにしても、甚しく淡々としたものである。これに反して、この五日の行幸には、特に力を籠めて委曲の筆を進めてゐる。著者の理想の存するところは、これによつて窺へると思ふ。

秀吉の事を書いたものには、小瀨甫庵の太閤記もあり、川角某の川角太閤記もある。甫庵の作も、當時の實錄であるらしい。この豐鑑も、太閤隨身の重門の著であるから、また信憑すべきものである。たゞ惜しむらくは、著者が卷末に記した如く、意外の病にかゝつて、執筆が出來なくなつたので、この末はまだ長いけれどもと云つて、擱筆した事である。もし、著者が、健全で、あとをも書き次ぎ、また前をも訂正し、補輯したならば、他の軍書と違つた立派な、品のいい太閤記が出たであらうものを、惜しむべきことである。

山崎美成の世事百談に、「豐鑑は、豐太閤まだ世にいましたる時にしるしたる書。」と云つてをるが、文中すでに秀賴の事を陳べて、「後、左大臣秀賴公とて、秀吉公の後世をうけつぎたまふ樣なれど、はか〴〵しき勢もあらで、大阪にて自害したまふなり。」ともあり、跋文にも、「秀吉公は、慶長四年八月十八日、例ならぬ心にて薨じたまひしを、東山に葬りて、豐國大明神とあがめ奉りぬ。」とあるから、秀吉薨後のみならず、秀賴歿後に書いたものと思はれる。美成の云ふところは疑ふべきである。猶、大阪落城は、元和元年七月である。著者の歿年は、寛永八年十月である。この書は、この間に出來たものであらねばならぬ。しかも、著者が、重病に犯されたといふのであるから、恐らくは、その晩年の作であらう。しからば、寛永年中の編述と見て差支はあるまいと思ふ。

義　經　記

平安朝の初期から出で來はじめた物語の、竹取や、伊勢や、うつほや、內容は異にするが、殆んど同じ形體を有つてゐた。本ひかる竹の中からの出現、十五夜の月に向つての昇天、初冠のしのぶの亂れ、昨日今日と思はなかつた臨終、波斯の國への漂泊、樓の上の樂聲まで、事蹟は樣々であり、情趣は一でないが、それを貫いてゐるのは、かぐや姫、昔男、俊蔭、仲忠といふ個人であり、それの始であり、また終である。乃ち物語は、個人が、ある時間々々に遭逢し、喚起した事件と、その感想との連續の記錄である。大和となり、落窪となり、進んで源氏となると、複雜さは漸次增加し、現實味はいよ〴〵加はるが、畢竟個人中心の外を出でない。狹衣、濱松中納言

亦皆この範圍を脱しない。

物語は、遂にかくの如きものと考へてゐると、歴史物語といふべき一體が起つて來て、形勢は一變しかけた。榮華は、道長の一生の記錄にとゞまらず、その薨後の人々にも及んだ。賴通、教通等の事をも詳記した。大鏡も、歴代の天皇の本紀から、大臣の列傳まで掲けてゐる。故に、事は天下の治亂興廢までなくとも、人々の生活が、社會の大勢に、いかに關係し、反映したかを示してゐる。乃ち說話は、漸く個人的性質を離れて、公共的傾向を帶びて來てゐる。しかし、猶これらの中心となつてゐるものは、道長であり、その發達と進展とを敍せんが爲に、他の記事は作られてゐるのである。法華經を說かむが爲に、餘教の說かれてゐるのである。故に、通觀すれば、全體の個人的記錄である事は、猶竹取、伊勢、うつほと同樣である。たゞその亞流にして、空想に流れず、現實に卽した點に於いて、異なつてゐるのみである。

平安朝も末期になると、戰亂が頻發した。天位の爭と、藤原氏の內紛と連關した結果が、劇甚な對戰となつた。これが機會となつて、公卿の無力が暴露せられると、武家の勢力が進展した。武家の主藝は弓馬である。鬪爭的本質は獨立を許さない。源平兩氏は、直に戰鬪を開始した。この戰鬪は徹底的に酷烈であつた。從つて、酸鼻すべき事件が夥しかつた。すでに起りかゝつた、簡易で眞意義を有する宗教が、從來の典型的、學問的宗教に代つて盛んになつた。この事實が表面となり、その思想が根柢となつて、こゝに、新傾向の物語が構成せられた。乃ち前の歴史物語が漸次發展して、殆んど面目を新たにしたのである。保元、平治、平家の諸物語、名は物語とは云はぬが、同じ種類の源平盛衰記がこれである。

戰鬪の間には、個人の奮鬪、智畧等著しいものもあるべきであるが、大體から覽ると、個人は從來の如き價を有しない。たゞ集團の一員であるにとゞまる。個人は個人と結合し、一團となつて、一行爲をし、一策動をする。その數はいよ〳〵多くなる。何百人、何千人となつて、集團はいよ〳〵大を加へる。この一方の大集團の源氏と、他方の大集團の平家とが衝突して、未曾有の大戰鬪をしたのである。こゝに於いて、個人の價はありながら殆んどない。私人の勇戰、奮鬪はその部局にとゞまつて、大體に影響するところ、極めて少ないのである。而して、この大集團の作つた結果は、社會的大事象であつて、天下の治亂、國家の興廢にあづかるものである。この展開、葛藤、破綻等を詳密に描き來つたのが、新歴史物語である。個人にとゞまつた物語は、こゝに於いて、天下國家に關するものとなつたのである。

この形勢はます〳〵擴がる。多少の異例はもとよりあるが、戰鬪描寫を主とせぬ歴史物語に於

いても、乃ち大鏡、榮華の後を趁うた增鏡の如きにあつても、後鳥羽、後嵯峨、後醍醐等、各天皇の御上を細敍すること、猶個人を中心とした物語の如くであるが、作者の眞の意思は、承久の事變に端を發した王權の回復が、建武に至つて大成した事實の詳述に存するのである。武家政治の倒壞、天皇親政の確立、これの始終を說くのがこの書の目的であつて、しかもよく達成せられてゐるのである。乃ち、戰爭を寫さぬ物語でも、一轉して公共的となり、公家と武家といふ大集團の衝突、及び結果を描いたのである。

從來の傾向の物語でも、公共的性質を帶びて來た事前述の如くであるが、戰鬪を主とする物語に在つては、一層この傾向が甚しい。平家、盛衰記の後を承けた太平記はそれである、武家政治の倒壞を、公家が企てられると、今度は力が伴つたので、見事に成功する。で公卿の世となり切ると、それに黨した武家の一派は蟄伏しなければならぬ。それが堪へ難いので奮起する。こゝに又、公家對武家の爭が起る。これが、皇室內の御紛爭と混じてあらはれる。天下の大亂がこゝに於いて發生した。然し、力は公卿を漸く離れた。それを得た武家は漸次成功して、公卿は抑壓せられる。この書の名が、すでに太平記である。天下太平の意によつて成つたこの名は、全く個人の記錄ではない。激甚な集團的鬪爭のそれである。事天下國家に關はるのは、云ふまでもない。

かやうに個人的から集團的に一變した物語も、遂に再轉すべき時期が來た。

南北朝閒の鬪爭も、漸次鎭靜に歸すると、室町將軍の威令は增加するが、しかしまた六分の一殿の如き強硬なものもあつて、反抗的態度に出る。故に、爭亂も生ずるが、直に平定せられて、將軍の大はいよ〳〵大となる。從つて、世は大體に於いて太平で、そのしば〳〵の戰に參加した武士も、閑日月を有する事となつた。これがため、遊宴に沒頭したり、女色に沉湎したりして、本能的滿足を得る事もあるが、これでは、起り來る心の饑を充す事が出來ない。博奕をしたり、連歌を試みたり、田樂、猿樂を弄んだりするが、猶趣味が時と共に向上すると、それのみではまだ滿足しない。おのづから眼は過去の時代に馳せなければならぬ。情趣と本能との滿足は、平安朝時代によく現はされてゐる。光源氏の一生などは、その好適例である。源氏物語はこの點に於いても崇拜せられずに置かれなかつた。唯源氏のみならず、それ以外の歌集や、日記や、又他の物語や、又隨伴的に尊敬せられる事となつた。この故に、平安朝時代は憧憬の世界となつて現はれて來たと共に、この時代を理解する人々は、光をもち、翼をもつ人の如くに思はれ始めた。

しかし武士は、僅かの敎養しか有つてゐない。憧憬はしても、眞に平安朝を理解する事が出來ない。人に聽いて僅かに解し得ても、その文化の神髓に徹する事は極めてむづかしい。弓馬の人

であり、刀戟の子であるそれらには、解し難い平安朝の說話よりも、鬪爭に關する逸話逸聞が極めて爽やかに耳に響く。亂箭雨注の狀、汗馬馳驅の有樣には、血の湧き肉の躍らざるを得ない。この勇ましい、心地よい狀態は、集團的ながらまだ隊伍も整はず、大將自身さへ一騎討の勝負をするまで、個人的傾向の強い時代に甚しい。故にその中の強者は、おのづから崇拜の的とならざるを得ない。英雄崇拜はいつの世にもある。況んや比較的手近に、崇拜すべき多くがある。こゝに於いて、平安朝の情的趣味を悦惚すると同時に、その時代には、夷心としていやしめてゐた意志に從つた鎌倉時代の勇烈果敢の行動及びその人を尊敬し出した。

天下はすでに太平に向つた。武治よりも文治の世となりつゝある。馬上の時代は、刀筆の時代となりつゝある。故に高等政策に容喙し得ない武士、また容喙することを知らぬ武士は、すでに國家を念としない。治亂興亡の談義的物語などは、特に聞かうと欲しない。この方面からも、この要求に應ずべきものは、またおのづから個人的でなければならない。

以上の故に、こゝに新たな物語が發生した。それは、風流で、多感で、勇烈で、果敢で、平安朝的情趣を多分に有すると共に、近代的武畧を澤山に藏し、感情的であつて意志的であり、しかも宗教的で、多くの花やかさ、美しさ、立派さに對して、暗さ、悲しさ、寂しさを懷いて居り、而して、凡てに於いて一世に傑出した個人の始終を描いた物である。これが乃ち義經記である。

義經記は以上の如くにして出來たものである。これは丁度曾我物語と揆を一にしてゐる。曾我物語は、不遇な境地にあつて、鋭意父の復讎を企て、多々の歲月を費して漸く成功した兄弟の忍苦の行爲が、著しく世の同情を引いたのであらうが、猶その果敢勇猛の弟と、溫柔敦厚の兄との對照にも興味があつたのであらう。それらの意志的行動にまつはつてゐる幾多の女性との間にある纏綿たる情話にも、また興味を感じたのであらう。乃ち、近代的の意志的行爲と平安朝的感情的動作との混交を喜んだのである。義經記もまた、かくの如きものである。

義經記の作者は詳かでない。著作の年代も明らかにし難い。伊勢貞丈は、「義經記は、作者を知らず。文體如何にも古し。鎌倉將軍の末に記したるものなるべし。」と云つて居るが、山崎美成は海錄に、「義經記、鬼一の條に、だんがいの義經を殺さむと計る處に、御兎やうの軟革とあり。口傳書によれば、錦革は公方御用にて、平人は禁制なり。之に依り、錦革を似せて、栃色にも茶色にも染めて、模樣を白く出したるは、御兎やうの革とて誰も用ゐる事を得しなり。この御兎革の名は、室町將軍の時出來たり。されば義經記の作は室町將軍の時なるべし。」と云つてゐる。更にまた美成は、「義經記は予別に考あり。天文前後のものなるべし。」とも云つてゐる。この別の考と

いふのは、恐らくは、前の御冤革に起因することであらう。しかすると、美成の室町將軍の時といふのは、天文前後の意と考へられる。何故に、美成が天文前後と考定したか不明である。室町將軍の時といふのも、茫漠としてゐるが、大體事實であらう。靜が鎌倉から歸洛して後、「かかるうき世にながらへても、何かせんとやおもひけん、母にも知らせず、髪を切りてそりこぼし、てんりう寺の麓に、草の庵を引きむすび。」云々とある、てんりう寺は、恐らくは天龍寺であらう。この寺は、夢窗國師の開山で、貞和元年に落慶したのである。この寺の名がある以上、この書の著作は、その以前に出ることは出來ぬ。乃ち鎌倉將軍の時のものとして、時代を上すことは出來ぬ。これは美成のいふところと同一である。しかし、それが天文前後まで下し得るか、これは、この書の「判官物語」との關係と共に、研究に値することである。

義經記は八卷、第四卷の半までは、義經の壯榮を寫し、以下はその流離を述べてゐる。義經の父義朝が平治の變に清盛に破られて、尾張で死ぬる。その妾常磐が、その子牛若等三人を引具して、都を逃げるが、逃げおほせずして清盛の許に出る。これによつて、子どもは許され、牛若は鞍馬山に入る。こゝで法師になるべく勉學するが、生來精悍の氣は、徒爾たるべく許さない。義朝の乳母子の鎌田次郎正清の子の正門坊といふものから、慫慂せられて、武術にのみ志す。折柄金賣吉次が參詣に來た。これから陸奥の藤原秀衡の賴るに足るべきを聞いて、急に陸奥下向を思ひ立つ。吉次の伴になつて、承安二年二月に鞍馬を出て、近江に入つて鏡の宿に泊る。と強盜が入る。牛若は勇ましくそれらを切つて捨てる。熱田に著いて、急に元服をして、義經と名乘る。駿河を通つて、兄の阿野の禪師に面會する。下野に入ると、嘗て好意を寄せるやうに云つた陵の兵衞といふのを思ひ出す。義經はそれを賴みに、吉次と別れてこの家を尋ねると、兵衞はあまりに意外なので、同心しない。義經は怒つてその家を燒き拂つて、上野の板鼻に著く。ある家に強ひて一泊すると、それは源氏に緣故のある伊勢三郎義盛の宿であつた。これと一緒になつて、伊達に著いて、吉次に追ひつく。遂に平泉に著いて秀衡に逢ふ。秀衡は大いに喜んで、極めて優遇をする。こゝで月日を送つて、義經は十七にもなつた。京都の樣子を窺ふべく、京に上つて、山科の知る人のところに居た。

この時都に鬼一法眼といふ者があつた。兵法の十六卷を祕藏してゐた。義經はこれを得べく、その家にゆく。が、法眼は與へない。こゝに幸壽といふ娘がある。義經は、これと通じて兵法を取り出させて、諳記する。法眼は、妹壻で弟子である湛海に命じて、五條天神の參詣の時に、義經を害させようとする。義經はこれを知つて、道に要して湛海を斬り、頸を法眼に示して退去す

る。女は悲歎のあまりに病死する。法眼は愁傷したが、しかたがなかつた。

その頃義經が從者になつたものに、辨慶があつた。辨慶は熊野の別當の子である。別當はある時、二位の大納言の女の、天下第一の美人といはれたのが、本宮證誡殿に通夜してゐるのをかいまみて、衆徒に命じて、道に奪はしめる。女が妊娠して十八箇月目に生れたのが辨慶であつた。著しく異相であるので、父は厭ふ。叔母が預つて養ふ。六歳の時疱瘡をしたので、一層醜怪になつた。叡山に上らせて學問させたが、亂暴をして止まない。人々が厭ふので山を出て、修行しまはつて播磨の書寫山に居つた。僧の中に、いたづら者がゐて、いたく辨慶に惡戯をする。辨慶は大いに怒つて、これらと爭鬪する。その一人の有つた燃えさしから、書寫の御寺は燃え上る。辨慶は逃げて都に上つた。

辨慶は都で大刀を取りはじめた。これは陸奥の秀衡、松浦の大夫が、武器を千整へて有つに擬しようとするのであつた。遂に九百九十九腰奪ひ取つた。殘りの一本をと思つて窺つてゐると、義經が黄金作の大刀を帶びて通るのが見えた。これをこそと走りかゝつたが、卻つて打ち勝たれた。殘念であるので翌夜清水に行つて見ると、義經も來る。舞臺に出て打ち合ふ。辨慶は遂に負けて、義經に從ふ事となる。しかし、平家の詮索が嚴しいので、義經はまた陸奥へ逃れ下つた。

治承四年八月に、賴朝が兵を擧げた。石橋山で失敗するが、安房へ逃げて再擧し、武藏へ出て遂に駿河に進む。義經はそれを仄聞して、雄心抑ふること能はず、秀衡に別を告げて、揉みに揉んで馳せ上る。遂に駿河の浮島が原で追ひついて、賴朝と對面する。感懷に堪へずして諸共に泣いた。

壽永三年になつて、義經は賴朝の代官となつて、上洛して、一の谷、八島、檀の浦と平家を急追して、宗盛以下多數の生虜を引連れて上洛し、撿非違使の尉になつて、下向して鎌倉に入るべく腰越に著く。兄との對面をたのしみにして居ると、梶原景時の讒を信じて、賴朝は、それを鎌倉に入らしめない。義經は野心を挾まぬ起請を書いたが、賴朝が聽かないので、申狀をもながながと書いた。しかし、賴朝の疑は晴れないので、止むなく上洛する。賴朝は土佐房をして、義經を窺はしめる。土佐は熊野參詣に事よせて、上洛して、義經の六條堀川の第を襲ふ。が、敗られて鞍馬に逃げて捕はれて斬られる。賴朝は怒つて、北條時政を大將として、義經を討たしめる。義經は院參して、四國九國を賜はるべく、奏聞して、文治元年十一月に都を出て、舟で西國を指す。和田の岬を過ぐるほどから暴風が落ち來る。終夜激浪にゆられて、舟は蘆屋の邊に著く。國人が攻め寄せるのを打ち退けて、大物の浦に上り、渡邊に著き、住吉に入り、轉々して、吉野山

に逃げ入つた。

吉野の僧徒は決議して、義經を追ひかける。義經は愛妾の靜を京に歸らしめて、少數の郎黨とともに逃げまはる。併しあまりに追擊が急なので、佐藤忠信がその代りとなつて奮鬪する。義經は間を得て遁れて、吉野の川上の急湍を跳り越え、人々と別れて奈良に落ちつく。笛を吹きつゝ門外にイんで居ると、奈良法師に太刀を取らうとするものがある。義經の太刀に目をつけて襲擊する。義經はそれらを斬殺して、京都に出る。そこで年を越して、郎黨を召して、山伏を裝うて奥州に下る。妻をも伴うて下る。その乳母の兼房も從つて下る。大津に泊つて、大津次郎の情で海津に著く。荒乳の關を、辨慶の才覺で通り拔けて、越前の國府に入り、平泉寺に參詣する。衆徒が義經かと怪しむが、難なく詣でをはつて、富樫の城の邊を通る。辨慶はわざとよつて勸進を乞うて行く。如意の渡にかゝると、渡守が義經を見て咎める。辨慶は走りよつて、痛く義經を打つ。渡守は卻つて憐んで渡す。直江の津に著いて、人々が出拂つてゐるところに、浦人がおし寄せる、義經一人で應答してゐると、辨慶がかけつける。浦人に笈を探させて疑を晴らさしめるのみならず、逆に寄進をもせしめる。主の居ない舟を奪つて乘つて漕ぎ出す。暴風が吹き出して舟は能登近くになるが、また吹きかへされて、寺泊に著く。念珠が關をも、辨慶の計らひで樂々と通り拔ける。最上川を通つて、龜割山にかゝると妻が產をする。秀衡の迎を受けて、平泉へ到著する。秀衡はまへにまさつた優遇をする。義經は昨日の勞苦を笑草にして、愉快に日を送つてゐた。

文治四年十二月に、秀衡が重病にかゝつた。子どもに遺言して、「義經によく奉仕せよ。」と云つて歿する。暫くして鎌倉から密使が來る。秀衡の長子の泰衡が、心をそれに傾ける。遂に、義經の衣川の館を襲擊する。義經の郎黨はよく防ぐ。併し、遂に辨慶、兼房のみを殘して戰死する。義經は、その間に妻子を殺して自害する。辨慶も兼房も、奮戰して皆死ぬる。泰衡は義經の首を鎌倉に送る。賴朝はそれを咎として、大兵を奥州に出す。泰衡等は皆戰死する。昔賴義が十二年かゝつたところが九十日で平定せられた。

義經記の大綱は右の通であるが、その發達と、その落魄と、第四卷の途中で交代する。この兩者の對照は、極めて劃然としてゐるのであるが、その生涯の中心となるべき活躍の卷は、あるべくしてしかも無いのである。たゞ生立、たゞ流離、かくの如くにして義經の半面は見られるが、全體は遂に知らるべくもない。全體武人としての義經の價値は、その大膽な、敏活な、輕快な用兵と、智畧とに存するのである。それの極度に發揮せられたのは、馬も四足、鹿も四足と云つた

鵯越の逆落し、逆櫓は知らぬ驀進を知ると云つた暴風裏の渡海、赤旗、赤符に海波を紅にした。の浦の鑿戰等であつて、決して、堀川の襲擊の夜の軍振や、吉野の奥の川越等ではない。況んや山伏に化けた臣下の智巧によつての關所潛りではない。公的生活としての義經に、多大の價値が有るのである。實にこの人の力によつて、平氏の勢力は徹底的に掃蕩せられ、鎌倉幕府の基礎が完全に据ゑられたのである。爾來幾變遷はあつたが、武門政治はこゝから完全に開かれたのである。義經の公的生活は、實に歴史的に光輝あるものである。これを寫すことをせずして、その他をのみ描く。著者の心事は、果して何れに存するのであらうか。

如上の理由を推測して、一の谷、八島、檀の浦等に於ける義經の奮戰健闘は、既に平家物語、源平盛衰記に詳記してあるところである。これを再びするのは、屋上屋を架するのみで何の功果もない事である。故に、斷然省畧に從つて、その前後を描いたのであるといふ說もある。或はさうであるかも知れぬ。然し、この書にある義經の母常磐が、清盛に逢つて三子を救ふ次第は、すでに平治物語にも、源平盛衰記にもある。殊に、平治には詳記してある。義經の幼時の事、また奥州下りの事は、平治にも、盛衰記にもある。更に、堀川夜討の事は。平家物語にも、盛衰記にもある。ことに盛衰記には、細かに述べてある。この外に、他書と重複した事も、この書には記してある。故に、重複を顧慮して、大事件をも省畧したといふことは、一應尤もに聞えるのであるが、更に考へてみると、必ずしも眞とは云はれない。唯、省畧したのは大事である。重複したのは、些事にとゞまる。些事の重複は目にもつかない。大事のそれは夥しく興趣を害する。省畧はこれによつて起ると云へば、云はれぬこともない。しかし、著者の想像は豐富であり、筆力は自在である。生立の事でも、堀川の事でも、他書とは面目を改めて、極めて新味あらしめ、興趣の油然として湧き立つ如く記してゐる。故に若し、一の谷、八島、檀の浦の始末を書かうと思ひ立つたならば、別手を出して、他書を凌ぐべき新彩の突々たるものを發揮したに相違ない。それを、全然省畧して、殆んど顧慮しないのである。これは、必ず著者が他に意味するところがあつたに相違ない。乃ち、著者は、義經を公的生活者の優秀なるものとして見ず、私的生活者の俊拔なるものとして見ようとしたためである。

曾我兄弟は、公的生活者として、殆んど、何の價値を有せぬものである。これを精寫して、曾我物語が出來てゐるのは、私的生活者として、立派なものであるからである。前に述べた如く、天下人としての大人物よりも、一家中の武人烈士が歡迎せられて來てゐる時代である。曾我に於けると等しく、それよりも猶俊秀な、多情な、敏活な義經が、私人として迎へられるのは自然の

事である。況んや、大いに發展すべくしてせず、幸福な晩年があるべくしてなかつた英雄兒の始末は、一層世人の情懷を動かしたに相違ない。故に著者は特に公的生活を畧して、この私的生活のみを寫したのである。

「薄化粧に眉細く作」つて敷妙といふ腹卷し、黃金作の大刀を佩き、横笛を吹く艶容、「色をも香をも知る人ぞしる。」と云つて、押して宿を借り、主人の強盗の歸り來るに逢つて、「大刀取り直しこれへ。」といふ膽力、娘を欺いて、六韜の兵法「十六卷を一字も殘らず覺」えた勵精、九尺の築土より飛んで、三尺ばかり空に居つたまゝ、飛び返つた捷疾、二百餘騎が追ひ後れて八十五騎になるまで奔馳する強健、愛妾と別れ兼ねて「たがひに姿の見えぬほどに隔てば、山彦の響くほど」に叫びあふ深情、臣下の鎧と著換へて淸和の號を許す坦懷、「草摺からんで鏑を傾け、えい聲を出して」急湍を一氣に跳ね越す敏速、難產の苦を見るに堪へず同じ道にと嘆き、自害した後、妻に取り附いて落ち入る愛著、義經の風貌は、種々に變化して居るが、一變化每に興味加はり、一轉回每に同情が添ふ。義經の一生は眞に立派な畫であり、且つ詩である。この故に、天下國家に關する大事よりも、これらの些事が重要視せられて、自から、著者をして、半面の義經を書き出さしめたのである。

しかし著者の義經觀は、吾人の思ふところと頗る反してゐる。吾人は、生粹の武人としての義經を想見する。どこまでも強い、しかし徹底的に美しい義經を眼前に描き出す。が、著者の義經は、最初の中には、他人の敎唆によるとしても、元來謀叛の骨頭があり、球打の球を敵の首として、深夜に打つほどの野性があり、夜盜の輩を纍殺する智巧的膽勇があり、陵介の家を燒討つ眞率な殘虐性がある。この豪快と果斷と眞率と、當時の英雄崇拜の人々の標的となるのに十分である。ことに年少氣鋭で、前途の希望の海の如く洋々たるものがあるに於いてをやである。

然るに、西海から平家追討の功を成して歸つて、兄賴朝の旨に忤ふと、腰越の申文が、滔々として數百言情理を盡くしてゐるとは云へ、たゞ兄の怒を必死になつて解かうとするのみである。堀川の夜討の如きは、盛衰記にある方が卻つて勇ましい。この以後はまた云ふを要しない。西海への船中では、まだ英雄的素質の片影を見るが、吉野の漂泊では何等の智巧もない、たゞ奔竄である。荒乳の關以下では、勇將の面影は尋ぬべくもない。六韜三畧も用ゐるところがない。中空から飛びかへつた捷疾も忘れてしまつたやうである。すべて、辨慶を指揮官と仰いで、その指令によつて、僅かに虎口を脫するのみである。龜割山では、從者に、「軍の陣にては、かくおはせざりしものを。」とまで云はれてゐる。恰も、光源氏が惟光によつて庇護せられてゐるやうである。

前期は著しく男性的であり、後期は甚しく女性的である。前期はことに意志的であり、後期は全く感情的である。この男性的で意志的であるのは、武士の理想時代の鎌倉時代の憧憬から發したものであり、女性的で感情的であるのは、平安朝時代の惝恍から發したものである。吾人の見る義經は、たゞ前期のそれの如きものであり、著者の作り出した義經は、兩期のそれである。乃ち近代と前々代との兩傾向の混交の產物である。而して、これに矛盾も感ぜず、意志中心と感情中心と、兩期を併せて認容して、それに多大の同情を寄せたのが、當時多數の人士であつたのである。判官贔屓の語は、この以後を通じ、語は消えても、意は遂に今日にまで及んでゐる。

義經が男性から漸次女性に化し終つたと反對に、最初から男性で、しかも終に到つて一層男性的意氣を發揮するのは辨慶である。清水で義經の臣下となるまで、叡山、書寫山での亂暴に、眉を顰めしめるが、またその眞率さに微笑せしめる。大物の浦の暴風の條以後、舞臺は漸次辨慶に占領せられうとしてゐる。北國落になると、全然辨慶一人が活躍する。辨慶は、義經の言をも聞かない。「君は度々辨慶が申す事を御用ゐる侍はで、御後悔候へ。」とも向つて云ふ。「末も通らぬ靑道心、御諚を耳にな入れそ。」と離れても云ふ。頻りに、主君に反對するが、畢竟調謔に留まる。而してそれらも主として、眞率から發する。これに辨慶の眞骨頭が見える。然し機智が豐かで、記憶が強く、これを利用して、荒乳、如意、直江津、念珠の處々を、守者を欺謾して通り拔ける。然して、最後に、高館で、著しい猛勇を發揮する。放逸で、多智で、殘忍で、而も眞率で、暴勇で調謔性に富んで、全體に於いて意志的であるところが、當時の人心を動かしたのであらう。而して、義經をいよ〳〵女性的、感情的に作り出すと、反對に、辨慶をます〳〵男性的、意志的にこしらへ上げて、兩々相對して、映發せしめたところが、又兩傾向混交の發露である。

辨慶のみならず、義經の臣下は辨慶と大抵同樣の傾向を有してゐる。伊勢三郎も、半生は辨慶に似てゐる。佐藤忠信も、沉勇に於いて同樣である。辨慶は賴朝を羨んで、義經の子に、「果報は伯父鎌倉殿にあやかり參らせたまふべし。」と云つてゐるが、賴朝は「九郎につきたる若黨、一人としておろかなる者」はないと云つて嘆息して居る。男のみならず、白拍子の靜も義經の爲に賴朝の前で氣を吐いてゐる。賴朝は、羨ましからざるを得ないのである。而して、義經はこれらの臣下とともに處々を逃げ廻り、ことに吉野の深雪中を、親密なる言辭を交はしながら、時には詼諧をも弄しあひながら、一團となつて、鬼遊びの如く立ち廻るのである。興が乘つて來ると、敵の近づくをも顧みず、靴の逆穿の故事を、辨慶に語らせて聞いてゐる。而して、少許の餅、少量の酒を分けて、「雨も降れ、風も吹け。」と、安閑として危急を餘處に見なして、團欒歡語してゐる

情態は、鎌倉に安座しつゝも、或は上國の形勢に苦心し、或は臣下の控制に焦慮してゐる賴朝及びその臣下にまさること萬々であつたであらう。下剋上の盛んな時代に於いて、ことに希求せられたのは、君臣の情誼であつた。上が下を憐み、下が上に服して、安定な社會が出來ることは、何人も翹望するところであつた。その時に於いて、この厚い情誼、強い結合を見ることは、極めて愉快であり、且つ羨むべき事であつたに相違ない。判官贔屓の因も、半はこゝにあつたであらう。著者は力を特にこゝに用ゐて、しかも成功してゐる。

國語と漢文を混和するとともに散文と韻文とまた雜糅した。それは鎌倉の初世からである。これが、軍記の特殊の文體であるが、時と共にます〳〵盛んになつた。保元、平治よりも、平家、盛衰記に多く、太平記に至つていよ〳〵多く、義經記に及んで、また多い。「たゞかりそめの旅だにも、主のあとはものうきに、飽かでわかれし面影を、いつのよにかは忘るべき。」の類が、突如として文中に頻出する。しかし、これは意義透徹して、聲調まだ流暢なものである。「伊勢をのあまのぬれ衣、ほすひまもなきたよりかな。入江々々の葦の葉に、つなぎおきたる藻刈船、荒磯かけて漕ぐ時は、渚々になく千鳥、折知り顔にぞ聞えける。霞へだてて漕ぐ時は、沖に鷗のなくこゑも、敵の聞かと思ひける。」は優美の調ではあるが、意義は完しとは云はれない。これらの類が少なくはないが、猶謠曲の道行の如く、多くは、只補綴に止まつて、融合統一の妙に乏しい。これらが用をなす詠嘆的、感傷的の個處には、從來少なかつた今樣も現はれてゐる。實方のそれ、靜のそれ、ちくさの少將のそれ、いづれも悠揚たる間に點出せられてゐる。然るに、それを、急劇の際に、辨慶が歌つて吉野の大衆を嘲弄してゐるのは、作者の頓才機智の現はれである。

この詠嘆的、感傷的の場合と反對に、忽忙急遽の際に於ける記述は、頗る異彩がある。奥州から義經が、賴朝の許へ驅けつけるとて、「馬の腹筋馳せ切り、脛碎くるも知らず、揉みに揉うで馳せ上る」電奔星馳の情況は、今猶睹るが如くである。鬼一法眼の侍女と、子女の上を問答して、「男子二人、女子三人、弟二人。」「家にあるか。」「はやと申す所に、印地の大將して御入り候。」「又三人の女子に何處にあるぞ。」「所々に幸ひて皆上臈壻を取りて渡らせたまひ候。」と彼一句、これ一句、息をもつかせぬ應答、また今聞くやうである。これが進むと、省略が甚しくなる。冒頭から「二階堂の土佐房召せとて召されけり。」とか、「横道なれども、いざや、當國にきこえたる平泉寺をがまんと仰せける。」とか、主格も置かず、突如として要件に入るが如きことも生じてゐる。これは雄勁であり、奇拔であつて、急促の狀がよく寫されてゐるとおもふが、あまりに省略して、「順風に帆を上げ、棹さしよせて、しやつが商物とりて、わが黨どもに酒飲ませて通れ。」

といふに至つては、事陸上に關するのであるから、譬喩と本義と混じて解し難くなつてゐる。「天に口なし、人をもつて云はせよ、と大物の浦にも騒動す。」といふのも、諺と、命令語と一緒に述べて、曖昧に陷つてゐる。かくして、遂に省略か、誤脱か、區別の出來ぬものさへ生じてゐる。「彼處へ行きあふ人々も。」とか「竹の透垣に、槇の板戸を立てたり。」とか、「鞠のかゝりにて、喜三太を召しけるに、喜三太申しけるは。」とか「何ぞ謀叛の者とくみして、世をくつがへさんとの計畧世にかくれなし。」とかの如きが頗る多い。こゝのみ見ると、作者はよほど性急な人であつたやうである。

併し、以上の反對に、極めて委曲をも盡した個處が數多ある。義經と邂逅の際に於ける賴朝、堀川に於ける源三、吉野に於ける忠信、同處に於ける靜等の述懷、遺言、別辭、何れも精細であり、詳密であり、情義二つながら存して、兄弟、主從の間の、情緒の纏綿たるのに、自から涙の浮ぶを止め得ないものがある。これらは、この書中の眼目とするところであらう。併し、些細の不注意から生じた事であらうが、「やう〳〵殘るものとては、石ずゑのみ殘りけり。」とか、「木のもとをみたまひければ、けしからぬ法師の、大刀脇ばさみて立ちたるをみたまへば。」の類は、重複に過ぎて、滑稽に感じられる。

些末の過誤はあり、矛盾はあり、不統一、不調和もあるが、文として全體を通觀すると、不幸であつた一代の英雄兒の始終は、歴々として眼にある。語々に光彩があり、句々に生氣があり、めまぐるしい舞臺の轉換、間斷なき主從の活躍、見るに血湧き、肉躍るを禁じ得ない。この間に滿ちた痛快味、眞實味は、從來の軍記物語にまだ見ざるものがある。室町時代のみならず、鎌倉時代のそれらに混じて、義經記は多くの遜色のないものである。ことに個人的物語の尤として、意義の深いものであると思ふ。

解題　終

月のゆくへ

荒木田氏月之由久閉序

國史亡而稗官作、稗官降而野史出。夫稗官小說之書、方言俗語從細遺大、務摸情事、動涉淫褻、不可以訓也。然宮壼之隱祕、君相之忌諱、往々散見其書者、實爲不少。而中古之風俗、歷世之盛衰、亦可緣焉以考一二矣。今夫諸鏡諸語之屬、其所記載、鮮有關係大體。然亦或可以補史之闕文矣。故雖文獻不足、猶足徵焉者於是乎存。雖欲勿取、君子其舍諸。則稽古論世者、不可不讀也。至如野史、則杜撰無稽、其濫已甚、冗套一轍、愈下愈鄙、奚足觀哉。清渚素有彤管之才。博覽國籍。莫不涉獵。善和歌、通方語、尤多撰著。頃者其良人如松。繕寫清渚所著月行邊者、致諸余、草堂、乞弁一言於曾簡。余受讀卒業、嘆曰、古女流之善詠歌者、世不乏其人。至如有才學善著述者、則若清

紫赤染之流、其書雖以方語乎。文藻之美、記載之博、不愧彼、曹大家蔡文姫矣。然自古於今有幾人邪。今觀清渚之業、富贍殆過乎古人。可不謂曠世之奇乎哉。其書始于仁安終于元暦、記高倉安徳二帝、時事也。蓋諸鏡諸語、今世具存。而獨二帝紀傳散逸不見。清渚乃廣考家乘、旁探野史、刪其煩蕪、省其冗長、潤色以成新書。蓋亦足以裨助史學矣。非如他、艶媚瑣細無益世教、誨婬導奢、徒爲玩具者比也。清渚名麗、荒木田氏、清渚其字。伊勢祝官正四位下武遇女。如松名雅、姓慶德氏、系於慶滋姓。蓋太史保胤之裔也。亦好學博覽、平居以翰墨爲娛。夫婦相共讀書、討論問難上下千載。往歳相携、西遊於五畿間、迂道湖中、顧問草堂。余乃得與相識之。時已有弁言之託。余雖不敢當乎、心竊既許之。爾來數歳、書問往復、情誼益厚。屢得寓目清渚之業。嗟余素暗史學、不諳國籍、則又何以能贊一辭邪。雖然以夙心之不可負也、姑陳所聞。爲序如此。亦唯聊酬我志耳。豈曰爲重清渚之業云爾乎哉。月行方方語也、義具其書中。

安永己亥秋九月

淡海野公臺撰

○よしあし云々　善悪の判別も出來ぬ身よしあしに苦を含めて難波の緣語とし、難波になにはの事と言ひかけてある。
○あからさまに　かりそめに。
○山かたかけて　山に片よせて。
○ゆほひか　ゆるやか。
○心を慰むるつま　心を慰める種。
○住吉　地名に住み心地よい意をかけた
○忘草　續後拾遺、「忘れ草おふとし聞けば住の江の松もかひなくおもほゆるかな。」
○面なれ　知合ひになつて。
○耳とむる　注意して聽く。面白く聞く
○けしきとり　機嫌とり。
○例の　例の如く。

よしあしをわくとしはなき身にも、なにはの事繁き世をかんじて、市の中の住居は、いとむつかしう思ひけるまゝに、しばし里ばなれたるかたにあらまほしく、きさらぎの頃より、靜かなる住居求めて、あからさまにうつろひ侍り。處は山かたかけてをかしやかなるに、前行く川のゆほひかならぬ水の音、後の山の長閑にもあらぬ松風の聲などはあれど、みねの霞、谷の鶯の色音はしも、朝夕心を慰むるつまとなれるに、はた山深くすむ梟のたぐひまで、浮世の事きかぬなむ、又なく嬉しかりき。まして錦織りなす花の盛りは、都人だに山路ゆかしうすめるをと、今行末の春のけしきの見捨て難く、いみじう心のとまりぬるこそは、故都に歸るらむ心地もせず、住吉の里めきて、思ひの外に長るもせらるれど、忘草生ふる岸だにあらぬに、心やすしや。其のわたりの山賤さへおのづから面なれて、いつとなく睦ましうなりにたるに、又蘆垣のあなたにすまふ人は、軒端の松に齡くらぶるばかりの翁なるが、ときゞとぶらひ來て、とはず語りに、古き世の事、くつし出でぬるを聞くには、浦島の子にやと、うち驚かるゝ折もあれど、こよなう耳とむるふし、うちまぜなどすれば、いとめづらかにて、かかる鄙のすまひする人としもおほえず、よしづきたるも、むかしゆかしう思ひて、けしきとりなどすれど、更に我が身の上は語り聞ゆる事もなきを、いとあやしと思ひわたりけるに、しめやかに降りくらす雨の中、例のさしのぞきたり。物寂しき程なれば、折うれしくて迎へ入れつゝ、まめやかにあへしらひ聞ゆるにぞ、

○笑ひまけて　笑ひ設けて。
○あたひなき寶　萬葉集「價なき寶といふとも一杯の濁れる酒に豈まさらめや。」價なきは評價出來ない貴い意。
○をりに逢ひたる云云　折に適した歌など歌はうにの意。
○百敷　宮中。
○すくせ云々　前世の因緣の拙いのだらうか。
○おのれが身の物語　わが身の上話。
○かこつべき云々　今鏡は僅かばかり不足に思ふ點があつた
○其の一本　前に露ばかりと云ふに武藏野の草とおいて古今集「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながら哀れとぞ見る。」によつてある。

うちとけて又同じこと語り出でぬべきけはひなり。今日はこなたもとはまほしくする事のあれば、一杯の濁れる酒などすゝむるに、いといたくよろこびつゝ、心地よげに笑ひまけて、あたひなき寶にもまされりと、そうしつるもをかしきに、さかづきをさし置きつゝ、「あはれ都人なりせば、かやうならむとき、をりに逢ひたる物ずしなどもつかうまつるべきに、田舍に年經ぬる身こそ無下に口惜しう侍れ。」といふさまも、いみじう人めかしげなりと、めざましうおぼゆるを、さりげなくもてなして、さは、「若き頃は、都にや上り給ひし、あなたの事もしり給へるにこそ。」といへば、うちうなづきて、「誠には都にて生まれ侍り。親なる者は、百敷の御垣にまぢかく仕うまつりしとのもりに侍り。相ついで兄にてさふらふ者も、同じごと京に宮仕つかうまつれり。おのれはすくせの口惜しきにや、都の住居の何となう物うげに覺え侍りしかば、かかる山隱れに、うき世を遠くてすみ侍るなり。此の日頃もおのれが身の物語の聞えまほしう思ひ侍りつれど、更に誠とも聞かせ給ふまじきに、つゝまれて過ぎ侍りしを、けふなむ事のついでに申しさふらはむ。そのかみ今鏡と申しし者は、武藏野の草のつゆばかり、かこつべきゆゑ侍りしが、其の一本の故にや怪しう世の人に似ぬ命長さにて、親なども幾代の君につかへ奉りし、失せにし時も更にいくつなどかぞへやるべうも侍らざりき。おのれも百年はいととう過ぎ侍りし。」と聞えたる、いみじう怪しともいへばおろかなり。中々おそろしうさへ思ひて、そゞろげにまでなれば、

○おぼつかなからず　はつきりと確かに
○はかなき文云々　まらぬ書物にある物は見集めた。それは數多くはないが。
○今鏡　十卷、大鏡につゞいて後一條天皇萬壽三年から高倉天皇の嘉應年中までの歷史。續世繼。
○世繼の翁のつらに　世繼の翁と同列に思はれるのは。
○かたはらいたき　お氣の毒に思はれる
○おほんよ　大御代
○星の位　太政大臣左右大臣を三公といふ。三公を天の三台星に象つて星の位といふ。

いらへむかたも知られぬを、とかう思ひしづめて、「いとも〳〵めづらしう承る事の、又たぐひあるべうもなく、さらにうつつとも覺え侍らず。さやうの人こそ、いにしへより遠き世のことも、おぼつかなからず、見しり給へるなれば、すこしづゝ語り給ひなむや。みづから、はか〴〵しからねど、上りての世ゆかしう思ふ心深く侍りて、はかなき文などにかきおきたるは、多からねど、見あつめ侍るに、此くのたまふ今鏡とか聞え置き給ひしを、しるしたるになむ、續世繼とて、今の世にもてはやし侍る。其のつゞきに、いや世繼といふなる書のありと聞き侍れば、見まほしくて、年頃もとめわたりぬれど、世にあまたもなきにや、今にぇ見侍らず、かへりて其のさしつぎなる增鏡は、はやう見侍りしに、中なる一種を闕きぬるなむ、常に本意なく口惜しう思ひ給ふるを、さては其の代の事知り給へる事ありぬべければ、かかるをりかたはしばかりだに、語り給ひなむや。さらばいとうれしうこそ侍らめ。」といへば、翁うち笑ひて、「世繼の翁のつらに思されむは、いとかたはらいたき事に侍り。古ざまの事も、下が下にありつる事こそ、親などもみぇまじり侍れば、おのづから聞き置くふしもさふらふを、天つ君のおほんよ、星の位などの御事は、いかでかはしり侍らむ。」と、つれなげにいひたるも、いとくちをしくて、「いさや代々を重ねたるほどにもあらず、高倉院の御位のはじめまでは、續世繼に見ぇ侍り。又後鳥羽院の御代の事は、增鏡なむ明らかに照らせる。唯安德天皇のしろしめしつる御代、平氏の時めきぬるわ

○わりなくも　無理にも。
○見まくほしさ　見たさ。
○いにしへの跡　更科日記に著者菅原孝標の女が源氏物語が讀みたさに等身の薬師佛の像を作つて祈願した事が記してある。これをいふ。
○いぶせうも忍び　今まで心に祕し置かれて氣が晴れず。
○ふんずる　怨ず。
○すまひ侍らむ　爭ひ申すも。
○かつ〳〵　片端からほつ〳〵。
○ありし雨夜　昔の源氏物語の雨夜の物語らしい氣がした。

たりの事、いくばくならぬ年月なれど、其の程ばかり、おぼつかなくて過ぎなむが、いふかひなく覺え侍れば、わりなくも聞えつるなり。更に〳〵淺はかなる事にはあらず。日頃も其の、いや世繼の草紙の、見まくほしさのせむ方なき儘に、いにしへの跡を追ひて、等身の佛をだに造りて、祈り奉りやせむと、思ひ侍りしに、うれしう逢ひがき人にあひぬる事よ。更に其の書得つるよりも、こよなう覺え侍るものを、いぶせうも忍びこめ給へるなむ、聞えさせむ方なくこそ。」と、まめやかにふんずるにぞ、翁もさすがにあはれと思へるにや、「さばかり御心に入れ給へる事のすぢなれば、すまひ侍らむもこゝろなきやうなり。さらば聞きしりたらむ限りは、くだ〳〵しくともつゞけ侍らむ。さはいへど御垣のうちの御事は、いとおぼ〳〵しう侍れば、其の世にありけむ戰ひのやうなど、むくつけくとも申してむ。そもひがこと多くや侍らむ。」と、あやふげなる樣ながら、かつ〳〵かたり出でたる、いとめづらかにて、ありし雨夜の物語めきたり。

月のゆくへ目次

卷の一の上　高倉院……一一
卷の一の下……三一
卷の二　安德天皇……六六

目次終

月のゆくへ

卷の一の上

高倉院

○先帝　六條天皇。
○いとけなく　時に御年八歳。
○基房の大臣　關白藤原忠通の子。仁安元年兄基實についで攝政となる。
○一院　後白河院。
○柏原の帝　桓武天皇。
○葛原の末葉　平清盛は桓武天皇の皇子葛原親王十代の孫。
○受領　國司の吏務を掌る首席の者。守權守介などもいふ。

八十代の帝は、御諱憲仁と申し奉り、後白河院第三のみこにおはします。御母建春門院は、平の滋子とて、贈左大臣時信の御女にいますかし。仁安三年二月、先帝おりさせ給ひしかば、同じ三月、御位に卽かせ給ふ。まだいとけなく坐せば、基房の大臣攝政し給ふとはいへど、世の政は猶一院ぞよろづ掟てさせたまふ。今年建春門院は后に立たせ給ひ、父の時信の君にも、左大臣贈らせ給ふ。后は又次の年、院號えさせ給ひて、女院など申すも、あらまほしう。上のかくゆるぎなく定まらせ給へるも、ありがたき御幸ひにぞ侍る。この一つ流れなる平清盛とて、其のはじめは柏原の帝の御後なる葛原の末葉と聞ゆれど、世かはり時うつりぬれば、ひたすら弓箭の家となりて、祖父などは受領ばかりなりしに、父忠盛のときにぞ、鳥羽院の御覺えありて、殿上をもゆるされ、雲の上におもひのほり刑

○内の御方人　天皇方の御身方。
○信頼の右衞門督のさわがれ　平治の亂をいふ。
○まめなる心　忠義な心。
○御きそく　御氣色御きうけ。思召。
○いやまし云々　いよ〳〵昇進して。
○三つの階　三位。
○參りまかで　參内と退出。
○かたほ　不十分なこと。器量備はらぬこと。
○一ぞう　一族。
○北の方　清盛の妻は建春門院の姉。
○よせ　頼みとすること。うしろだて。

部卿など聞えし。この清盛は、若くて人數にしもあらぬさまなれど、弓箭の道かしこく、保元のみだれの頃ほひ、内の御方人にて、かひ〴〵しうつかうまつりしより、君も頼もしき者に思しめされしに、其の後信頼の右衞門督のさわがれの折も、まめなる心見え奉りしかばなむ、いよ〳〵御きそくにかなひて、はじめは安藝守などいひしも、いやましになりのぼりつゝ、平治には參議にて、三つの階をさへ越えたり。猶あらまほしう、年々によろこび加へて、をとゞしより内の大臣と申すさへ目もあやなしに、去年の二月には太政大臣の宣旨あり。輦ゆるされて、參りまかでもいとやんごとなく、いつしか世をも心にまかせて、まつりごちけり。類ひろく子どもも、男女あまたもたるに、皆かたほなるなく、とりどりにめでたくて、男はかうぶりし、女はさるべき上達部など壻とり聞えて、思ふやうにかしづきたり。すべて此の一ぞうのみ、いみじう榮えて、賜はれる國も數多侍りとなむ。北の方は女院の御はらからなりければ、よせさへおもくて、世の人もやんごとなく思ひたり。せうとの時忠も、後には大納言などして、いと時の人にいましき。清盛の大臣は、いととく太政大臣はかへし奉り、病にことつけて頭をさへおろし給ふれど、世をしる事は同じ樣にて、六波羅西八條などに家居び、しくして坐すればなむ、六波羅の入道大臣など、人は申し侍り。また津國福原といふ處にも、通ひて住み給へりとよ。今のおほきおとゞには、花山院忠雅のおとゞおはしまし、左の大臣も同じ藤原なる經宗なり。兼實は右大臣

○春日の藤云々　藤原氏の繁昌。春日神社は藤原氏の氏神。
○星の位　三公。
○きびは　幼くかよわい。
○うしろめたからず　氣がゝりなく。
○御儀式　大嘗會。
○河原　加茂川の河原で御身を淨め給ふ行事があつた。
○御棧敷　物見の高い牀の假屋。
○處せう　草葉して鬼屈なほどに。
○さうぞく　裝束。
○大嘗會　天皇御即位の後の始めての新嘗祭で御一代一度の御祭十一月中の卯の日。
○悠紀方　大嘗會の祭場の東を悠紀西を主基といふ。
○神遊び　神樂。

とぞ申し、久我の大納言も、此の頃内大臣になり給へる。何れもやんごとなく、代々其の家にいましければ、春日の藤のしなひもながく榮ゆる春にあひ、源の清き派の末ひろごりて、數そふ星の位の光も曇りなき御代とて、帝のきびはに坐す程も、世の中うしろめたからず。上りての世にも恥ぢぬ樣なり。年の内に御儀式なども行はるべしとて、所々まだしきより、さりぬべき御まうけ仕うまつれり。十月二十一日、豐の御祓とて河原に出でさせおはします。其の日の御有樣は、さきぐも同じ事なれど、思ひなしの、ことにめでたくて、物見車などはさらにもいはず、處々の御棧敷さへ、今めかしう人渡されつるに、あやしき田舍の民どもまで、處せう集ひて拜み奉る。攝政殿はすこし後れてつかうまつらせ給へる。御供の人々、今日をはれと、よそほしう調へられつるさうぞくの、目もかゞやくばかりなるに、容さへとりぐにあざやかなり。十一月二十二日、大嘗會とぞ聞え侍る。御屏風は朝方伊經の君かき給へり。悠紀方の歌は、永範の宮内卿のつかうまつり給ふ。近江國鏡山、

天地をてらす鏡の山なれば久しかるべきかげぞ見えける

神遊びの歌、守山、

皇を八百萬代の神もみな常磐にまもる山の名ぞこれ

此の御事は、嘉應のやうにしるされし書もありと承れば、いづれがいづれにや、老いぬる

○内ゐたり　禁理のあたり。宮城内外。
○上も大内云々　天皇も常に禁中におはしまさず。
○閑院殿　もと藤原冬嗣の第。高倉天皇の時から常の皇居となつた所謂里内裏。
○院の御前　後白河院。
○かなしう　御慈愛になつて。
○坊と聞え云々　東宮と申された時から御即位の日を待ち焦れておはした。
○御ぐしおろさせ　御剃髪。
○さのみねびさせ　さまで御老年といふわけでもないが。
○内　高倉帝も。

身の口をしさは、たしかにも覺え侍らずなむ。かやうのいそぎに、何となく年も暮れて、立歸りたる春の氣色は、空の色よりはじめ鳥の聲草木の緣、すべてはえ〳〵しうめづらしき心地して、都にのみとは思ふべきならねど、とりわけ内わたりは、御節會何くれの御儀式のいとめでたきに、紫の袖をつらねて參り給ふ君達の御樣はしも、これやうれしきといふばかりなり。近き御代には昔ざまにはかはりて、上も大内にははおはしまさず、さりぬべき御節會などの折ごとに行幸せさせ給ひ、常は大方閑院殿を内裏にておはしませば、年の始めには、まづ大内に渡らせ給ひ、十三日にぞ閑院に還らせ給ふ。院の御前は、いとゞしう御心ゆきて、かひある春の光を待ち出でさせ給へる御樣なり。こゝらの皇子達の中に、今の上をばすぐれてかなしうし奉らせ給ひし御事なれば、坊と聞えさせしより、いつしかとまち渡らせ給へりしも、かくゆるぎなく見奉らせ給ふればなむ、今は思召すことなく、御心やすくて、御幸もしげうせさせ給ひ、あらまほしくて過させ給ふ。夏の頃は御ぐしおろさせ給へり。古より佛の道に御志ふかくおはしまして、功德の方によらせ給へれば、御幸もさやうの方にて、高野熊野などにものせさせ給ふ。また御年なども、さのみねびさせ給ふにはあらず、四十に多うはあまらせ給はず。御さかりの程をもやつさせ給へる、いとありがたくめでたき御有樣にて、法皇などぞ申し奉れる。今年卯月には、年の名も仁安はとゞめられて、嘉應のはじめと聞ゆるも、世の中かはりたるしるしにや。内にも岩清水賀

○無下に稚く　六條帝御讓位の時御年五歳。
○齋　齋宮。
○平治のはじめ　平治元年から嘉應元年まで十一年。
○昨日の事　唐崎の御祓のこと。
○前齋院　式子内親王。
○准后　后位に准じて年官年爵を賜はること。
○定家の君云々　藤原定家が前齋院に戀して通つたと世間の噂があつた。
○御かうじ　御とがめ。

茂などに行幸ありて、さま〳〵に今めかしく、琴笛の音も絶間なく、地下の樂人どもの、あなたこなたいそがしく參りかよへる顏つきさへ、ほこらしげなり。かかれど先帝は無下に稚くおはしませば、御幸などもせさせ給はず、何のをかしきふしもなくて明し暮させ給ふるにぞ、さぶらふ人々も、いつも屈し痛げに、もの華やかなる事もなく、いとほしげなる御けはひなり。此の比の伊勢の齋にては、一院の姫宮おはします。賀茂にも同じごと院の姫宮ゐさせ給ひけるが、御なやみによりて、秋の頃おりさせ給へり。此の齋院は先帝の御時もかはらせ給はず、平治のはじめより今までなむ坐（おはしま）しける。式子内親王とて、歌の道にふかう御心入れさせ給ひ、物の折ごとによませ給へる御歌も、ことにすぐれてめでたきよし、世にも聞え侍り。賀茂をまかでさせ給ひて、唐崎の御祓はてつる又の日、雙林寺の姫宮とて、一院の御兄弟ときこえさするみこの御せうそこありて、昨日の事申させ給へる御かへりに、前齋院、

　みたらしや影たえはつるこゝちして志賀の波路に袖ぞぬれこし

　准后の宣旨もかうぶらせ給ひ、かやの齋院とも人は申し侍り。

　此の後の事にや、定家の君忍びて參り給ふなりと、世の中にうちさゝめきけるを、父の俊成、皇后宮の大夫とて居給ひけるが、はやう聞きつけ給ひ、此の事世にひろくなりて院に物の聞えあらば、おもき御かうじこそあらめと、煩はしくて、急ぎいさめ聞えてむと思（おぼ）

○かの宮　式子内親王。
○すさませ　書きなぐさまれた。
○侍從の心を盡し　定家が心を盡して内親王を戀したのも尤もであること。
○うち出でず　言ひ出さず。
○家の風　家に代々傳へて名譽あるかぎ即ち歌道をいふ。
○攝政殿　基房。
○清輔　藤原顯輔の子。

いて、定家の侍從の住み給ふ方に坐しけるに、かの宮の御文のあるをあけて見給へば、

玉の緒よたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

と、すさませ給へるやうなるを見給ふまゝに、いといたく驚かれ給ひ、かかれば侍從の心を盡し給へるも、ことわりぞかしとて、何事もうち出でず歸り給へりとなむ。

此の定家の君ぞ、又なき歌の聖にいまして、つぎ〳〵末の代まで、家の風吹き傳へたるもいみじう、父の俊成はた、たぐひなき歌仙にいまそかりけりとは、誰もしろしめしつる事なれば、今更に聞えさすべくも侍らずかし。ある時俊成の卿、述懷の歌をよみて、定家の許に送り給ふとて、

定めなき世にもわかきは賴みありとにもかくにも老いの身ぞうき

返し定家、

とにかくに老いはあまたの年も經つ定めなき世にわかき身ぞうき

此の御代の頃は男も女も、すぐれたる歌人多く、内わたりにても、さる方に興あることもあまた侍りき。霜月末つかた、攝政殿内の女房達いざなひ給ひ、宇治におはして、終日いとおもしろくあそび給ふ。歌も講ぜられしとぞ。清輔の君題出して、みづから河水久澄といふことを、

年經たる宇治の橋守ことゝはむ幾世になりぬ水のみなかみ

○師走　嘉應元年。
○御輿ふりおろし　延暦寺の僧徒日枝神社の神靈を奉じ、兵甲を帶び入京して訴へ容れられないと神輿をすてて去つたのをいふ。
○らうがはしきどよみ　混亂した騷動。
○しるよしし給ふ處　領地。
○目代　國司の代理者。眼代。
○なめき　無禮な。
○山法師　延暦寺の僧徒。
○山の座主　天台座主。山は延暦寺。
○つかさ位　官位。
○心ゆかず云々　不滿に思つたのか。
○年歸りて　嘉應二年になつて。
○すべなく　せんかたなく。

とて、初めの五文字に心を碎き、久しう思ひ煩ひ給ひしとあるは、此の折の事にもや侍りけむ、確かにぇ知り侍らず。こと人々の歌をも聞き置き侍らざりしこそ口をしけれ。

師走の二十日餘りは、なべて送り迎ふる年のいそぎに、大かたの世しめやかにもあらぬに、延暦寺の衆徒は、公に訴へ申す事ありとて、日吉の御輿ふりおろし奉りしかば、都の中はいとゞらうがはしきどよみなるを、内にも院にもおどろかせ給ふ。これは成親の權中納言のしるよしし給ふ處は、尾張國なりける、其の目代なる右衞門尉政友なめきふるまひ仕うまつれりとて、山法師どもとがめ出でけるなり。やがて院にて事の定めありて、右衞門尉を獄に下させ給ふべきよし仰事ありしかば、衆徒ども心とけて、すなはち御輿もかへらせ給ふ。此のさわぎに成親の中納言つかさとけて、吉備國に流され給ふと聞ゆるも淺ましきに、山の座主なる明雲僧正は、御侍僧とゞめられ給へりなど申すほどに、又時忠の中納言、頭の辨信範と二人、國々に流され給ふ由にて、其のゆかりとある人々さへひき籠りて、成親の中納言はいく日もあらで、御かうじゆるされ給ひ、つかさ位もとのまゝにて、かはらず院にさぶらひ給ふべう仰言侍りとよ。山には法師ばら心ゆかず思ひけるにや、年歸りて睦月十日あまり、また都に參るなど聞ゆれば、院にもうしろめたう思召されて、撿非違使に仰事ありて、みだりがはしき事あらせじと、掟てさせ給ふ。山法師はあながちに訴へ申しつるほどに、院もすべなく思召さるゝにや、二月にまた去年の冬流されし人々召

○かしこまり　謹慎
○御戒受けさせ　佛門に入り得度して戒律をお受けられて。
○あるじ方　款待申し上げた攝政殿。
○念珠　數珠。
○院の上　後白河上皇。
○御ぐしおろさせたまはむ　御剃髪の思召。
○おほき大臣　忠雅
○内の大臣　雅通。
○御樣かへさせ　御剃髪になつて。
○御幸も處せからず　前に上皇として御幸も御窮屈であつたが、御人道の後は以前の如く御窮屈なことなく萬事簡素に。
○いぢみかはし　互にきそひあふ。
○後德大寺の大臣　實定。

し返されて、成親の中納言かしこまりの由にて、こもり居給へり。卯月には、院の御前、奈良に御幸おはしまし、東大寺にて御戒うけさせ給ひ、千僧供養など尊きことせさせ給ひて、かへらせ給ふほど、攝政殿宇治に御まうけうるはしうて、待ち聞え給へり。げによる浪のひまなく岸をあらふ心地して、院も渚きよく御覽じつれば、立ちよらせ給へるを、あるじ方にもいみじうよろこび聞え給ひ、御贈物に、めでたき御念珠御馬など奉り給ふ。院の上、去年高野に御幸せさせ給ひし折は、御ぐしおろさせたまはむの御心づかひちかう思召されけるほどにて、ことに引きつくろはせ給ひしにや、攝政殿車にて參らせ給ひ、おほき大臣内の大臣、さらぬ上達部は、みな馬にて、殿上人などは數もなう仕うまつり給ひ、うるはしき冠のよそひ、あるは直衣にて綾錦をたちかさねたる裝束は、なべてならぬ匂ひを盡し、とりぐ〜に世になき色あひをとゝのへられつるは、來し方行くさきためしもありぬ難き御事なりとて、物見る人々淺ましきまでに思ひたりし。さて程もなく御樣かへさせ給ひてしかば、其の後は御幸も處せからず、よろづ事そがせ給ひて、人多くも具させ給はざりき。十月ばかり、住吉の社歌合とて、人々いどみかはしつるもをかしう、とりぐ〜にみがき出で給へる言の葉の露は、玉の光もなべてならむやは。後德大寺の大臣、大納言と申しし程にや。

ふりにける松ものいはば問ひてまし昔もかくやすみの江の月

○宮の大夫　皇太后宮の大夫藤原俊成。
○女院　建春門院。
○勝負のけぢめ　勝敗の判別。
○春の木かげよりけに　春の樹陰よりはなほ更に。
○御心にもあらで　御不滿ながら御還りになつた。
○御前ども　前驅。

などよみ給ひしも、此の時の事になむ。判者宮の大夫俊成にいましき。又同じ月十六日、女院法住寺殿にて、歌合せさせ給ふ。判者は例の宮の大夫つかうまつり給へる。人々あまた參り給ひ、かたみに劣らじまけじと、ことさらに心づかひして聞え出で給へる言の葉の色なれば、いづれか淺はかなるは侍らむ。勝負のけぢめわきて、次第にあらそひもてゆく程いと今めかしう、人々の詞さへさえ〴〵しう興あるさまに侍りしよ。關路の落葉といへることを、定房の大納言、

清見がた關にとまらで行く船はあらしにさそふ木の葉なりけり

同じ心を、源頼政、

都にはまだ青葉にてみしかども紅葉散りしく白河の關

とりぐ〜に優なる事のみに侍れど、こまかにも聞き置き侍らず。

其の頃院は法勝寺に御幸あり。攝政殿も參らせ給ふ。神無月も二十日餘りなれば、風に亂るゝ紅葉の色は紅の雨にやと見ゆる。木のもとのみならぬ詠めに、御前にもことに興ぜさせ給ひ、人々も春の木かげよりけに立つ事やすからず思すめれど、暮れぬれば御心にもあらで還らせ給ふ。又此の比世に淺ましき事の侍りしよ。上の御元服の御さだめとて、攝政殿内に參らせたまふ。御よそほひことに引きつくろはせ給ひ、御前どももきら〴〵しうて、黄昏もすぐる程に出で立ち給ふ。大炊の御門、猪の隈のわたりに、思ひかけずあやし

○こゝら　數多。
○ゆくりもなき事　不意の事。
○ひたぶる心云々　心の一途な盗賊。
○むくつけう　恐ろしく。
○ぴんなし　都合わるい。折がわるい。
○世づかぬ事　世なれぬ事。椿事。
○六波羅の入道　清盛。
○物へまかりける　或所へ行つた途中。
○かしこまり云々　敬意を表はさずに。
○御前　前驅の者。
○なめけ　無禮。
○うまご　孫。
○物して　物々しく
○物して　厭はし。口惜しい。
○思ひしらせ　復讐して我が殘念に思ふ心を晴らせようと。

の者どもこゝら待ちうけ奉りて、えもいはずむくつけきふるまひをしつゝ、御供なる人々を、いたくなやまし聞えて、みだりがはしう追ひのゝしり、もとゞりをさへ切りたるものか。ゆくりもなき事にて、用意すべくもあらず、誰も〳〵あきれ惑ひたり。殿は唯恐ろしきに、物も覺え給はず、いみじきひたぶる心ある白波どもの、立ちさわぐにこそはとおほいて、いとはしたなくむくつけうさへなり給ひ、御車のうちにひれふし給ふ。辛うじて御前ども參りあつまりしかど、いひしらず見ぐるしき姿なれば、今夜はぴんなしとてかへらせ給ふ。かう世づかぬ事は、盗人などのしわざにはあらず、六波羅の入道のはからふこととて、資盛の侍從の仕うまつれるにや。これは七月の頃、資盛の侍從物へまかりける道にて、殿に行き逢ひ奉りしに、みしらぬ樣に、かしこまりもおかず打過ぐるを、殿の御前どもなめけなりと咎め出でて、侍從を馬よりひき下し、いみじうのゝしりければ、からうじてにげていにけり。此の侍從は小松の重盛の次郎にて、六波羅の入道のうまごなり。いつしか此の事かくれなく、入道も傳へ聞きて、いとものしとおぼいたり。もとより心をさなくくね〳〵しき人なりければ、いかで其の恥すゝぐばかりの事を物して思ひしらせ奉らむと、あながちにあたまへつゝ、起居心にかけわたり給ひけるを、殿には露しらせ給ふべきならねば、唯いか樣なるしれものにかと思されしに、かうなりけりと知りはて給ひては、今少し思しよらぬ事にて、めづらかにも淺ましうも、樣々に御心もうごくべし。やう〳〵

○小松の大納言　重盛。
○たい〳〵しき云々　不始末なけしからぬ事だと憤つた。
○めやすき　見苦しくなく。
○花山院の大臣　忠雅。
○攝政殿　基房。
○御冠　御元服。
○朔日の節　元日の節會。
○さはふ　作法。
○まほにめでたう　よく整つてうるはしく。
○御引入　元服の時冠をかぶらせる人。
○朝覲の行幸　天皇が太上天皇又は皇太后を拜し給ふ行幸。
○院　後白河院。
○女院　建春門院。
○あげおとり　童姿で美しい兒が元服して見劣りすること。
○加階　官位昇進。
○大饗　大臣大饗。

世の中にも、あいなき事にいひ出でければ、小松の大納言聞き給ひ、いはむかたなう淺ましくて、いとたい〳〵しき事なりと、むつかりけるが、やがて資盛の侍從をば、京にもあらせず、伊勢の方へ遣はしたり。此の大納言は心おきてひろく、あくまで用意深く、思ひやりもことにものし給へば、入道の心のいちはやく、わづらはしき事のみ、折にふれて多かるを、萬にいさめ聞え給ふればなむ、おほやけ私めやすき樣にてぞ過ぎ行きける。まことと花山院の大臣、六月ばかりより太政大臣退き給ひしかば、冬の頃、攝政殿ならせ給ふ。あけむ年は上御冠の事あるべしとて　さやうの御まうけとぞ聞えし。年ふりて朔日の節は、例のさはふかはらず、大内にて聞召す。三日に上御冠奉る。十一にならせ給へど、いみじうおとなびさせ給ひ、御容もまほにめでたう、御心ばへもなつかしうおはします。殿御引入つかまつらせ給ひ、左のおとゞ御ぐしをさめ給ふ。十三日には、朝覲の行幸あり。院も女院もめづらしう待ち見奉らせ給ひ、あげおとりだにせさせ給はず、いとゞしうなまめかしさそひて、あてにけだかき御樣を、限りなう御覽じて、かつはゆゝしうさへ思召されて、御涙も忍びかねさせ給へり。御贈物二なう思しまうけられて、ことにめでたきさまなり。院につかうまつる人々は、ほと〳〵加階などして、よろこびあふめり。上は去年より大内におはしまし、閑院をば殿に返し奉らせ給ひける。十九日そこにて、おほき大殿大饗行ひ給ふとて、殿原引連れて參り給ふ。これはたいつくしうはえ〴〵しきけはひなり。

○つゝしませ給ふ年　御厄年。
○宇津保柱　雨滴をうける爲に中をうつろにした柱。
○なのめなるなく　平凡の者なく皆すぐれて。
○さうじみ　正身。その本人、德子。
○入道大臣　清盛。
○大牀子　天子の御膳をのせる机。
○火燒屋　衞士が火を焚いて禁中の警衞をする所。
○色ゆるされ　禁色をゆるされた。
○平絹　平織の絹。
○亮　皇后宮職の次官。

月の末には上こゝに渡らせ給ひ、又内裏になるとて、殿はことさらにみがきとゝのへ奉らせ給ふ。今年は上のつゝしませ給ふ年とて、夏の頃嘉應は止められて、承安元年にぞ改まりはべる。十二月一日弓場始なりける夕つかた、いかゞしけるにや、炬火の火、宇津保柱にもえつきたり。人々まどふ程に、賴政の右京の大夫從者などして、とみにうち消させ給ひしかばなむ、上いみじう賞めさせ給ひ、正四位の加階たまはせ、郎等なる源與をも馬の允になさせ給へり。六波羅の入道は、かしづき給ふ御女、内に奉らむとて、こゝらいそぎとにめでたく、女房なども、なのめなるなく、えり調へられて、あまたさぶらふ。其の夜も御車、處せう引きつゞけ、よそほしうて、親族の殿原、御前仕うまつり給へり。さうじみは十五になり給ふ。やがて女御の宣旨あり。かひありて時めき給ふを、入道大臣も嬉しう思すべし。又の年きさらぎには、女御后に立たせ給ひ、中宮とぞ申しき。御局は藤壺なり。いつしかとあらたまりたる御しつらひめでたくて、大牀子立て、火燒屋など御前にかきすゑつるも、いとけだかく、御帳の前の獅子狛犬のけうときかほつきさへ、すさまじうも見えず、何事もはえ〴〵しき心地して、女房達のなり容はしも、いへばさらなり、色ゆるされたるは、織物の唐衣、さらぬは平絹などの、けぢめさやかなるも、さる方にいとほしき物から、さま〴〵にをかしう見渡されたり。亮には宮の御せうとの重衡なり給ひ、權亮には小松の大納言の太郎なる惟盛の少將とぞ聞え侍る。此の頃の世は、かの入道の一ぞうのみ時にあひ給へるに、后の御ゆかりにさへいましければ、此のすぢの君達はいとゞしうはなやかになりまさり給へり。打續き平氏の后に居させ給ふ事は、ためしもあり難く、又、「春日の神の御慮もいかゞ。」と、世にはかたぶき申す人も侍りしなど、何事も入道の心なる世とて、かくはさだまらせ給へるなめり。大臣達上達部の中にも、姫君もたまへるあまた侍れど、入道の心の煩はしさに、思しつゝみて、此の後女御奉りたまふ人もおはしまさず。中宮のみなむ、ならぶ人なく御心やすげにてさぶらひ給ふ。彌生には日吉に行幸あり。春の光も長閑におもしろかるべき折なれば、君達我も〳〵と仕うまつり給ふ。樣々の御裝束は、花の錦に色を爭ひて、いとはえ〴〵しう、いみじき見物なりとて、女車なども處せう立ちつどひて、こぼれ出でたる袖口どもの、なべてならぬも多かりければ、若き殿原、いたう心づかひせられ給ふ。陪從なども、ことに調へさせ給へり。終日遊びのゝしりて、暮れぬればかへらせ給ふ。攝政殿は又初瀨に詣で給ふ。これはたいかめしき世のひゞきなり。寛治の古きためしとて、上達部殿上人あまたさぶらひ給ひ、おの〳〵花を折り盡したるよそほひども、心ことにひきつくろひ給へり。又いと珍らしう侍りし事は、寶莊嚴院にて尙齒會とか、賴政敦賴など六十七十にあまりたる七の翁あつまりて、歌よみ遊びし侍るなり。淸輔の催し行ひ給ふ事にて、其の身も七人の數に入り給ひにし。垣下には歌人

○御ゆかり　御親戚つゞき。
○春日の神云々　春日は藤原の氏神で、平氏から后が立たれては、藤原氏が平氏に壓倒されるので、神慮もどうかと。
○仕うまつり　隨行された。
○こぼれ出でたる　女車の簾の外に出した裝束の袖口。出衣
○陪從　管絃をする地下樂人。
○尙齒會　年老いた人の集まる會。
○遊び　音樂演奏。
○淸輔　顯輔の子。
○垣下　饗宴の時正客の外の相伴の人。

○齋宮　後白河の皇女惇子内親王。
○御トにあはせ　齋宮はトして定まる。その占形に當られる
○前齋宮　後白河の皇女休子内親王。
○野の宮　嵯峨。
○あたらし　惜し。
○大炊の御門の大臣　右大臣藤原公能。
○二條院の姫宮　懐子内親王。
○内外の神　内宮外宮の神。
○殿　基房。
○又次の年　承安三年。
○法服何くれと　法服の事や何やかやと準備されて。
○おもだゝしう　面目ある樣子で。

達おほくて、さまゞにめでたき日の遊びとて、末の世まで語り傳へ侍りしよ。まこと齋宮はさきの御代のはかはらせ給ひ、今の上の御位の初め、御トにあはせ給ひしは、前齋宮の御兄弟にて、一院の姫君におはしまし、嘉應の初め、諸司に入らせ給ひ、秋の頃野の宮にうつろはせ給ひて、次の年伊勢に下らせ給へりしに、今年五月御病ありて、かくれさせ給へるよし、都に聞えあげたり。つかさにては、かたじけなしとて、かねて頭なる忠重が家にまかでさせ奉りしとよ、内にも聞召し驚かせ給ふ、院にもあたらしう思し歎きたり。十六にぞならせたまへる。御母は皇太后宮とて、大炊の御門の大臣の御女におはしまし、實定の大納言の御兄弟ぞかし。齋宮かかる事のあるには、廢朝とて、しばしは朝政も止めらるゝこととなむ、承り侍る。賀茂にも式子内親王の御かはりには、二條院の姫宮、先帝の御妹なりけるみこなむ、居させ給ひしかど、こなたも去年御なやみにて、まかでさせ給ひ、其の後は御定めも侍らざりき。水無月の初め、伊勢には公卿の敕使立たさせ給ひ、内外の神に、齋宮の御事を申させ給へり。殿も今は攝政退かせ給ひ、關白とぞ申すめる。神無月には祇園稲荷などに行幸せさせ給ひ、又次の年卯月ばかり、石清水賀茂へ行幸侍り。女院年頃の御願にて、最勝光院供養せさせ給ふ。十月にと思召されて、法服何くれといそがせたまひけるに、行幸さへあるべう聞かせ給へば、いとゞおもだゝしう思召されて、ことに御心づかひせられ給ふ、内よりも御捧物處せき樣なり。御導師は興福寺の覺珍僧正參

○御齋會　正月八日から七日間大極殿で最勝王經を講ぜられる公事。
○事ゆかず　仕事が進捗しない。
○一切經　佛經の總名、經律論の三藏。
○千壇　壇を千個も作つて行ふ祈禱。
○院の上　後白河。
○二萬の里人　備中國。歌枕「貢物運ぶよぼろを數ふれば二萬の里人數そへにけり。」金葉集。
○下が下　極めて卑賤な。

り給ひ、いみじう尊き事の限りに侍り。御齋會になずらへて、賞ども行はる。其の日の事は、中宮の御せうとの宗盛の中納言承りて、つかうまつり給ひしかばなむ、やがて此の賞とて二の階のぼり給へり。六波羅の入道は、津國輪田の御崎のわたりに、あらたに島をつきこめむ事を思ひ立ちて、日頃心を盡し、人々に仰せて、いそぎ給ひ、きやう〳〵となりぬるやうなれど、汐の滿干ものどけからぬ荒海につゞきたる處とて、ともすればうちよする波風にとられて事ゆかず。いたづらに日數ふるを、入道もしわびて、海にます神のたゝりもおそろしう、あらぶる神の御慮をなだむばかり祭祓などをものし給ひ、又石のおもてに一切經を書かせて、水底にしづめ給へり。さて後つひに事なりつればなむ、時の人、經の島とぞ申しき。そこにて阿彌陀供養法行ひ給ふ。入道のさたにて、千壇などいかめしき法の會なり。法親王達をはじめ奉り何くれの僧正僧都など、處々より集ひ參り給ひ、いとたふとくて、院の上さへ御幸せさせ給へり。今は秋津島の波をさまり、豐葦原の風靜かにて、相坂の關守も心ゆるびし、二萬の里人の貢物もおこたらず、國民ゆたかなる時とて、君も臣も思ふ事なく、佛の道にさへ心よせて過すなるがありがたく、聖の御代ばかりなる君のひかりのあまねさを、下が下なる賤山がつまで、例なう思ひ奉れば、都も鄙も心のどかにてあるに、流れ行く年波のみなむ、いとあわたゞしうて、今年も過ぎぬ。たち歸りたる空の、一夜にあらたまりぬる程もしるく、都の山もけさは霞みて、日の光のうらゝかさ

○豐の明　朝廷の宴會の總稱。特に豐の明の節會で大嘗會新嘗祭の翌日の饗宴。
○御引直衣　天子のお召しになつた裾の長い直衣。
○宮　中宮德子。
○柳の枝云々　柳の枝に花を咲かせた樣な御樣子。
○心にくき　奥ゆかしい。
○召しまつはさせ　常に御傍はなさず召使はれた。
○はなれさせ給はぬ　御あはひ　女院と中宮とは叔母姪の御間柄である。
○八條の二位殿　平清盛の妻時子。
○山吹　襲の色目。表薄朽葉に裏黄。

は、宮もわらやもへだてなけれど、九重の御垣の内は又ことなり。御かた〳〵の御よそひより初め、すべてめでたう豐の明のいまめかしう、庭の砂は猶殘れる雪の色も寒からず、外重もる衞士の燒く火の煙さへ、まだき霞に立ちそひたるこゝちして、竹の臺に通へる風は、鶯よりさきに、萬代の春を告げそめたり。上はいつしかと中宮の御方に渡らせ給ふ。御引直衣の御姿かぎりなうめでたきに、宮はた御物具うるはしうて、さしならばせ給へるは、柳の枝にさかせたる御樣なるを、ちかうさぶらふ人々、目もあやに見奉れり。その中に右京の大夫といへる女房、ひとりごとに、

雲の上にかかる月日の光見る身の契りさへうれしとぞ思ふ

宮にはやんごとなき人々もあまた參り集まりつれど、とりわけ此の右京の大夫の君を、すぐれて心にくきものに、殿原も定め給ふ。宮もかひ〴〵しう睦まじき方にて、人より殊に召しまつはさせ給へり。上はやがて一院女院へ朝覲の行幸せさせ給ふ。いとゞしうねびまさらせ給へる御さまかたちを、院の御前たち盡きせず、いたはしう見奉らせ給ふ。女院は時々内に參らせ給ひけるが、中宮ももとよりはなれさせ給はぬ御あはひにて、常にもうとからず聞えかはさせ給ひ、折々は御對面なども侍り。此の程女院内にさぶらはせ給ふとて、宮の御方にも入らせ給へり。宮の御母なる八條の二位殿も坐す。とり〴〵にめでたき御樣どもにて、女院、紫のにほひの御衣、山吹の御うはぎ、赤色の御からぎぬに、蝶を

○紅梅　菜色。濃い桃色。
○樺櫻　表蘇芳に裏赤花。
○柳　表白に裏薄青
○小袿　襲の上著。唐衣の下に著る物。
○いにしへの宮のうち　道長時代の後宮に比していふ。
○宮のすけ　重衡。
○權の亮　維盛。
○除目　任官の公事
○道々のざえ　諸の學問技藝の才幹技能
○心はみ　心づかひする。
○小聞取　人數を二組に分けて技藝を鬪はす左右の座席をいれ違ひに組合はすこと。

色々に織りたりしを奉られたり。宮はつほめる色の紅梅の御ぞ、樺櫻の御うは著、柳の御小袿、あかいろの御唐衣、さくらを織りたるなど、いとゞ御にほひおほく見えさせ給ふ。二位殿もうるはしきよそひに、けしきばかり御裳引きかけておはします。こなたかなたの女房、色々の花の錦をたち重ねたるさうぞくの、何れとなく清らにて、さらに同じきもなく、色も匂ひもなべてならず好み調へつるは、吉野の春、立田の秋も、同じ時に見る心地するばかりなり。御心のどかに御物語聞えかはさせ給ひ、いたく更けてぞ、女院歸らせ給ふ。この御前は、いにしへの宮のうちにも恥ぢぬばかり、容心ばへある若人のつどひてさぶらふとて、若き君達は物いひ處にし給ひ、常に立ちなれ給へり。月の夜などは、宮のすけ權の亮など參りて、遊び明し給ふ事も絶えずなむ、今は上もおとなびさせ給へば、除目も御前にて行はるとて、殿原夜々參り給ふ。上わかうおはしませど、御心ばへめでたく、道々のざえかしこく物せさせ給ひ、文のかたをも、殊に好ましうせさせ給へば、君達も心ばみ給へる多く、古き博士どもも時にあひつゝ、おほやけわたくし、優なる遊び繁く、花鳥の色音もはえあるころほひになむ侍る。彌生一日、親宗の右少辨の家にて、詩合あり。例の小聞取にかたわけて左右かちまけをいどみたるほど、興あるさまに侍りしとよ。卯月には勸學院にて、藤の花の宴あり。君達博士どもつどひて文講ぜらる。題は藤爲佳會媒などぞ聞えし。又關白殿にては、月の末學問料の試み侍りて、松臺曉調琴といへる事を題に

て、聞の字をもて韻には定められき。今年は春より雨のうるひ心もとなく、苗代にせき入る水さへかれ〴〵にて、蛙の聲もまどほになり行くまゝに、夏になりては早苗とる田子どもの、すべなくまどひて、まめやかに侘びつゝ、五月はさりともと、せめて待たるゝ五月雨さへ、なほつれなかりければ、子規の聲も頼みがたなく、公にも民の歎きを御心ぐるしう思しやらせ給ひ、雨の祈り仕うまつらせ給はむとて、しるしある大德達召されて、最勝講行はれたりしに、第二日の夕、座の講師は澄憲僧都なり。いみじき御きらにて聞えあぐる言の葉もゆゑ〳〵しう、きく人々の涙もとゞめがたく、なべての袖どもうるひ渡りて、尊くたのもしう、雨ふるべきよしの表白めでたうつかうまつりて、高座より下るまゝに、おどろ〳〵しうふりつゞき出でたる物か。人々淺ましきまでに覺ゆるに、世の中よろこびのゝしる聲さへ、うちあはせてどよみたり。公にもいみじき事に思し召されて、表白をば奉るべう仰言あり。講師はすなはち、大僧都になさせ給へり。こののち僧都によろこびきこゆるとて、俊惠法師、

雲のうへにひゞくをきけば君が名の雨とふりぬる音にぞありける

相撲の節は、年々聞召すなるを、いつの頃よりか絶え〳〵にて、近き世には音もなかりしに、今年あるべしとて、文月初め召仰あり。此の程小松の大納言右大將に成り給へり。よろこび聞えにありき給ふとても、上達部殿上人あまた扈從し給ふるは、珍らしきまでなり。相撲は二十七日とて、上わかう坐せば、いみじきことに興ぜさせ給ふ。左大將は師長の大納言よ。いと時の有職にて、人がらもやんごとなきに、右大將立ちならび給ひ、さらに劣りげなく、用意もてなしなどは、まさざまにさへ見え給ひぬ。つかさのすけたち、かた〳〵になみさぶらひ給ひ、樂所の物の音いみじきに、いかめしき最手など、國々よりのぼりければ、左右たちわかれて、勝負をいどみのゝしりたるほど、夕顔も葵の花も、何れか色のうせむやはと覺えて、こよなき見物なりしかし。月の頃になりては、いづれの御前も御遊びなど、好ましうせさせ給ふ。殊に晴れたりける夜、うへ中宮の御方に渡らせ給ふ、御笛ふかせ給へるか、いとおもしろきを、人々めでたう聞きけるに、右京の大夫の君とりわけめで奉るとて、宮「かたくなしき程なり。」と、わらはせ給ひ、上にも申させ給へば、「そは空ごと。」など仰せらるゝを聞きて、右京の大夫、

さもこそは數ならざらめ一筋にこゝろをさへもなきになすかな

とひとりごつを、大納言の君とてさぶらひ給ふ上臈聞き付けて、御前へ啓し給へば、上いたう笑はせ給ひ、御あふぎにかきつけさせ給ふ。

笛竹のうきねをこそは思ひしれ人の心をなきにやはなす

上はこと物よりも、笛をのみなむ、いみじきものにせさせ給ひ、御心入れさせ給へば、常にめでたき音に吹かせ給ふ。實定の大納言内に參り給ひける折、萬歳樂をいとおもしろ

○雨のうるひ　雨の潤ひ。
○まめやかに侘び　衷心から心配し歎いて。
○しるしある大德　應驗の著しい高僧。
○最勝講　清涼殿で最勝王經を講ぜられる公事。
○表白　表はし述べること。又其の文章
○おどろ〳〵しう　恐ろしく。
○出でたる物か　物かのかは歎辭。
○相撲の節　諸國の供御人（相撲を奉仕する人）を召し集めて宮中で相撲をさせて主上が御覽になる公事。七月行はれる。
○小松の大納言　重盛。
○有職　故實典禮の學者。
○まさざま、まさり　ざま、まさつた樣。
○樂所　内裏の雅樂を司つた所。相撲のがくやにあてた。
○最手　相撲の大關
○かたくなしき　見苦しい。
○上臈　身分高い婦人、二位三位の典侍をいふこともある。
○萬歳樂　隋樂、平調二十九曲の一。一名楊帝萬歳樂。

○あやしううちまぎれて　雙に前後混亂して。
○おほ〳〵しき　はつきりしない、曖昧である。
○上　高倉天皇。
○院　後白河院。

う吹きすましておはしましける。大納言は、上の御笛はじめて聞き奉り給ふに、いたう驚かれ給ひけるが、まかで給ひて、又の日、内の女房の中に申し給ふ。

ふぇのねの萬代までと聞ぇしを山もこたふる心地せしかな

これは此の年の事には侍らず、治承の頃にもや侍らむ。あやしううちまぎれて、おほおほしきこそかひなけれ。上は又歌をも好ませ給ひ、をりふしによませ給へるも多く侍り。秋の末紅葉霧透といへるを題にて詠ぜさせ給ふとて、

薄霧の立ちまふ山のもみぢ葉はさやかならねどそれと見ぇけり

院も此の道に御心よせさせ給ひける。月紅葉をてらすといふことを、殿上の人々につかうまつらせ給ふとて、御みづからもよませ給ふ。

もみぢ葉の月の光をさしそへてこれや赤地の錦なるらむ

○頭おろして　剃髪して。
○あとどめて　前の人のした事の跡を尋ねて。
○かやうの云々　歌の道にすぐれた名僧たち。
○長月　承安四年。
○ことに堪へ　その道卽ち今様の道に堪能な人々。
○御遊び　音樂。
○又の年　承安五年で七月安元と改元。
○加階　位階を加へのぼすこと。

巻の一の下

西行法師とて、いみじき歌の聖なりけるは、往昔鳥羽院につかうまつりし人なりし。頭おろして國々修行しけり。いづれの年にか、内の上につたへ奏し奉る事侍りけるに、かきそへて奉りける。

あととめて古きを慕ふ世ならなむ今もありへば昔なるべし

たのもしな君きみにます時にあひて心のいろを筆に染めつる

この御代にはかやうの方すぐれたる大德達さへ多く侍りしよ。長月、院のおはします法住寺殿にて、今様合とか、ことに堪へたる殿原、三十人選びて召させ給ひ、夜ごとに一番づゝ、勝負の御定めあり。大將師長、按察資賢、判者に召されてさぶらひ給ふ。はてには御遊びもあり。いと今めかしうおもしろくて、殊に興ぜさせ給ひ、院の御前今様詠はせ給へる。世に珍らしき事にぞ、人も申し傳へ侍る。又の年は睦月の四日、法住寺殿に朝覲の行幸せさせ給ひ、御遊びありて、上御笛あそばしつるを、院聞召し驚きて、いといたう感ぜさせ給へば、上も嬉しう思召しさて御笛の師なる實國の大納言、正二位の加階賜はせたり。大納言は面目（めいぼく）ありて、ことに畏（かしこ）まり申し給ふ。年のはじめより、天が下疱瘡といふも

○上の御心地　天皇の御病氣の御容態。
○しふねき　執念きで、病氣のしつこく癒らぬをいふ。
○おこたらせ　病氣が快癒する。
○陣　節會公事などの時禁中で官人列坐するところ。
○横川　比叡山三塔の一。
○根本　比叡山延暦寺の根本中堂。
○うつぼ　うつろ。
○釘貫　柵。
○山階寺　興福寺。
○左大將　藤原師長
○小松の大將　重盛

のあまねくて人々惱みわたるなりと聞えしに、彌生には、上さへ其の御けしき坐すを、大臣達も思しさわぎて、御祈りかず〳〵に仕うまつらせ給ふ。さはいへど上の御心地は、しふねきにもおはしまさず、やがておこたらせ給へり。世の中にはなほわづらふ人絶えずとて、さやうの事により、又七月、年の號あらためらるべう仰事あり。博士どもとり〴〵に文字選びて奉りしを、左右の大臣をはじめ上達部、陣に參り給ひ、おの〳〵定め申し給ふとて、それはかれはなど聞えかはし給ひけるに、遂に安元元年にぞなりぬ。長月には野分、れいの年よりいみじくて、都も鄙もおどろ〳〵しう吹き迷ひし程に、横川なる根本の杉も吹き折られけりとよ。これは千年に及ぶばかりの木にて、其のうつぼは、慈覺大師かりそめに住み給ひし跡とて、山法師ことに尊びつゝ、みだりに人をよせじとて、めぐりに釘貫しつらひ、鳥居など立てたりしに、かく淺ましき事を、僧達いたく歎くめり。又天王寺にも、額をかけられし鳥居なむ倒れ侍りにし　奈良にも、山階寺に、そこなはれ給へる御佛おはしますよし聞ゆれば、内にも、殿にも、淺ましきことに思し驚かせ給ひにき。京にも、人々の家ども多くたふれまろびて、おそろしけにぞはべりし。冬つかた、左大將内大臣に成り給へり。これは春の頃内大臣になりし久我の雅通の大臣うせ給ひし御かはりにや。小松の大將は、此の頃こがね三千兩をなむ、唐土の育王山に贈り給へりと聞ゆるは、いかなる故にか侍りけむ。院のうへ、明けむ年五十にたらせ給ふとて、内には御年滿の事

○上卿　公事を奉行する官人の首座。
○まだきより　早くから。
○いそぎ　準備。
○笛竹のよな〳〵　竹の節卽ちよを言ひかけて笛吹合はせとつゞけた。
○いつしかと云々　何時だらうと待遠しく思はれたに。
○試樂　舞樂の日に先だちて樂器の調子を合はせ試みる儀。
○胡飲酒　唐樂、壹越調の舞樂。一名酹胡樂、宴飲樂。
○陵王　羅陵王、蘭陵王。沙陀調の舞樂
○一人劣り給へる云云　一人として拙劣な者なく揃つて。

思しまうけさせ給ひ、秋の頃中宮大夫なる隆季の大納言に仰事ありて、上卿仕うまつり給ひ、行幸所はじめられ、道々の工ども召して、御調度何くれの用意仕うまつるべく掟て給ひ、舞人などをも殊に選ばせ給ふとて、さりぬべき家の子の君達に、かねて仰言下りしかば、まだきよりとり〴〵に舞ども習ひ給ふめり。神無月にも、猶此の御賀のさだめとて、人々召されて、たゆまぬ御いそぎなりし。處々には物の音もひまなく、笛竹のよな〳〵木枯に吹き合はせたる聲は、空にすみのぼり、琴の調べは獨り秀でたる松にひゞき通ひて、とゞこほりなき聲にきほひて、月さへいとゞ澄み增れるは、よの常にすさまじき影などいふべくもあらず。都の内はいつとても時めかしう、冬のけはひの物寂しさも知られねど、今年はとりわけ、かやうの御いそぎに、今めかしうて過ぎつゝ、春になりては、又さまことに、梅の匂ひ、鶯の鳴く音にも、人々心うきたちて、いつしかとおぼいたるに、睦月二十日餘り、院の上うち〳〵舞御覽ずべく御けしきありて、舞人樂人法住寺殿に參れり。皆布衣をぞきたる。御賀は彌生と定めさせ給ひ、きさらぎ二十一日、閑院の内裏にて試樂あり。中宮も物見にまうのぼらせ給ふ。童樂は胡飲酒、陵王なり。柳櫻をこきまぜたる裝束は、折にあひていとはえ〴〵しう、殿上にも地下にも、物の上手おほかる比にて、いとゞおもしろく、若き君達とり〴〵に舞し給ふ　いづれも御よそひなどの清らは、更にもいはず、容よういすぐれたる限りえらせ給へば、殊にめでたう、一人劣り給へるもなく見え給

○青海波　天竺樂。盤渉調の舞樂。
○なまめかし　優雅な上品な。
○光源氏　源氏物語の主人公。
○宮　中宮徳子。
○藤壺の宮　源氏物語の女性。
○近き御ゆかり　中宮と惟盛とは叔母甥の間柄である。
○小舍人　殿上の雜事に召使ふ小童。
○廣廂　母屋の四面の狹い室、廂。
○左右の舞　左は唐樂で左舞、右は高麗樂で右舞と左右に分れて舞樂を奏する。
○康和の跡　康和四年に白河法皇五十賀があつた。其の先例に知模を增されたといふ事である。

ふに、權の亮惟盛のおくれて立出で給ふる青海波の姿はしも、更に立ちならぶ人なく、なまめかしうて、はかなくうちふる袖の匂ひさへ世の常ならず珍らしげなるを、若き女房達かたはらいたきまでめでまどひつゝ、「光源氏のいみじかりしためしも、かくこそは。」など聞えあへるに、宮も涙ぐましうせさせ給へり。昔の藤壺の宮の御思ひの筋にはあらず、これは唯近き御ゆかりなるを、思召さるゝが哀れなるにぞ、人より殊に御目もとまらせ給へるなるべし。又小舍人雅行の君、童姿うつくしうて、胡飲酒舞ひ給へるを、上﨟たち御覽じて、殊にほめさせ給ひ御衣かづけさせ給ふ。父の定房の大納言立ち給ひ、賜はりつる祿を肩にかけて、廣廂にてけしきばかり舞ひ給へる、いひしらずめづらしう、末の代の例にもしつべうもてはやし聞えたまひ、上も御けしきよくて、いみじう思召されたり。陵王は宗家の中納言の御子なめれど、これは祿も賜はり給はずやありけむ。此の外左右の舞は更なり、吹物も大かた若き君達仕うまつり給ふとて、左の大殿の太郎君賴實の中將をはじめ、中宮大夫の御子三人、權の大夫時忠の御子二人、別當成親の御子二人、惟盛淸經は小松の右大將の御子なり。さて上達部の御子達もあまた召され給ふ。樂の君達、大方中將少將なるに、別當の御子の成宗の侍從宮の權大夫の次郎なる時家の侍從まじり給ふは、何れも必ず衞府にあり給ふべければなめり。古き例はべる事とぞ。こたびの御賀は、康和の跡をたづねさせ給ひ、それに事加へさせ給ふよし聞えはべり。御年滿の日は、彌生四日なれ

○試樂の日の云々　試樂の日にすべて善美を盡してそれ以上によくはあるまいと思つたに。
○おぼろげ云々　おほよそな良い加減なものでは張合ひがないと。
○揭焉　著しく。あらはに。
○簀子　廂の外側にある濡れ縁。
○女院　建春門院。
○御簾の追風　御簾の動くにつれて起る風。
○時なりて　定刻となつて。

ば、花の盛りは過ぎつれど、おほかたも物のおもしろき折にて、こがくれには、風にしられぬ遲櫻もなほ殘りあり。鳥の聲霞の色もなべてならず、空の綠さへいとゞはえ〴〵しきに、行幸の御よそひも、殊に引きつくろはせ給ひ、仕ふまつる殿原も、とり〴〵に好みとのへられたる、御裝束のうるはしさは、世に珍らしきまでなり。人々は試樂の日のめでたかりしに、こと盡きぬと思ひ給へしかど、今日は又ことさらなり。舞の君達は、高麗唐土の綾錦を裁ち重ね、世になき匂ひをつくして、色も艶もおぼろげならむはあいなしと、おの〴〵物狂はしきまで、いどみかはし給ひしもしるく、樣々のきよらは、いづれか劣り勝るけぢめあらむ。唯ひとつ物にて、日影さへ霞みもあへず、揭焉にもてはやされて、かがやかしき樣なり。大臣達上達部、みな御前の簀子につき給ふ。中宮も行啓ありしかば、女院もことに御心づかひせさせ給ふめり。御かた〴〵の女房童のなり姿など、うるはしうとゝのへさせ給ひ、いろ〳〵の衣どものこぼれ出でたる几帳のほころびは、猶梅の匂ひを殘すばかりなつかしき薰に、御簾の追風さへ、なまめかしういとえんなりかし。時なりて樂人參る。限もなく晴れたる庭に、うつろふ影もうらゝにて、飛びかふ蝶も舞の姿にかよひ、囀る鶯も物の音を添ふるにやと覺えて、うち吹く風も春おもしろき聲に聞き渡されたり。物見る女房達は、心もおき處なげにて、ながき日さへあかず、程なき樣にて、夕風になりゆく空も、口をしげなり。此の日ごとに珍らかに侍りし事は、右の大臣の御隨身、中

○平禮の烏帽子　侍烏帽子。頂で三角に折つて漆で固めたもの侍の素襖著の時に用ひる。
○あさみ　あきれ驚く。
○鞠　蹴鞠。
○其の方に堪へたる　蹴鞠に堪能な公達
○御遊び　管絃。
○右の大殿　兼實。
○内の大臣　師長。
○おどろ〳〵し　仰山な。
○けぢかう　うち解けて親しんださま。
○龍頭鷁首　屋形船で舳に龍の頭の形を彫刻したものと、鷁の首の形を彫刻したもの。
○おとなしき　大人しきで、物心わきまへた程の者。

門にさぶらひける。著たりし平禮の烏帽子を風にとられつる、舞の場に吹きもていきて、風のまに〳〵飛びめぐりしこそ、世に淺ましう人々見あさみ侍りつれ。隨身も恥かはしうや思ひけむすなはち逃げて罷で侍りし。又の日も上猶おはしませば、人々昨日にかはらず參り給ふ。女院中宮の女房達に、若き君達うちまじり給ひ、池の方なる舟に乘りて漕ぎめぐらし給ふ。とり〴〵に物の音出して遊びたる、いとおもしろし。又鞠をも御覽ずとて、其の方に堪へたる君達おり立ちて仕うまつり給ふ。これはた珍らしう、内も院も興ぜさせ給ふ。夜に入りては、御前の御遊び始まりて、右の大殿内の大臣琵琶ひき給へり。箏笛などをも、殿原とり〴〵に仕うまつり給ひ、唱歌の人々、御階に參れり。昨日のおどろ〳〵しかりしにひきかへ、けぢかうなつかしく、殊に心もすみまさる夜のさまなり。翌日六日は、御賀の後宴とて、樂人殿上人も地下人も皆、龍頭鷁首に乘りて、最勝光院の廊の方より御前に出づるほど、池のさゞ波も庭の松風もひとつにきほへる絲竹のしらべは、唯千年の聲とのみ聞きわたされたり。今日は上も御笛ふかせ給ふ。ことさらにめでたう、世になき音のかぎり吹きとほさせ給へるいみじさに、院の上、御目おしのごひつゝ聞召さる。御前なる人々も、おとなしきは涙落して、類なう思ひ奉れり。かやうの事の紛れにや、歌などはかたり傳ふる人も侍らず。いみじき歌人多き折なれば、さこそおもしろきも侍りぬべけれど、口をしう人聞き置き侍らずなむ。事はてぬれば、人々に賞行はせ給ひ、上も還御の儀になる。御贈物人々のかづけもの、御心ことに思し掟てて、華族も下萬も、ほど〳〵にめでたうせさせ給へり。去年よりこと〴〵しき世のひゞきなりしを、さはりなくて遂げさせ給へれば、内にも御胸あきて、うれしう思召さるべし。かう何處も御心ゆくさまにて過させ給へば、千代を經るとも、あくよあるまじき御代なりと、殿原も、こよなうおほいたり。卯月に法皇、山にて御戒受けさせたまはむとて、御幸あり。さきにも東寺にて御受戒侍りき。又山よりかへらせ給へば、有馬の出湯あびさせ給ふとて、そなたに御幸なる。こたびは女院をも具し奉らせ給へば、いと處せき御ひゞきなり。女房達都の外の御ありきのめづらしさに、我も〳〵としたひ參らすれど、世のきこえもわづらはしう、物さわがしきやうにもこそとて、かたへはとゞめさせ給ひ、さりぬべき限りさぶらはせ給へり。笠に縫ふてふなどいひし眞菅生ふる岩根の道をわけ入らせ給ふに、山のけしき水の流れも、都にかはりて珍らしう御覽ぜらる。いにしへ宇治のおほきおとゞの、まづ來る人にと讀み給ひしも、爰にての事なりと、人々聞え出づるに、資賢の大納言御供にてさぶらひ給ひけるが、湯の明神をば、三輪の神なりとなむ申し侍ると聞きて、物にかきつけける。

めづらしき御幸をみわの神ならばしるし有聞のいでゆならまし

忍びさせ給ふ御程なれば、御心長閑にもおはしまさず。やがて還らせ給ふ。

高松の院ときこえさせしは、一院の御はらからにて、二條の院の后におはします。はや

○かづけもの　經頭當座の褒美の賜。
○華族　攝家に次ぐ家柄。
○胸あきて　心がせいせいして。
○心ゆくさま　御滿足の有樣。
○法皇　後白河。
○山　叡山。延暦寺。
○東寺　京都九條。敕王護國寺。眞言宗の本山。
○有馬の出湯　攝津國有馬の溫泉。
○世のきこえ　世間の取沙汰もうるさく
○かたへ　一部分。
○さりぬべき　相應な身分の女房だけ。
○笠に縫ふ云々　拾遺集「皆人の笠に縫ふてふ有馬菅ありてのの後も逢はむとぞ思ふ。」
○まづ來る人　詞花集「いざやまたつゞきも知らぬ高嶺にて先づくる人に都をぞ問ふ。」

○あつけ　暑氣にあてられて病むこと。
○こちたう　甚しく事々しく。
○淺ましうならせ給ふ　崩御になつた。
○おくれじと　女院崩御のあとに後白河院も後れないでお崩れになりたいと。
○あたらしき　惜しい程の御年。
○かい濕り　かき濕り。悲しく寂し。
○ゆゝしき御衣　御喪服。
○涙のつま　涙の種
○先帝　六條天皇。
○きびは　幼稚に。
○御冠　御元服。
○内の御姪　高倉天皇の御母。

う御髪おろし給ひ、院號の御さたにておはしましけるに、水無月隱れさせ給へり。こなたにさぶらふ右衛門の佐といひし女房は、歌讀の數にも入りて侍りし。此の院は八條の院の御おとうとに坐しき。八條院は猶殘りおはしまして、其方にも高倉六條など皆世にしられたる歌人にて、撰集にも入り侍り。女院も此の頃あつけにや、御心地例ならず、ものせさせ給ふとて、院にも内にも思し騒がせ給ひ、御祈りこちたうせさせ給ふ。御修法も處々にておこなはる。行幸もありぬべく思召しけるほどに、七月八日遂に淺ましうならせ給ひぬ。内には物も覺えさせ給はず、臥し沉ませ給ふ。院もとりわけたる御思ひなりしかば、たゞおくれじと思しまどはせ給ふ。御年さへ三十に五つ餘らせ給へば、未だあたらしき御程におはしますを、さぶらふ人々も惜しみ奉らぬはなし。世の中諒闇とて、内わたりもかい濕り、上もゆゝしき御衣奉る。殿上人なども皆、夕の空の色々なる衣どもは、見るく涙のつまなりかし。内にも院にも盡きせず物哀れなる御事のみなるに、又同じ月にしも、先帝かくれさせ給へりと奏しつるものか、上いと淺ましう世や盡きぬらむと、いみじう思召されたり。此の院はまだきびはにおはします程におりさせ給ひ、いまだ御冠の御さたもなく、御童姿にて過させ給へるも、いとめづらかなる御事になむ。今年ぞ十三にならせ給へり。二條の院の皇子にて、一院の御孫、内の御姪に坐す。二つにて御位に卽かせ給ひ、五つにておりさせ給ふ。御元服さへなくて、太上天皇ときこえさせしは、古き例もを

○かずまへ　人數に數へる。
○栖霞寺　清閑寺。洛外清水寺の南。
○をさめ　葬る。
○院三所　高松院、建春門院、六條院。
○關の固め云々　關所の守備や陣の警備
○二間　清涼殿の夜大殿の東にある南北二間東西一間の室。
○御本　御手本。
○道風の手　小野道風の手蹟。
○たがはぬ紙　先例をお調べになつて、先例に違はぬ紙をお用ゐになつた。
○御わざ　女院の四十九日の御法事。
○山の座主　延暦寺天台の座主。
○中宮權の大夫　時忠。

さをさ聞えぬ事のよし、其の世の人は申し侍りし。内も院も親しき御あはひにおはしませど、いかなるにか、さのみかずまへられさせ給ふ事もなき樣にて、御氣などもなく、心苦しういとほしき御樣にぞ侍りし。さはいへど、日ごろ一院の御方におはしましに、御なやみによりて、邦綱の大納言の東山の家に出でさせ給へり。やがて栖霞寺にをさめ奉り、六條の院とぞきこえにき。二月の程に、院三所なくならせ給へるを、やすからぬ事に、世の人も思ひいひ、何となう世の中あわたゞしき樣なるに、上は女院の御思ひに沉み入らせ給へば、大殿も此の程は内につとさぶらはせ給ひ、上達部などもまうで給はず、關の固めの、陣の守りとて、九重の宮の中さへ例ざまの長閑けさにはあらず。上は日頃になれど、いみじき御歎きは慰め難うせさせ給ひけるが、せめて御涙のまぎらはしにや、二間にて御經書かせ給ふ。御本は道風の手にて、いろ〳〵の色紙に、文字は墨なり、さき〳〵の例尋ねさせたまひて、たがはぬ紙をなむ召されき。八月の末、御わざの頃かきはてさせ給ふとて、山の座主に、御衣一重法服二くだり、絹二十疋綿など賜はす。頭の辨長方御使にて、山に參り給へり。又此の御法事の頃にや侍りけむ、中宮權の大夫觀音の誓ひを思ひて、

　たのもしきちかひは春にあらねども枯れにし枝も花ぞ咲きける

中納言の君とて女院につかうまつりける女房、うゑ置かせ給へる前栽の、此の頃盛りなる中に、女郎花の咲きこぼれたるを見て、

○ゆゝしき御しつらひ　非常な御設けで御喪中の設備。
○ひがたう　乾きがたく。
○木の葉よりけに　木の葉の脆く落ちるよりも一層脆く涙が落ちる。
○腸を斷つ　和漢朗詠集「大抵四時心總苦、就中斷腸是秋天」
○あへなき御事　崩御をいふ。
○二條の院の后　九條院は近衞天皇の皇后である。
○又の年　安元三年で、八月治承と改元
○司召　京官の除目
○院の別當大納言成親。
○いかでと云々　何とかして左大將にならうと思ふ心。

露消ゆるうき世に秋のをみなへしことしも知らぬ色ぞかなしき

何地も露けき秋にて、中宮も物哀れに詠めさせ給ふ。内にはゆゝしき御しつらひは、いととう改められしかど、御涙ばかりはひがたうせさせたまひ、荻の上風萩の下露につけても、木の葉よりけに、もろくふり落つる御心地せさせ給ふまゝに、「腸を斷つこれ秋の天。」と、絶えず御口ずさませ給ふ。月の頃も御遊びなどもせさせ給はず、内わたりも物冷まじげなり。此の頃又九條の院も、あへなき御事なりと聞ゆ。二條の院の后にて、仁安の頃、院號えさせ給ひ、樣かへて靜かに行ひて坐せし。四十に五つ六つ餘らせ給へりとなむ。院も聞えさする御かたく、うちつゞきかゝるを、一院にも、きし方行先ためしも有り難う淺ましき事に思召されたり。さるは、女院の御事の後、いとゞ世を常なき物に思し知らせ給へるにや、いとけなき宮達をば、佛の道に入れ奉らせ給ひ、一所は御室の御弟子にならせ給へる。十月其の若宮、内に參らせ給ふ。上の御子の御定めなればなめり。今一所も同じ樣に内の御子にならせ給ひ、十一月參らせ給ふ。此の宮は山なる明雲座主の御弟子にて坐す。いつしか年も暮れて、又の年睦月の司召の頃、内の大臣左大將退き給ふと聞ゆれば、望み申す人々多し。花山院の中納言なども、必ずなり給ひぬべき人がらなれば、もしやと思すに、院の別當大納言いかでと思ふ心ふかく、神佛に祈り申しつゝ、物ぐるはしきまで思ひ入れ給へど、公には急ぎても召さず。音もなくて二月は過ぎぬ。三月始め、大

○右大將　重盛。
○ことさまし　意想外で異のさめる。
○人わらへ　人前で體裁のわるいこと。
○さしもあらぬ人　さ程にえらくもない人。
○おしけたれ　壓倒され。
○丹波の少將　成親の子藤原成經。
○門脇の宰相　清盛の兄平敎盛。
○むくつけき心　恐ろしき心、謀叛の心
○あながち　只管。
○殿　基房。
○内の大殿　師長。

將の御さだめある由なれば、所々胸うちさわぎて、いかならむとおぼいたるに、思ひの外に、右大將左にうつりて、御弟の宗盛の中納言、右大將に成り給へる物か。望みつる人々は、中々ことさましにて、淺ましともいはむ方なし。成親の大納言、人わらへに思し歎く事限りなし。さるは六波羅の入道の心の儘なる世にて、こたびの事も、あの入道のとり申されけるによりてなむ。さしもあらぬ人に、おしけたれぬる事と、いと心づきなう腹だたしうなりぬ。此の大納言の妹の君は、小松の大將の北の方なるうへ、我が御女をば、惟盛の少將にあはせ奉り給ひ、丹波の少將、又入道の御弟なる門脇の宰相の御壻なり。かたかたにはなれぬ中らひにいましけれど、大納言は、此の一ふしに心亂れしより、こよなう思ひ疎みて、はてはあるまじうむくつけき心つきつゝ、いかで此の入道の一ぞう滅ぼすわざもがなと、あながちに思ひより給へるこそ、いと淺ましき事に侍れ。殿は一年、關白の宣旨かうぶらせ給ひし折、太政大臣をも辭し申させ給ひしかば、今年内の大殿に、太政大臣の宣旨あり。小松の大將大納言にて居給ふを、内大臣になさせ給ふ。又此の大將のかはりの大納言には、前の大納言實定の久しう籠り居給へるを、出で給ひぬべき仰事ありて、再び大納言にかへりなり給へり。いとあらまほしき事を、世にもめでたく思ひたり。大納言は春日の神の御光あらはれぬる事と、いみじう思しけり。此の事は應保の頃、中納言にていましけるが、日吉の行幸の後、實仲の中納言從二位に成り給へるに、此の中納言、同じ

○加階こえられ　官位昇進が人よりおくれた。
○心やましう　心晴れず。
○陣　公事の時禁中で官人の列坐するところ。
○父大殿　實定の父右大臣藤原公能。
○下臈　年功を積むこと少なくて官位の低いこと。
○心ゆかず思ひ　不満に思つて。
○大納言にかへて　大納言に昇任するのをやめて正二位に陞してほしいと。大納言は正三位の相當官
○越えかへさむ　向ふが此方を越えたにしかへして向ふを越える。
○若宮　春日神社の若宮。
○いらじるき　著しい應驗があつた。

程の人に加階こえられぬる事の心やましうて、世の中すさまじう思ひ奉りつゝ、宮仕も意りがちに、陣に著かむ事も物うくはしたなくて、實仲の中納言參り給ふ折は、出で給はずなどしてありつるに、父大殿の大炊の御門の家に行幸ありし日、よろこび加へて從二位に成り給へり。されど猶下臈なるを、やましと思ひ居たまふに、長寛二年閏十月ばかり、大臣召のありけるついでに、大納言にあがり給ひき。かかれど猶心ゆかず思ひて、永萬二年八月、大納言にかへて、正二位の加階をのぞみ申し給へり。さるは大納言をやめて加階の例は珍らかなりとて、内にも思しなやませ給ひしを、あながちに歎き申しつゝ、とかくして正二位し給へり。彼の實仲の君を越えかへさむの心のみ深くて、かくまでおもひなり給ふるなり。さて大納言かへさひ申してこもり給ふを、世の人もあいなき事に見聞え、みづからも世の中ものうく思す物から、忍びて春日の御社に詣で給ひ、心をおこして行くさきを祈り申し給ふに、若宮の御告げとて、いといちじるきこともしければなむ、頼もしうて、出で給ふとても、御奴どもにも、さまぐ〳〵に物賜ひなどして、猶たゆみなく祈りをも仕うまつるべう宣ひ置きたり。さてなむ嘉應の比、住吉の歌合とて、人々のすゝめ給へりしかば、讀みてやり給ふとて、述懐のこゝろを、

かぞふれば八年になりぬあはれわが沉みしこともきのふと思ふに

又唐歌つくり給ふにも、

○こゝらいぶせかりし云々　多年氣が塞がつてゐた心も晴々とした。
○小松の大臣　重盛
○右大將　宗盛。
○大饗　大臣に任官した時の饗宴。
○尊者　大臣大饗の賓の正客。
○左の大殿　經宗。
○卯月　安元三年。
○こゝら　多數。
○すべなく　せんかたなく思召され。
○別當　東大寺石清水など特別な社寺の長官をいふ。祇園社は日枝の末社。
○神つかさ　神官。
○山　叡山延暦寺。

罷レ官未レ忘九重月　有レ恨將レ逢五度春

などいひ居給ひしほどに、今年思ひかけず、かかるよろこびあるを、いとかひありて、こらいぶせかりし胸あきておぼいたり。小松の大臣はよろこび聞えに處々參り給ふに、右大將御供にておはしけるが、殊にめでたう見えければ、藤壺の女房の中より聞えたり。

いとゞしく咲きそふ花の梢かな三笠の山に枝をつらねて

大饗もすなはちし給ふ。尊者には左の大殿參らせ給へり。祿などはさだまりある事なれば、唯世になき清らを盡して、めづらしうし給へり。卯月の頃、山の衆徒ども、日吉の御輿を振りおろし奉り、十三日内裏に入れ奉らむとしければ、内にも驚かせ給ひ、人々に仰せて、御門々々を守らしめ給ふ。内の大臣の左大將にいましければ、兵どもしたがへて防ぎ奉らむとし給ふほど、法師原勢ひたけく、いみじげにどよみつゝ、みだりがはしきまぎれに、御輿にさへ箭のあたりつるはかたじけなく、法師原も、あるはそこなはれ、あるは命をうしなふなど、きしかたためしもありがたきさまなり。九重の御門々々は、源氏平家の武士ども、こゝらさぶらひて守り聞えさすれば、山法師かなひがたくて、御輿をもうち捨て、ちりぐ〳〵に逃げてまかりにき。内にもすべなく思召されば、祇園の別當なる澄憲に迎へ奉るべく仰事ありて、夕つ方そなたの神つかさども、御迎へに參りて、ゐて奉れり。山には猶殘り給へる御輿をも振り下し奉りてむと、用意するよし聞えしかば、上もむ

○同じき月　安元三年四月。
○のゝしり　言ひ騒ぎ。
○巽　東南。
○八省　八省院、朝堂院。
○小安殿　大極殿の後房。
○大極殿　朝堂院の正殿。
○大學寮　二條の南朱雀と神泉苑の間。
○神祇官　郁芳門の南の掖。
○眞言院　一名修法院。八省院の北。
○勸學院　三條の北壬生の西。
○預り　武者所預りか。武者所卽ち院御所警衛の瀧口の長官
○腰輿　手輿。俄な行幸の時に召される輿。

くつけう思召されて、又の日俄に院に御幸おはします。此の事は山法師の訴へ申す事あるを、院の御前聞召し入れぬやうなりとて、かくなめげなるふるまひつかうまつれるなりとぞ。院もめざましう思召すなれど、衆徒の心なだめさせ給はむとて、時忠の大納言を御使にて、山に遣はさる。さてなむ、やう〳〵靜まり侍る。同じき月二十八日夜中ばかり、樋口富の小路とかいへるわたりに、火出で來ぬとのゝしりけるほど、巽の風はげしう吹き出でつゝ、北に向ひて、いやましに燒けもてゆく。其方なる人々の家どものこるまじげなるも、いと淺ましと見るに、大内の方さへ危く、朱雀門より北は、八省、小安殿、大極殿、大學寮、神祇官、八神殿、眞言院、勸學院など、悉く時の間の煙となりて、大内も殘るまじげなるに、年ごろ預りにて守り聞えさする源頼政、いみじき心を起して、八幡の神を念じ奉れりしかば、其の御しるしありて、鳩の飛びめぐりけるまゝに、忽ち風なほりて免れたりしこそ、めづらかなる事に後まで人申しあひ侍りつれ。たかきいやしき人々家どもの塵灰となりぬる事は、かぞへやらむ方なし。閑院の内裏さへまぢかう覺えさせ給へば、上も御腰輿にて、邦綱の大納言の家に渡らせ給ひ、中宮も行啓なる。行幸に仕うまつり給ふ上達部なども多からず。何の御儀式もなく、とりあへさせ給はぬ御樣なり。内侍ぞ璽の御筴とりてさぶらふ。かう恐ろしきけぶりのまよひに、こゝら作りみがかれし人の家々、日頃きら〳〵しかりし玉の臺など、見る〳〵跡方もなくなりゆけば、むかしより例ある事には侍れど、さしあたりては珍らかにも、淺ましうもいひやらむかたなし。此の折なむ融の大臣の河原の院を始め、古の跡と聞えし處々、皆やけ失せ侍り。又博士何くれの人々の家に火移りては、年比かくしもたる文書どものなくなりぬるをぞ、世にも惜しみ聞え、公にも口をしう思召されにし。何事よりも大極殿の燒けぬるをなむ、内にも大臣達もやすからず、さき〳〵例も多からねば、世の中いかゞあらむと、うしろめたう思し歎かる。あくる日、閑院の内裏にかへらせ給ひ、やがて廢朝など聞ゆるも、大極殿の火のことによりけるにや。すべて此の火のけはひに、都の中三が一淺ましうなりて、たま〳〵殘れる處も、またからぬ多かりき。いかなる事にかと、人あさみあへるに、かたへは日吉の御祟りなりといへるもまが〳〵しき事に侍り。院の御前ありし御輿振の事などにつけても、山法師を心つきなうひたぶるになめしと思召されければ、座主にていましける明雲僧正、御かうじの由仰せられて、五月座主をも止められ、僧正をもとらせたまひ、伊豆國に流し遣はすべく御定めあり。山に聞き付けて、衆徒ども院に參りて、座主の流木となり給へる例も、未ださぶらはぬよし申す。又院に御戒さづけ奉り内の御祈りの師なる由をもかこちて、愁へ申しつれど、院更に聞召し入れさせ給はず、すなはち覺快法親王座主にならせ給ふ。前の座主をば直人になし聞えて、同じき月の二十三日、遠つ國に遣はさるとて、非違の人々つき添ひつゝ、都を出づるに、山の大衆、粟津野の邊に待ちうけて、いくばくもなく、僧正を

○融　河原の左大臣源融。
○うしろめたう　物の氣遣ひになる。不安心な。
○廢朝　天子が朝政に臨御にならぬこと
○またからぬ　全からぬ。
○あさみ　惘れ驚く
○日吉の御祟り　一部は御輿振の時御輿に箭の中つた神の祟り。
○まが〳〵し　不祥な。
○ひたぶるに云々　いちがいに無禮だと思召され。
○流木　配流される人。
○愁へ申し　歎願し愁訴する。
○非違の人々　檢非違使。

○成親　鹿ヶ谷で平家討伐の謀をしたのが洩れて六波羅に幽閉されたのである。
○ゆくりなく　不意に。
○丹波の少將　成經
○びんなく　都合わるく。
○ひとつ車　少將と同車して。
○かなしうし給ふ御壻　鍾愛せる壻。
○うしろめたう　氣遣はしく。
○いらはやき心　一徹な氣短い心。
○同じやう　西光や其の子と同じやうに成親も殺さうと。
○あたまへし　敵視した。敵たふ。
○おほけなき　畏れ多い。勿體ない。

奪ひとりて山に歸りぬ。院に聞かせ給ひ、いとゞしき御けしきにて、成親の大納言に仰事ありて、山を責めさせ給ふなりと聞えしかば、衆徒もいかにせましと、さすがに思ひなやみたるに、其の後は音もなくて、水無月一日、成親の大納言、俄に六波羅におしこめられ給ひき。此の外も院に仕うまつる人々の家には、六波羅の侍どもゆくりなくおし入りて、人々をとりもていくさま、いひ知らずむくつけし。大納言の御子丹波の少將をば、六波羅の入道、教盛の宰相にいざなひ給へと消息あり。辛相びんなく思しけれど、いなみ給はむやうなくて、少將ひとつ車にておはしつ。殊にかなしうし給ふ御壻なれば、いかならむとうしろめたう思すめり。六波羅には、大納言のうち〳〵思しかまふる事を、はやう告げ知らするもののありけるにぞ、入道いといたう聞きあさみつゝ、いちはやき心にまかせて、いさゝかのどむる方なく、たちまちにかくさわぎ給ふなるべし。西光法師も同じ時からめられけるが、やがて失はれき。子ども師高師經など、皆うしなはれたり。入道は大納言をも、同じやうにとおぼいたりしかど、小松のおとゞの、あながちに申し給へばなむ、吉備の國に流しつかはすべく捉て給ふ。山法師は前座主の罪にあたり給へることは、西光法師が讒言によりてなりと、こゝら惡みしに、かくと傳へ聞きて、いみじうよろこびあひ侍りとよ。六波羅の入道は、あたまへし人々をば召捕りしかど、猶心ゆかずおもひて、院をも何方にまれ御幸なし奉らむ、こたびのことは、院もしろしめしての事なればと、おほけなき

○内の大臣　重盛。
○こさなしけに　事もないやうに。
○なまはしたなく　何となくきまりわるく。
○用意なしと云々　不作法だと疎む。
○宰相　教盛。
○少將　教盛の女壻丹波少將藤原成經。
○前の座主　天台の座主明雲僧正。
○御かうじ　勅勸。
○故女院の御はて　故建春門院の御一周年。
○御正日　御一周年の當日。
○御八講　法華經八卷を八座に讀誦供養する法會。
○服ぬぎ　忌明け。
○釋奠　大學寮で孔子を祭る儀。

心さへつきて、法住寺殿に參らむと用意しつゝ、御子の殿原さりぬべき侍などめし集め給ふ。人々ゆゝしき武士姿どもにて參り給へるに、内の大臣はことなしけに、御よそひも常にかはらず、なよゝかなる直衣烏帽子にて、入りおはしたり。入道をはじめ、人々なまはしたなく、大臣の心はづかしげなるもてなしに、あいなうつゝましく覺え給ふ。大臣はとばかり物もいはで見渡し給ひけるが、兄弟の殿原のことゞくしげなる樣どもを、用意なしとあはめ給ひ、入道をも、えもいはぬ言の葉に昔今の例を引きかけつゝ、かつは涙おしのごひていみじういさめ聞え給へるにぞ、さすがに賢き人の言は、子ながらもそむかむ方なくて、入道も心とけ給へるにや、院に參り給はむ事は、とまり給ひぬ。さてぞ大臣もうれしうおぼいて歸り給ふ。かの宰相のいたはり給ひし少將も、なく〳〵鬼界が島の流木と成り給へり。平康頼俊寛僧都も同じ處に遷されたまへり。前の座主も御かうじゆるさせ給ふよし宣旨下りしかば、うれしうは覺え給へど、猶都の中はむつかしうや思しけむ、浪花の方に行きて住み給へり。文月は故女院の御はてとて、いぬる月最勝光院にて御菊會侍りしに、御正日ちかき頃、内にて御八講行はせ給ふ。御經は上の書かせ給へるなりとぞ。世に珍らしき事にて、五卷の日など、色ことにいつくしき御作法なり。院后の宮と、御捧物とりどりにめでたうせさせ給へり。七月十日、人々御服ぬぎて大祓あり。八月又年の號も、治承に改まりぬるは、大極殿の燒けぬるによりてなめり。釋奠も大學寮燒けしとて、官の

○春のよろこび　この年春實定大納言になり今東盛の後に左近衛大將となつた。
○かたへは　その理由の一つは。
○嚴島　清盛が安藝守であつた時から平氏一門が守神として尊崇した。
○又の年　治承二年
○殿　關白基房。
○陪從　管絃を行ふ地下の樂人。
○さうぞき　裝束をつける。
○うつし　移し鞍。唐鞍に摸した鞍。
○かしこ　春日社。
○松風の云々　松風が音樂を待ちうけてこれに和した。
○唯ならぬ御事　御懐妊。

廳にて行はせ給ひき。内の大臣は大將退き給ひしとて、又望み申す人々ありしに、師走の頃、實定の大納言なり給へり。春のよろこびだにあるを、うち續き思ふやうなる事の、目もあやに世の人思ひ聞ゆ。かたへは嚴島に參り給ひししるしとて、六波羅の入道のとり申し給へるなどぞさゝめき侍りしか。又の年卯月、春日に行幸あり。殿を始め上達部殿上人こゝらつかうまつり給ふ。陪從なども心ことにえり調へさせ給ひ、何事もめづらしからむ樣にと思しおきてたり。平家の人々も皆參り給ふ。何れもあざやかなるよそひきら〳〵しう、御車どもも淸らにさうぞき、御馬には、えもいはぬうつしども置きたり。こよなき見物とて、物見る人々、道もさりあへず、かしこにおはしましつきて、御神樂奉らせ給ひ、數々の神寶處せげにもてつゞけらる。上は賀茂石淸水などには、二度も行幸せさせ給ひしかど、此の御社は始めて詣でさせ給ふれば、山の姿草樹のたゝずまひをも、いと珍らしう御覽じ渡さる。樂人どものとり〴〵なる物の音は、三笠の山の松風の待ちとりたるもいみじく舞人のかなづる袖には、榊葉の薫さへ通へるがなつかしう、いひ知らずおもしろく、誠に神もうれしう御覽ずべう、人々も思ひたり。上あかず思召すなれど、都の外にはさのみとゞこほらせ給ふべきならねば、いそぎ還らせ給ふ。宗盛の大將、此の御供にさぶらはれけるが、歸らせ給へるすなはち、大納言になさせ給ふ。中宮春の頃よりなやましうせさせ給へるは、唯ならぬ御事のよしきこゆれば、上いとめづらしう思召さる。六波羅の入道

○二位殿　淸盛の妻時子。
○御修法　御安產の御祈禱。
○其の程近う　御產期が近づいて來る。
○御けしき　御產氣づかれること。
○御物のけ　生靈死靈などが祟ること。
○おぢろ〳〵しう　恐ろしく。
○處せき　仰山な。
○御はかし御ぞ　御佩刀御衣。
○御誦經の御使　御誦經の料物奉る使。
○そこら　數多の。
○宿世　前世からの因緣。
○しふねき　執念深い。
○よばひのゝしり　喧しく呼びさけぶ。

うれしき事に思ふ物から、かつはゆゝしうて、まだしきに御祈りこちたくし給へり。宮、常にくるしうのみせさせ給へば、いかさまにかと、二位殿などもうしろめたう見奉らせ給ひ、御修法もあまた壇にて行はる。其の程近うならせ給へば、又々御祈りしそへさせたまふ。霜月十日頃より、御けしきありて惱ませ給ふとて、人々みな六波羅につどひ參る。内よりも御使ひまなし。御物のけなどおどろ〳〵しう名乘り出づるも、いと恐ろしきまでにて、山々寺々にありとある僧達のこりなうめし集められて、處せき御祈りなり。山の座主の宮、仁和寺の宮なども參らせ給ひ、さま〴〵の法ども行はせ給ふ。日頃の御祈りにうちそへて、世の中ゆすりさわぎ、諸社の神馬、處々の御誦經の御使に、四位五位數を盡して鞭を揚ぐる樣、いはむかたなし。宮の御はかし御ぞども、御誦經にはこび出でらる。入道のさばかり猛うをゝしき心も、かかる折はいづちいにけるにや、いふかひなく、心細げなるさまして、物も覺えず、唯手をすりて佛神をねんじ居給ふ。内の大臣を始め、そこらの殿原、かつは平家の宿世も見ゆべき事と思せば、いみじう心を盡し給ふ。又の日も猶覺束なくなやみ暮らさせ給へば、十二日には、院さへ御幸ありて、御心苦しう見奉らせ給ふ。この物のけのしふねきを、いとふびんなるわざかなと思召されて、近き御帳の下によらせ給ひ、忍びやかに千手經あそばす。いと〳〵尊くて、近うさぶらふ限りは涙落しつるに、此の物のけの、いみじけによばひのゝしりつる聲どもの、すこししづまりぬるやうなりし

○心おちゐたる　心が落ちついた。
○入道二位殿など　清盛や妻時子など。
○ことわり云々　泣いたのは尤もではあるが斯かる折には不祥に思はれた。
○今熊野　新熊野神社。京都三十三間堂の東三町餘にあつた。
○結願　修法祈願の果てること。滿願。
○御乳つけ　始めて乳を含ませ奉る役。
○權の大夫のうへ　權の大夫平時忠の妻。
○御湯殿　產湯を御浴みになる儀式。
○弦打　鳴弦。湯をめされる間に弓弦を鳴らす役。
○つるばみ云々　橡色の裝束。
○簀子　廂の外の緣側。
○うちまき　散米。

かば、からうじて生まれ給ひぬ。人々心おちゐたるに、宮の亮重衡、御簾の外に出でて、「御產平安皇子誕生。」と高やかに宣ふにぞ、内にも外にも、よろこびの聲どよみたり。入道二位殿などは、唯よゝと泣き給へる。ことわりとはいへど、まが〳〵しかりき。法皇も御心おちゐさせ給へば、出でさせ給ひ、今熊野へ御幸坐す。僧達やがて御修法の結願とて、したりがほに汗おしのごひつゝ、急がしあへり。いつしかと内に奏し給へば、限りなううれしう思召されて、いそぎ御はかし奉らせ給ふ。内の大臣は六波羅につとさぶらひ給ひ、事ども捉て給ふ。宮の御ゆかりの殿原、皆うへのきぬにてさぶらひ給へり。關白殿をはなちては、大臣達より末の上達部、御よろこび聞えに參り給はぬなし。宗盛の大將は、したしき御あはひなれど、北の方文月に失せ給へば、はゞかりありて參り給はずなむ。御乳つけには權の大夫のうへ參り給ふ。やがて御乳母にて、帥の典侍など聞え侍り。御驗者の法親王達、僧綱達、さらぬ法師原まで、程々に祿どもいかめしう思しまうけらる。御湯殿の儀式などは、いふも更なり、例の作法に、内の典侍おり立ちてつかうまつる。弦打の五位六位なみさぶらひ、御文の博士つるばみのよそひにて庭に參り、孝經の天子の章よみたる、いとめでたく、護身の僧もやんごとなきを召さる。君達は簀子にゐ給ふ。らうがはしきまで、うちまき散らしのゝしりたるも、いとはなやかなり。あしたの御湯殿はてて、又夕の御湯殿の事さきの儘なり。其の後寢殿の南東の間に、白き紬ロども打出でて、白き

○上人　殿上人。
○嘉辰令月　和漢朗詠集「嘉辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央」
○五夜七夜　五夜七夜の御產養の儀。
○あまりなるまで云云　あまり甚しいすぐれた御慶事の中では、歌などは、出てもはえがないのでもあらうか、歌の評判も聞えなかつた。
○遠つ島守　遠い島の島守で鬼界が島に配流された人。
○宰相　敦盛。丹波少將成經の弟。
○待ちおはさうず　待ちおはすの意。
○恐ろしかりし御事　御產をいふ。
○御五十日云々　御出產五十日の御祝を召しあがらぬうち年末に皇太子にお立ちになつた。

御屏風立てわたし、公卿の御座まうけらる。上達部參りてつきなみ給へば、座の末に頭の君達、さらぬ上人もあまた參り給へり。御前の物ども、兒の御衣机は殿上の四位どもはこぶ。御杯めぐりて、「嘉辰令月。」など、例の事なれど、打出づる聲さへめでたう聞えたり。女房達の白きよそひも、殊にはえ〳〵しう、折から雪の色さへひとつ物にて、たゞ鶴の毛衣たちかさねたりとのみ見渡さる。うちつゞき五夜七夜などもおもしろく、男皇子にさへおはしませば、いとゞかひある光にて、入道殿も二位殿も、思ふやうなる御事をめいぼくありて覺え給ふ。「枝ながらこそ。」などやうの歌もありぬべき折なれど、あまりなるまでいみじけなる事どもの中には、出でばえのありがたきにや、さらに聞ゆる事も侍らずなむ。此の御產の御祈りの程に、罪ある人々ゆるさせ給ふといふ定めありて、遠つ島守なりし丹波の少將平康頼も、めしにつかはすとて、六波羅より人出し立ち給へば、宰相も迎への人をそへ給ふ。宰相はうかりし別れのまゝに、なぐさむ方なう戀ひ忍び給ひけるが、程もなくゆるされ給ふ由聞きても、まづよろこび泣きし給ひつゝ、いつしかと待ちおはさうず。俊寛は猶入道ゆるし給はず、成親の大納言は、かしこにて失せ給へりと聞えき。中宮は恐ろしかりし御事のなごり、暫しこそあれ、さのみなやませ給ふ事もなくて、さわやがせ給ふ。若宮は御五十日をだに聞召さぬに、年の暮には坊に居させ給へり。いとあらまほしき中宮の御さいはひを、終にはあるべき事なれど、さしあたりては、目驚かるゝ樣にぞ、世

○殿上もゆるされざりしに　昇殿も聽されず。
○代かはりて　永萬元年七月二條天皇崩御、六條天皇卽位。
○仁安　永萬二年八月仁安と改元。
○よろこび聞ゆ　御祝詞を申すこと。
○當代　高倉天皇。
○御おぼえ　御寵愛になること。
○御給ひ　たまもの
○尙齒會　高年の人を招待して饗宴し詩歌を作りなどする會
○かけ〳〵しき心　心に掛ける樣子。
○心もおい給はず　氣をおかず安心して

にもきこえさす。宮の右京の大夫の君は、日頃まかでてありけるが、この御事を傳へ聞きて、里にて遙かに思ひやり奉りて、

雲のよそにきくぞ悲しき昔ならば立ちまじらるゝ春の都に

師走の末、源の賴政三位し給ふ。これはいみじき歌人にて、やんごとなき人々にもまじらひなれつゝ、年頃大內を守りてさぶらひける。二條院の御時、まだ殿上もゆるされざりしに、月のあかき夜、大內に行幸おはしましし、御供の女房の中に申し送りし。

人しれぬ大內山のやまもりはこがくれてのみ月を見るかな

などいひしに、代かはりて仁安のはじめ、殿上ゆるされて、程もなく四位の加階をさへしたり。其のよろこび聞ゆるとて、重家の君、

まことにや木隱れたりし山守の今はたち出でて月を見るかな

とありし返り事に、賴政、

そよやげに木隱れたりし山守をあらはす月もありけるものを

當代も御おぼえありて、加階など心もとなからず、院さへ御給ひなどの御かへりみありて、殿上をもゆるさせ給へり。今はいたく年老いにしかば、一年尙齒會にもかずまへられ侍りにし。源氏の武士なれども、古も義朝などに、心をかはす事もなければ、六波羅の入道も、かけ〳〵しき心はなきなめりとうしろ安く、いさゝか心もおい給はず、かかるよ

○年歸り　治承三年になる。
○御戴餅　小兒の前途を祝して、五歲まで毎年正月中の吉日を選んで頭上に餅を載かせて祝ふ儀式。
○御衰日　陰陽家で人の性によつて定まつた忌むべき凶日。
○彈物吹物　彈奏する樂器吹奏する樂器
○あなたふと　催馬樂律の歌。
○青柳　催馬樂律の歌。
○御五十日　小兒生まれて五十日目の祝
○坊にゐさせ　皇太子として東宮坊にはした事。
○細長　細長の袍。童裝束のである。又女官の著用する鄕長の袿といふのがある
○御臺　御食物。
○御物　召上り物。

ろこびをも、かへりて見やすく思しけり。平家のみ時めきぬる世に、此の人ひとりのみなむ、源氏にて昔に變らぬさまなりし。子どもさへかひ〴〵しう、程々につかさ得て仕うまつれり。女子も二條の院に宮仕して、讃岐とか申し、よろしき歌あまた聞え侍りき。年歸りては內わたりのはえ〴〵しさは、例の事なれど、今年は春宮の御年まさらせ給へるをなむ、上も后の宮も取分けかひある春の光に思召されたり。御藥の事など、內の御前の作法にかはらず、御戴餅ありぬべけれど、一日甲の日なればとてとゞめらる。二日また御衰日とて御藥ばかり奉る。內には朝覲の行幸あり。夕つかた舞ども御覽じて、夜に入りぬれば、御前の御遊びあり。上人達彈物吹物とり〴〵に賜はりて、あなたふと、青柳などあそばせ給ふ。いたく更けてなむ歸らせ給へる。御贈物に、めでたき御本、御馬二つ奉らせ給ふ。御本は土御門大納言とり給ひ、御馬は資盛の少將資時の少將引き給ふ。院の人々の加階も、さき〴〵のまゝにて、御馬引きし少將達、四位になさせ給ふ。三日にぞ宮の御戴餅は侍り。御五十日は朔日なりしかど、よろしからずとて、六日其の御事侍り。古きためしを尋ねさせ給ふに、御五十日よりさきに、坊にゐさせ給ひし事は、まだ例もなしとて、長治の頃東宮の御袴著、親王の御百日などの御儀式を引かせ給ふとぞ。處々の御裝束うるはしうして、時なりぬれば、宮出でさせ給ふ。白き織物の御細長、御小袖奉り、內の御乳母の三位抱き奉らる。近衞の局御佩刀取りて侍ひ給ふ。御臺六つ立てて、御物參る。宮の權

○衝重　檜の白木で造つた方形の折敷に臺のついたもの、食物を載せる器。
○臺盤所　調膳所。
○椀飯　椀に盛つてすゝめる飯。
○御臺　御食物。
○付歌　神樂管絃などにつけて歌ふ歌。
○伊勢海　儛馬樂律の歌。
○萬歳樂　陪樂、平調。一名鳩帝萬歳樂。
○懸盤　食器を載せる臺。四本足の臺に折敷をのせたもの。
○中宮大夫　隆季。
○あへなかりける御事　御薨去。
○すなはち　すぐ即座に。

の大夫陪膳つかうまつり給ふ。市の餅奉るとても、十五日よりこなたは、東の市にて買はるゝにや、殿をはじめ大臣達上達部の饗いつくしうて、女房の中、殿上藏人所みな衝重たまはす。中宮の御方の女房の中、侍所さらぬ處々まで、かず〳〵に賜ひわたす。内の殿上臺盤所などは椀飯なり、今日の衝重椀飯などは、かねて國づかさの人々に仰事ありて、とりどりに調じて奉れり。宮の御臺かさねて御しつらひ改まりぬれば、上渡らせ給ふ。御直衣奉り、定能の中將、畫の御座の御劍取りて、御前に參り給ふ。御もの參り、人々にみき賜はせて、樂人をも召さる。又御前の御遊びありて、拍子はあぜち大納言、付歌宮の權亮、笛藤大納言、笙六角宰相、篳篥頭の中將、琵琶新宰相中將、箏春宮權の大夫、和琴左の宰相中將なり。いとおもしろくて、伊勢海、萬歳樂などかず〳〵に遊ばせ給ふ。はてつ方に、人々に祿賜はすとて、殿大臣達大袿一重、大納言中納言達同じ袿一領、宰相達も同じごとかづけ渡さる。殿のは宮の權の大夫とり給ひ、御祿のよしけしきばみて、御隨身に賜ひにき。人々しぞきぬれば、中宮出でさせ給ひ、御もの參る。御作法かはらず、懸盤六などにや。陪膳は中宮大夫なり。中將少將なる上人達とりつぎて參り給ふ。粉物どもは處處にくばらせ給ふとて、内、中宮の臺盤所には、宮の權の大進御使なり。院の臺盤所にも奉らせ給ふ。御使は少進にて、内の大殿にもて參る。打續き御百日のさだめもあるべしとて、いみじき世のいそぎにいひ騒ぐめり。伊勢の齋宮は、あへなかりける御事の後、す

○女一の宮　功子内親王。
○御卜　齋宮を定めるに龜卜をするその占形。
○御服　御忌服。
○女二の宮　坊門院範子内親王。
○島守　配流の人。
○うらなき　心に包みかくす所ない。
○内にも物し　參内
○宰相も心ゆき　丹波少將の官位の復したのを勅敕盛も滿足した。
○康頼　鬼界島から歸宥された一人。
○行　熊道の勤行。
○はゝきぎ　母といふに帚木のあるかなきかと言ひ懸けた。
○花山の院の前のおほき大殿　忠雅。
○非違の別當　檢非違使廳の長官。
○殿の上　基房の室
○御母代　御母に代りて後見し奉る役。

なはちは御定めもなくて、一昨年ばかり、内の女一の宮御卜にあはせ給ひ、去年二度の御祓はてて、野の宮にいらせ給へりし。今年は伊勢に下らせ給ふなりと聞えしに、此の頃御母なる帥の局失せ給ひしかば、御服にて罷でさせ給ひぬ。齋院も去年の夏御卜ありて、内の女二の宮居させ給へり。まことに、いぬる冬罪ゆるされし島守の人々も、二月にぞ都に參れる。少將をば宰相具して六波羅に參り給ひし、入道うらなきさまにもてなし給ひ、いそぎ内にも物し給ふべく聞え給ふ。司位ももとのまゝなるを、宰相も心ゆきて思したり。康頼ははやう入道とかきこえし、雙林寺といふ處に住みて、まじらひもせず行をのみしけり。島守なりし程も、老いたるはゝきぎのあるかなきかの心ぐるしさに、卒堵婆をあまたつくりて、

さつまがた沖の小島に我はありとおやにはつげよ八重の汐風

とかいつけて、海に流しけりとぞ。睦月の司召によろこびし給ふ人々おほくて、春宮の權の大夫も、まことの大夫にあがり給ひにし。これは兼雅とて、花山の院の前のおほき大殿の御子にいましける、兄弟なる忠親は、中宮の權の大夫と聞えし、右衛門督非違の別當などかね給ひし。今年右衛門督をも別當をも退き給へば、中宮の大夫なる時忠、別當にはなり給ひぬ。殿の上は春宮の御母代の定めにて坐しける。きさらぎ十日内に參らせ給ふ。いとよそほしくて、春宮大夫中宮權の大夫など御供に參り給ふ。花山院の大殿の御女におは

○うつくしげ　愛らしさうに。
○五十日の御儀式　御誕生五十日の御祝
○籠物　果物を籠に入れて木の枝につけたもの。獻上又は儀式に用ひた。
○折櫃　薄板を折り曲げて造つた櫃。
○南殿　紫宸殿。
○めやすきもの云々　御寵愛になつた。
○唯ならぬ　懐胎されたのをいふ。
○御方違　陰陽家の說で、天一神の塞がつた方角を避けて他に遷ること。此の方角に當れば前夜他家に宿つてその方角を避ける。

すれば、皆御兄弟ぞかし。すなはち輦の宣旨ありて、春宮の御方に渡りたまふ。宮をば御乳母の洞院の局抱き奉り給へる、いとうつくしげにおはしますを、めでたう見たてまつり給ふ。中宮にも御對面ありて、いたう更けてなむまかで給へ。贈物に、后の宮の御方より、琵琶をうるはしき錦の袋に入れて、出でさせ給へる、春宮大夫とりて、御前の人に傳へ給ふ。二十二日宮の御百日なりける。かねて雜事ども定められて、春宮の亮なる重衡、行事の由聞えし、大方五十日の御儀式に、かはるけぢめなく、市の餅は十五日より末なればとて、西の市に買ふなめり。籠物折櫃など淸げに設けられて、上も渡らせたまひ、人々侍ひて、御遊びも侍りしとよ。月の末はなべて世の花盛りなりける、殿上の若き君達、大内に行きて、南殿の花見給ひ、詩をも講じつゝ、連句などありて、終日いみじき色香をもてはやし給ふ。内には皇子生まれ給ひぬなりと、女房達さゝめくは、信隆の修理の大夫の女、仕うまつりてありけるを、上めやすきものに御覽じける程に、唯ならぬ事のよし奏して、まかで給ひにし。いとたひらかに、男皇子抱き出で給へりとよ。やがて中宮の御せうとの知盛の右兵衞督、預りて養ひ奉るべき由仰事あり。彌生はじめ。御方違とて院に行幸せさせ給ひける。また十五日は、平野に行幸なる。春深き霞の色に、野山もことにおもしろき折なれば、松さへ一しほの色まさり、百鳥の聲もめづらしうて、上もながめにあかず思召さるべし。院の若宮御室の御弟子と聞えさせしは、院の御まへ下に思しめすことあり

○御樣云々　出家なさらず俗體のまゝ。
○休らはせ　躊躇なさつて。
○春宮かく云々　かやうに皇太子が嚴として御生れになつた以上は今は御氣遣なく思召されて院の若宮御室の御弟子として御出家になつた。
○又なき事　比類なき事。
○制を破り　禁制を破つた華美の裝束。
○珍らか　奇怪。
○うち〳〵のよせ　内々の御ひいき。
○近衞使、東宮の御使　賀茂祭に天皇中宮東宮などから奉幣使がたつ。
○心なし云々　不屈だとお怒りになり。
○北面の人々　院の御所警衞の武士。
○おぼ〳〵しく　はつきり記憶せず。
○小松の大臣　重盛

て、内の御子にもなし奉らせ給ひ、まだ御樣も替へさせ奉り給はず、内に皇子の生まれさせ給はぬ限りは、暫し休らはせ給ふやうなりしに、春宮かくゆるぎなくておはしませば、今は世の中うしろめたからず思召して、卯月御ぐしおろさせ奉られたまへり。十四にぞならせ給ふ。内には又賴定の宰相の女、あぜちの典侍、姫宮うみ奉り給へり。今年賀茂の祭につかうまつる人々、宮々の御使まで、裝束車ども、世になきさまにこのみとゝのへ、いひしらぬ淸らを盡してわたりけるとて、又なき事のよし。うちかたぶく人々あり。院もの御覽じけるが、淺ましきまでびゝしう制を破りたる、さうぞくどもの珍らかなりとて、御けしきあしうせさせ給ひ、俄に人々御かうじあり。近衞使は顯家の少將なり、東宮の御使は權の亮惟盛とぞ、此の二人は、うち〳〵のよせ事なるにや、とがめさせ給はず、馬寮の使などは、わりなきことにわびあへり。又此の年の事とか覺え侍る。世に淺ましかりしは、院の上御遊びせさせ給ふとて、太政大臣さりぬべき上達部など參り給ひ、とり〴〵に奏し給ふ物の音すみ渡り、唱歌の殿上人の聲、いとおもしろくて、院も時々御聲加へさせ給ひ、風さへ心ありて音やめつゝ、しめやかなれば、いとゞしう遊びまさらせ給へるほどに、高雄寺の文覺といへる聖參りて、用意なくみだりがはしきふるまひ仕うまつりにければ、院心なしとむつからせ給ひ、北面の人々して、搦めさせ給ひ、伊豆國に流しつかはされき。これは彌生の頃にや侍りけむ、あやしうおぼ〳〵しくてなむ。小松の大臣は、日頃

なやみ給ふと聞えしに、御心地のひま坐しけるにや、三熊野に詣で給ふ。御子の殿原、春宮の權の亮資盛の少將清經など、みな御供に參り給へり。されど事々しきさまならずやつし給へるしも、君達の御よそひばかりは、何れとなくなつかしう清げに見え給ひぬ。歸り給ひて後、おとゞはまめやかに苦しうし給ふとて、をさ〳〵起きも上り給はず、物なども見入れ給はで、程經給ふれば、入道殿もいみじう思し騷ぎて、御祈りこちたくせさせたまふ。内にも、宮の御百日の折、さぶらひ給へるのみにて、其の後たえて參り給はず、彌生表奉りて、内大臣も辭し申し給ひし。五月二十日、年頃本意とて、さま替へ給ひにき。親ある人のそむきぬるも珍らしう、親にならひて、入道の殿と聞ゆる例も稀なりとぞ、世には申し侍り。さてだにたひらかに坐しなばと、親族の人々おぼいたり。院さへ聞召し驚きて、この心地とむらはせ給ふとて、忍びて御幸おはします。おとゞいといたう驚きかしこまり給ふ。かうおもだゝしきにつけても、いよ〳〵をしう悲しくいかにもして、かけとどめ奉るわざもがなと、兄弟の殿原も、思しまどはれ給ふ。秋になりても、猶さわやぎ給ふ事もなく、世の中心細う思したり。うへ、君達など心を惑はして、よるひる見奉りあつかひ給ひしに、八月朔日、つひに淺ましうなり給へり。四十に二つぞあまり給へる。未ださかりの程にて、御ぐしおろしつるをさへ、誰も〳〵あたらしうおぼいたりし。まいていはむかたなくこそは。今の世のかしこき人といはれ給ひ、心ばへのなだらかに、らう〳〵

○御心地のひま　容態の平靜な時。
○物など云々　食事もし給はずの意。
○表　辭表。
○さま替へ　剃髪。
○そむきぬる　出家した。
○さてだに云々　重盛出家の事は悲しいが、せめて法體の儘でも無事にお出でになればよいと一族の人々は思つた。
○心地とむらはせ　重盛の容態を御見舞にならうとして。
○おとゞ　重盛。
○おもだゝし　面目ある。名譽ある。
○あたらしう　惜しく思ふ。
○らう〳〵し　物事に巧者な。

しう、仕ふる道もまめやかに、人をもよくいたはりて、知る知らぬわかず、なさけ〳〵しう物し給ひしかば、内にも院にも惜しみ聞えさせ給ひ、上人なども、なべて口をしう思ひ歎き給ふめり。此の御蔭にかくれたる男女、すべて月日の光うしなひつる心地して、思ひ歎く事かぎりなし。宮も御服にて出でさせ給へり。北の方君達などは、唯くれまどひて坐するも、ことわりぞかし。御法事など過ぎて、十月ばかり、北の方のもとに、中宮の右京の大夫、

かきくらすよるの雨にも色かはる袖のしぐれを思ひこそやれ

返し、北の方、

おとづるゝしぐれは袖にあらそひてなく〳〵あかす夜半ぞ悲しき

上は、入道ののどめたる心なく、きふにものし給へば、世の政にも、折にふれてひがひがしうなどあるを、此の大臣の萬にいさめ給ひしによりてなむ、何事もなだらかにめやすかりしを、今行先いかになりゆく世にかと、うしろめたう安げなく、思し歎かせ給へるもことわりに、さぶらふ人々も見奉る。冬の頃いみじきなるふりて、山々崩るゝばかりなれば、都の中には人の家どもかたぶきたふるゝあり、處々の塔などもそこなはれつゝ、誠に唯今世のつきぬるにこそはと、人々淺ましう思ひまどひたり。五月の頃ほひ、辻風のはげしかりしさへ、唯ならぬさまに、あさみあへる人多かりしに、同じ年にしも、かかる事の

○上人　殿上人。
○此の御陰云々　重盛の恩顧を受けた人
○宮　中宮德子。御兄重盛の喪に服されて宮中からお出ましになつた。
○のどめたる心　落著いた和いだ心。
○ひが〳〵しう　道理に違つて。
○めやすかりし　見ぐるしからず。
○うしろめたう安げなく　氣遣はしく安心の出來ぬ。
○いみじきなる　大地震。
○辻風　旋風。
○あさみあへる　互に慌れてゐる。

○物のさとし　前兆として神佛の警しめ訓へ。天譴。
○心あるどち　物の道理弁へた人々。
○とりわけたる御使　特別の御使。
○なごみつ　和いだ
○上人達　殿上人たち。
○さりともと　それでもまあと。
○おだしう　穏か。
○あるべかしき　やむを得ざる公事。
○小除目　大臣を任ずる臨時の除目。
○御前　前駆。
○五節　毎年十一月中の丑の日から三日間につ互て舞姫の女樂を御覽になる儀。後には大嘗會の時に限る。
○淵酔　禁中節會の翌日殿上人清涼殿の殿上に會して歌舞宴飲すること。

あるは、物のさとしにこそあらめ、世の中いかゞあらむと、心あるどちはうちかたぶくめり。公にも懼ぢ聞えさせたまひ、御占など行はれつるに、おもき御慎みのよし奏すれば、上も院もやすからず思しめさるゝに、六波羅の入道、院の上を恨み奉る事ありなど聞ゆれば、院にもわづらはしう思召されて、とりわけたる御使ありしに、入道の心なごみつと聞ゆれば、上人達も、さりともとおだしう思しつれど、世の中は何となう靜かにもあらぬさまなり。内にも、「さればよ。」といとゞ内の大臣のなきを、なげき口をしう思召されたり。さはいへどあるべかしき公事などは、かはらぬ作法にて、冬の始めの小除目に、つかさあがりし人々、此の頃よろこび聞えにありき給ふ。中にも殿の太郎君師家の中將は、いぬる月の八日、從三位になり給ひ、九日中納言にて、中將もはなれ給はず。又二十一日、正三位にうつり給へるを、世の人目もあやに思ひて、來し方さらにためしもありがたう見聞えたり。よろこび聞えに、内院などに參り給へる折も、いとよそほしう引きつくろはれて、上人達あまた御前仕うまつりたまへり。五節の頃は、内わたりの今めかしさも例の事なれど、天津未通女のたち舞ふ姿は、いつとてもめづらしくやはあらぬ。殿上の淵酔などは、若き君達いろ〳〵の姿どもにて、うち亂れ給へる、いひしらずなまめかしうて、上の女房達、いみじき事にすめり。又の夜は君達、中宮の御方に參りたまへばこなたにも物見る人人、愛でて惑ひたり。上達部さぶらひ給ひて、いとゞしうもてはやし給ふ。かうはえ〳〵

○心ゆかせ　御満足に。
○高きもくだれるも　貴賤の人々。
○ゐて奉らむと　おつれ申さうと。
○空言　虚言。
○かうのゝしる　斯く騒ぐのは。
○ゆくりもなく　不意に。
○大殿のそく　關白基房の職卽ち官位。
○中納言　師家。
○太政大臣　師長。
○物にぞあたる　物にあたり惑ふ。狼狽する樣。
○氏の長者　其の氏に於ける宗家總領。後特に宣旨によつてなる故に拔擢せられて稱する事もある。
○前の關白　資房。

しきまゝに、世の中思ふ事なく、上も御心ゆかせ給ふやうなりしに、六波羅の入道、日頃は福原にのみ坐しけるが、俄に兵をあまたひき具して、京に入り給ひぬと聞ゆれば、高きもくだれるも、人々心を惑はして、いかなる事の出でまうで來むとすると、おぢさわぎたり。かたへは入道天が下を恨み奉りて、中宮を福原にゐて奉らむとて、御迎へにおはしたりと聞ゆるも、空言にはあらぬにや、八條の殿に行啓なるとて、御前の人々めさせ給ふ。内も院も御胸つぶれて、思召されき。かうのゝしるは霜月十五日ぞかし。十六日入道内に參りて、奏し給ふやうやありけむ、ゆくりもなく、大殿のそくをとゞめ奉り、中納言の中將をもつかさをとりて、太政大臣、資賢の大納言を始め、上達部殿上人四十人に及びて、御かうじの由にて、おしこめられ給ひにき。人々は思ひかけず夢か何ぞとまどひて、たゞ物にぞあたる。其の日やがて、故基實の大臣の御子基通とて、二位の中將にて居給ふを、内大臣にて關白になし奉り、氏の長者など、皆入道のはからひ申し給へりしとぞ。御壻に坐すればなむ、入道あながちに宣旨をも申し下し給ふめり。又の日おほき大臣をば、尾張國に遷し奉る。此の大臣はいみじき琵琶の上手に坐しければ、妙音院の大臣など申して、昔の賴長の大臣の御子にいましける。十八日は前の關白殿、太宰の權の帥に遷され給ひ、京出で給ふなりと聞えし。やがて河尻とかやいふわたりにて、御ぐしおろし給ひつとあるも、世をうしと思召しぬらむ、御心のうちおしはかられて哀れにこそ侍れ。後に承れば、

○按察大納言　資賢
○子うまご　子孫。
○さてもや云々　それで靜まるかと。
○院　後白河。
○おほろけの事　並大抵の事。
○大納言　宗盛。
○日頃になりぬるままに　月日を經るに從つて。
○大德　高僧。
○ゆるしなき云々　人道の許しのない者はかりそめにも參ることが出來ぬ。
○めざましう　惜れるばかりなと。
○あらましかは　重盛がゐたらは如何によからうと。
○さう〳〵しう　寂しく。

筑紫までは下り給はず、備前國にとゞまり給へりとなむ。按察大納言は、子うまご皆都の外に出され給へり。さてもや、しづまるとおほゆるに、二十日と申す夕つかた、入道、宗盛の大納言を、法住寺殿に參らせて、院をさへむかへ奉り、鳥羽殿におしこめ奉る。淺ましともいへばおろかにて、殿の流され給へるさへ、おほろけの事にては、例もなき事なるを、まいて一院のかかる御事をば、いかゞは內には御心うごかせ給はざらむ。上は大方の世物うくのみ思召されたり。入道は大納言を都にするゐて、我が身は又福原に歸り給へり。院のうへは、さらにうつゝとも思召されず、唯あきれさせ給へる御樣なりけるが、日頃になりぬるまゝに、いとゞしう淺ましく思召されて、御涙におぼられてのみ過させたまふ。仕うまつる人も多からず、靜憲といへる大德ぞ、常にさぶらひ給ふ。女房一二人など、それも御前にむつまじうつかひならさせ給へるをば、入道ゆるし給はず。すべて入道のもてなし奉り給ふ事とて、其のゆるしなき、あからさまにも參りがたきを、院はめざましう御覽ぜさせ給ふ。思しあまりては、小松の大臣をのみなむ、あらましかばと戀しう思召されたり。いづかたにも此の大臣の坐せぬ事をさう〳〵しう絶えず戀ひ忍び給はぬはなし。まいて御子の殿原は、まじらひの程もたづきなく、心ぼそげなり。內さへ世を處せう思しつつみて、院に御使しけうもえ奉らせ給はず。日頃だに、ともすれば、入道、政にも口入れ給ひしに、今はひたぶるに、心まかせて、はゞかる方なく掟て給ひ、上の御心ならぬ事多く、上達部なども折にふれて、はしたなく思し侘びつゝ、君も臣も心ゆるびなき世を、あぢきなくすさまじう思されたり。今の關白殿ぞ、花やかに時めき給ひ、すなはち職事何くれの司召もあり。朱器ももて參る。公にもつかさ解けぬる人々あまたあれば、其のかはりに殿原よろこびし給ふありて、春宮大夫も、花山院はかはり給ひ、后の宮の權の大夫なり給ひ、時忠も權の大夫退きて、左兵衞督知盛かはりにはなり給ふ。山の座主をかはらせ給ひ、明雲僧正に再び宣旨下りぬ。師走には又小除目ありて、男女つかさ增りける。此の折后の宮の權の大夫も定められて、實家とぞ聞えし。明けむ年は春宮御袴著あるべく、同じ日まなをも召すべき由にて、かねて事さだめあり。此のほど御ぐしまゐるとて、博士召して、時日とらせ給ひ、御作法めでたくて、內の御乳母の別當の君、參りてつかうまつり給ふ。此の御事は、さきざきの例、かならず三つにならせ給ふ年せさせ給ふなるを、來年は御國讓あるべしとて、それにはゞかり給ひ、かく急がせ給へるなりと、うち〳〵さゝめく人侍りし。今年は大方の世さうざうしく暮れて、立歸る春は、治承も四つと數へき。春宮には、去年よりおほしまうけつる御儀式いかめしうて、睦月二十日御袴奉る。まなをもめさせ給ふ。御傅は左の大殿なり。大夫亮達は更にもいはず、公卿殿上人行きつれて參り給ひ、いとあらまほしう、處々の饗、人々の祿などいつくしうせさせたまへり。賀茂の齋院も、宮の御兄弟に坐しける。左近府に居させ給ひつる、いぬる冬そこにて御袴なれりと

○心ゆるびなき世　油斷のならぬ世。
○今の關白　基通。
○職事　藏人をいふ又攝政關白家司に職事といふ官職がある
○山の座主　延暦寺天台の座主快覺法親王。
○まなをも召す　眞魚始めといふ儀。小兒生後二十箇月又は二十六箇月に始めて魚肉を食はす儀式。
○博士　陰陽博士。
○時日とらせ　時日を占はせ。
○御國讓　御讓位。
○おほしまうけつる　御儀式　御袴著と御眞魚始め。
○左の大殿　經宗。

○かねて世の中に云云　兼て世の評判になつてゐた通りに。
○宮后の宮　東宮とその御母皇后德子。
○神寶　三種神器。
○似げなき　上皇と申上げるも似つかはしからぬ御若年で。時に御年二十。
○宮の無下に　東宮が一向に御幼年であるから。安德天皇御卽位は御年三歲。
○思はずなる　思ひもよらぬ御住ひ、鳥羽殿の御幽居。
○寶のくらゐ　天子の御位。
○すぎ〳〵　引きつづき。次々。
○かなしうし　御慈愛になつたけれど。
○御方々　寵幸を得て皇子女を生まれた御方々。
○うけばりて　思ふ儘に。憚らず。

ぞ。かねて世の中に聞えごちしもしるく、きさらぎには、御國讓の事あり。上は月のはじめより、閑院の殿に坐す。宮后の宮は五條の殿にゐさせ給へば、二十一日上おりさせ給ひて、神寶院の御方に渡し奉らせ給へり。やがて太上天皇の尊號得させ給ひ、新院など聞えさすも、似げなき程の御わか〳〵さにて、宮の無下にをさなくおはしませば、さのみいそがせ給ふべき御事にもおはしまさぬを、去年より世の中のわづらはしく、院の上の思はずなる御住居などの御心苦しさに、寶のくらゐも、何にかはと、萬あいなう思召されて、多くはいそがれさせ給へるなめり。天が下治めさせ給へる事十二年ばかりにや。皇子達も數そはせ給ひ、すぎ〳〵うつくしうておはします。一の宮は春宮にて、こたびゆづりをうけさせ給ひ、二の宮は少將の局とて、宮内の大輔義範の女の腹におはします。七條修理の大夫信隆の御女の典侍は、三四の宮もち奉り給へり。櫻町の成範の御女は、小督の局とてさぶらひ給ひしも、女宮うみ奉れ給ふ。女一の宮は、帥の局とて公重の少將の女にいましき。女三の宮の御母は、按察の典侍とて、賴定の宰相の御女とぞ聞え侍る。女一の宮は、治承のはじめ、伊勢の齋にそなはらせ給ひけるが、去年御母帥殿失せ給ひければ、御服に て野の宮よりまかでさせ給へり。女二の宮も、御卜にあはせ給ひ、賀茂の齋とて、諸司におはします。上は何れの宮達をも、かなしうし奉らせ給へど、中宮やんごとなくて居させ給へば、御方々もうけばりて、女御など聞えさするもなく、皆ひき忍びたる宮仕人のやうにてなむ、さぶらひ給ふ。小督の局は、とりわけたる御おぼえなりしかど、それさへ中宮をはゞからせ給ひ、御心のまゝにもてなさせ給はず。女御の宣旨などもなくておはしけるをさへ、六波羅の入道なめげなりと目をそばめ給ひ、折にふれて、はしたなくいはけなきふるまひをさへして、君の御心をもなやまし奉りたまへば、上もいとゞびんなく思召すに、女君のよろづ愼ましう思しむすぼほれ給へる樣のらうたげなるを、限りなう、哀れに御覽じて、容のまほにめでたうおはすれば、ゑも思しすて難く忍びさせ給ふにつけても、いとゞあやにくに御志まさりて思召さるれば、私ものにて人しれぬ契り淺からず賴め聞えさせ給ふ。かかれば、齋院をも、こゝらの宮達の中にすぐれて、らうたう見奉らせ給ひ、かう〳〵しき方に定まらせたまへるをも、かつはうしろめたう覺束なく思召されにけりとぞ。

○とりわけたる御おぼえ　格別な御寵愛
○はしたなく云々　あさましいおとなげない振舞。
○びんなく　不都合にふびんに。
○思しむすぼほれ　鬱々として。
○らうたげ　いたはしい。いぢらしい。
○まほに　整つて。
○あやにくに　いぢわるくも。
○こゝら　數多。
○かう〳〵しき方云云　皇子女のうちでも齋宮齋院にお定まりの方に對しては氣がゝりに思召した。

○新院　高倉上皇。
○坊に居させ　太子に立ちて東宮坊におはします。
○殿　關白。基通。
○應德　應德三年十一月白河天皇堀河天皇に御讓位。
○閑院より云々　高倉院の御出でになる閑院の里内裏から東宮の御出でになる五條の里内裏まで。
○筵道　通路に筵を敷き上に白布をしくこと。
○御劍　内裏に奉安してある摸造の草薙劍。
○璽の御箱　内裏に奉安してある勾玉及び摸造の鏡を納めた箱。
○よそほしさ　嚴めしさ。
○うちあはぬ　不揃ひな。

卷之二

安德天皇

さしつぎは八十一代の君におはします。御諱言仁と申し奉り、新院の一の皇子にて、御母中宮平德子と申し、さきにも聞えさせし入道太政大臣清盛の御女にておはします。此の帝治承二年十一月十二日に生まれさせ給ひ、同じき十二月、坊に居させ給ひ、同じき四年二月二十一日、三つにて御父新院の讓りをうけさせ給ふ。殿は軈て攝政し給ふ。こたび何事も、應德の古き跡を追はせ給へりとあるは、新院、上、攝政殿何方にもよろしきためしとて、其のをり内、春宮別の處に坐して、御位讓の事侍りしかばなむ。さやうの作法にて、閑院より五條の内裏に、神寶渡し奉らせ給ふ。道の程はるゞ〳〵と筵道しきて、泰通の中將御劍を取りてさきに參り、隆房の中將、璽の御箱とりて、後にあり、上達部引きつゞき仕うまつり給ひ、行幸の御有樣にかはらねど、殿原多くもあらず渡らせ給ふ。路には侍ども武士姿いみじげにて、處々にうちむれつゝさぶらひ、いひしらずむくつけう、目なれぬ事に君達も思さる。何のよそほしさもなく、みだりがはしくてなむ、わたらせ給へり。いぬる年つかさ解けぬる人多かりしかば、いづれの御方にも、人すくななる樣にて、うち

○世にしられたる有職　名の聞えた識者
○時代のおぼえ　當時の寵遇。
○うひ〳〵し　朝廷の儀式典例などには初心で物なれず。
○春宮の大夫　忠親
○おきて　定めて指圖する。
○攝政殿　基通。
○坊官　東宮坊の役人。
○尊號　太上天皇の尊號。
○壺切の劍　立太子の時傳へられる東宮相傳の寶劍。
○官の廳　太政官廳
○南殿　紫宸殿。
○后になずらふ　准后。親王諸王外祖外舅を優遇して三宮と同じ年官年爵を賜はること。

あはぬ御事のみなり。平家の君達あまた物し給へど、世にしられたる有職にも坐せねば、時代のおぼえこそ、人に立ちまさりやんごとなく見え給へ、公事などは、いと〳〵うひうひしうたどられ給ふれば、五條の殿には、春宮の大夫のみなむさる家の君達として、身の才もこよなくおはすれば、唯一人こゝらの事をおきてつかうまつりて、あからさまにもまかでず、この程はよるひるつとさぶらひ給ふ。すなはち藏人も召され、又殿上ゆるさせ給ふ人々、敕授帶劍など、攝政殿定め給ふ。坊官の除目も行はる。院に尊號奉り、御隨身參らせ給へるは、さき〳〵の例のまゝにや、壺切の御劍は、春宮に立たせ給ひしはじめ、一院より奉らせ給ひしかば、そなたに返し奉れ給ふべけれど、唯今鳥羽殿におはしませば、びんなくて新院の御方に奉らせ給へり。卯月御位の事あるべしとて、かねて其の御定めあり。大極殿はまだ造りあへねば、官の廳に御裝束つかうまつるべう申す人もあり。又「南殿こそは。」など、殿原とり〳〵に聞え給ひにし、終に四月二十二日、南殿にて御位に卽かせ給ふ。攝政殿そひ參らせてあつかひ奉りたまふ。ひたぶるにいとけなくおはしませば、行末の千年も誠にはるかなる御事をぞ、天が下なべてたのもしうおもひ聞えたり。入道殿二位殿は后になずらふる宣旨にて、年官年爵賜はり給ふ。此の時代には、平家の人々いとどしう時の花かざしそへて、はえあるさまなり。さき〳〵は、院の御前にて世の政をもしたゝめさせ給ひしを、今の新院は、さやうの方むつかしうせさせたまへば、聞召しもいれ

○おりゐの上　御譲位の天子。高倉院。
○嚴島　清盛安藝守の當時からの平氏の守神で、嚴島へ御幸あるは清盛の心も解けるだらうと思召されて。
○法皇　後白河院。
○さがにくき　さがなき。日わるい。
○つゝましう　遠慮し恥ぢて。
○ねびまさらせ　年長じて見え給ふ。高倉上皇時に御年二十
○うちしめらせ　御落涙になつた。
○まぼらせ　見守られて。
○故女院　建春門院　滋子。
○うもれいたく　御心晴れず。

ず、攝政殿も揚名だちて、世の事は皆六波羅の入道ぞ捉て給へる。おりゐの上は、一院の淺ましうかかる事をも、よそに聞召しつるを、絶えず御心ぐるしう思召さるれば、かつは入道の心もやとくると思召されて、御幸始とても、まづ嚴島に詣でさせ給ふべく思し立たせ給ひしを、山などに聞きつけて、心よからずさゞめくなりと聞召しければ、いとむつかしう、處せう思召されて、止まらせたまへるやうにもてなさせ給ひ、うち〳〵御心やすく仕うまつる上人ばかりに仰せあはされて、御よそひなど調じつるをも、深く忍びさせ給へり。彌生に、鳥羽殿に御幸ありて法皇に御對面おはします。かたみにやすげなき世の物うさを、御心深きさまに聞えかはさせたまへり。世の中わづらはしう思召せば、人の物いひのさがにくきをつゝましう思さるゝものから、御供にも、うときはまぜさせ給はず、こゝろやすき限りにて、多くもさぶらはず。上達部五人殿上人三人などやありけむ。殊にやつれさせ給へる御樣容はしも、あらまほしうめでたくて、年頃にねびまさらせ給ひ、いとゞなまめかしう見えさせ給ふものを、ふかく思しみて、うちしめらせ給へり。御けはひのたぐひなうおはしますを、法皇もいと哀れにまぼらせ給ひては、故女院の御ことをさへ思召し出させ給ひ、いみじうしほたれさせ給ふ。新院も此の院の御有樣の、ありし法住寺殿にひき替へて、いとかすかに、參り仕うまつる人さへをさ〳〵なく、つれ〴〵と行ひなどにて過させ給ひ、いつともなくうもれいたくて坐すを、限りなう哀れに御覽じ渡して、唯

○處せう　思ふ儘ならずして窮屈に。
○ありつる法住寺殿にて　以前に法住寺で朝覲の行幸として高倉院が後白河院に御對面あつた事。
○御賀　後白河法皇滿五十歳の御賀。
○たゞしへなき御住居　鳥羽殿の御幽居
○淨衣　白い狩衣。
○公　朝廷。
○檢校　物事の點檢勘校を掌る職。
○さりぬべきつかさつかさ　それ〴〵相當の役々。
○高倉の宮　以仁王
○時にもあはせ給はず　不遇で。
○つきなからず　似合はしく。

「よゝ」と泣かせ給ふ。御供なる君達も聞えさせやらむ方なく、みな袖のみしぼり給ふ。新院はしばしもかくておはしまさまほしう、出でさせ給はむ御心地もせさせ給はねど、世の中を處せう思しはゞかりて、なく〳〵出でさせ給ふ。一院も今しばしとも聞えさせ給はず、御名殘はかたみに盡きせず思召すにも、ありつる法住寺殿にて、朝覲の行幸などの折のこと、御賀のめでたかりし春の空をも思し出でさせ給へば、唯夢の御心地せられ給ひ、たとしへなき御住居を、恥かしうも悲しうも思しつゞけられて、御涙せきやらむかたなうかきくらされ給へり。新院はやがて御船に奉り、御供の人々も淨衣などに改めて、嚴島に坐す。公には今年大嘗會もおこなはるゝとて、五月撿校の中納言も定めさせ給ふ。さりぬべきつかさ〳〵、まだきに御まうけ仕うまつる。此の頃又入道のはからひ給ふ由にて、一院は八條坊門なる入道の家に御幸まします。高倉の宮と聞えさすは、一院の皇子にて、新院の御はらからに侍り。時にもあはせ給はず、つれ〴〵と世を思ししづみたる樣にて、過させ給へるに、源頼政は、つねに心やすくつかうまつりけり。すぐれたる歌よみの數にも入りたる人なれば、宮も春の朝秋の月のよな〳〵、御前に召され、題賜はせて、つかうまつらせなどせさせ給ひ、物いひあはせ給ふにも、つきなからずめ安きものに御覽じ置きつればなむ、ひまなう召しまつはさせ給へるに、頼政は一年三位してし後、本意かなへるさまにて、程もなく官をも返し奉り、かしらおろして、今は三位入道とか申しに、いか

○まことそらごと云云　眞僞は知らず。
○まが〳〵し　忌ましい。
○皇子と聞えむ云々　皇子と申す方では畏れ多いからといつて宮を源氏にして。
○あらぬ樣に云々　全く異なつた樣子に姿をかへて。
○物のくま〳〵　物かげの隅々。
○信連　長谷部信連
○山　延曆寺。
○寺　三井寺。
○僧綱　僧官僧位。僧正僧都以下すべて
○かくれなう　噂があらはれ立つた。
○法師原の心云々　三井寺の僧達の心も危く氣遣はしいと思召されたのか。

なりけるにか、世にはけしからぬ事を聞え出づるも、まことそらごとは知らず、いとむくつけう人々思ひたり。故爲義が子の行家といへる者を、宮の令旨の御使にて、國々に居ける源氏の兵を召しつゝ、代を傾けむ事を思しかまふるは、此の頼政なむ、同じ心にはからひ申す事あむなるといふも、まが〳〵しきを、いつしか平家の人々聞きつけて、まづ宮をこと方に渡し奉らむとて、公に奏しつれば、すなはちことのさだめあり。土佐國に遷し奉るべき由なり。皇子と聞えむはかたじけなしとて、俄に源氏になし奉り、御名も以仁を以光と改めて、仁の字をばとらせ給ふ。やがて檢非違使なる源兼綱、大夫の尉源光長ゆゝしき武士姿なる者あまた具して、御迎へに參りたり。宮には早うしろしめして、あらぬ樣にやつさせ給ひ、夜に紛れて京を出でさせ給ひ、三井寺に入り給へり。公より遣はし御迎へへの兵は、宮に參りてかくといはすれど、宮はおはしまさず、内に入りて、物のくま〳〵あさり求め奉れど、更におはしまさねば、すべなくて、信連といへる宮の侍をからめて、るて參りたり。又山又三井寺の大衆も、宮の御方人のよし聞ゆれば、内には山の座主、寺の僧綱達召されて、衆徒ども制し聞ゆべく仰事あり。源三位入道も同じ心なりけりといふ事も、かくれなうなりしかば、檢非違使參ると聞きて、入道俄に子供うち具し、五十餘騎にて宮のおはします三井寺に參り給ふ。宮は法師原の心も、うしろめたくや思されけむ、しばしにて寺をも出でさせ給ひ、奈良におはしまさむとする程、まづ宇治に坐しつきて、

○釣殿　池に臨んだ殿舍。
○あへなうならせ給ひ　薨去。
○中々　御つて。
○うたてかりしはや　淺ましくあつたことよ。はやは嘆辭。
○加階　官位昇進。
○暑き頃ほひ　治承四年六月三日遷都。
○さぼかりうるはしき御心　あれ程まで尊いまじめな御心で萬世までと思召した
○わきて　特に。
○其の流れを傳へつる身　清盛は桓武天皇から出た平氏である。
○おぼろけ　よい加減に並大抵の事で。
○つまはじき　氣にくはぬ時指の爪を彈く。

平等院に入らせ給ふ。内には八條なる入道の家に行幸ありて、内侍所をも渡し奉り、中宮も行啓なる。かかれば都の中も、おのづから物騒がしきやうにて、殿原も淺ましう思す。公には平重衡惟盛大將にて、むかひたまふべき仰事あり。やがてこゝらの軍どもをしたがへ、宮の御跡を追ひて宇治に參り、河邊に陣し給ふ。三位入道待ちうけて、かたみに劣らじまけじといどみたゝかひけるさま、いといみじ。宮の御方には、召しに遣はしし國々の兵もまだのぼりあへぬ程にて、御勢ひ僅かなりければ、終にうち負けて、三位入道は、子供も皆討たれ、其の身も平等院の釣殿にて自害して失せ給ひぬ。宮をば御馬に奉り、奈良の方に落し奉りにけるが、道の程にて、いみじき事侍りぬるこそ、淺ましう、宮もあへなうならせ給ひつれ。公の兵のいさみ悅びたりしも、中々うたてかりしはや。さて後、さきにめしとられし信連も、流され侍り。又公がたの武士どもにほ、賞行はせ給へり。宗盛の御子清宗も、此の折加階し給ひぬ。やう〳〵世の中靜まりぬるやうなりしに、暑き頃ほひ都遷とて、福原に内裏つくりて京になし聞ゆべしとぞ、入道のさだめとて、めづらかなる事に人申しあへり。古は帝のかはらせ給ふごとに、都をも遷され侍れど、近き世には、絶えて音にも聞えず。殊に桓武天皇のさばかりうるはしき御心にて、萬代までも動きなき樣にと思召し置かせ給へる御事を、わきて其の流れを傳へつる身として、おぼろけに、昔の御掟をもてたがへ給へる、入道の心を、人しもこそあれと、心あるどちはつまはじきせ

○らうがはし　亂れがはし。混雜の樣。
○一院　後白河院。
○新院　高倉院。
○中宮　德子。
○攝政　基通。
○難波の古事　仁德天皇の時の內裏に茅を葺き軒を整へず皇居の質素であつた事も思ひだされて。
○ありつかぬ云々　落著かぬ住居に苦しんで當惑して。
○すべなく　せんかたなく。
○受領　國司。
○ゆほびか　ゆつたりと廣い。
○里內裏　內裏の外の一時の假御所。
○うちあはず　不便であつて。
○ことそぎ　簡略。

られて、淺ましと思へり。たかきもくだれるも、人々皆出でたつとて、調度ども運び渡しなどする程、いひしらずらうがはしくて、心も得ぬ京童どもは、あきれまどひ泣き悲しみつる樣、あわたゞしきまでなり。水無月二日、行幸とて都を出でさせ給ひ、寺江の行宮につかせ給ひ、又の日福原に入らせ給ふ。一院新院も同じ樣に、御幸坐し、中宮の行啓もあり、かかれば攝政殿より末、上達部殿上人五位六位などまで、心にもあらぬ家移を、なべて此の頃のいとなみにはしけり。さるは難波の古事も思ひいでられて、今は都とそなはりつるよと見るにも、更に皇の都し給ふべきわたりともなく、處もいとせばくて、ありつかぬ住居にわびあへる人々は、古き都のみ戀しう、すべなく思いたり。入道は諸國の受領どもして大內裏つくらすべく思して、さりぬべき有職の殿原辨史などに、いひあはせ給へば、人々定め聞えむとて見ありくに、ゆほびかならぬ處にて、二條三條などの大路も、ことゞくは分ち難く、左京だにまたからねば右京はすべてなしとあれば、さらばとて里內裏になりぬるに、それさへうちあはず、ことそぎたる樣なり。入道天が下を心にまかせ給へるあまり。都をさへ遷し給へるは、物狂はしきまでにて、國民のつかるゝ歎きは、かけても思ひやり給はず、はた此の頃はありつる賴政のみだれの、めざましかりしを思ひて、國々にありける源氏の武士どもをば、殘りなう尋ねあさりて、失ひてむと思いたるを、傳へ聞きて、ほの心得るかたもやありけらし、うちゝかまふる事ある人々も、遠き國々に

○下に　下心に。內心ひそかに。
○さうゞし　寂しく。
○鱸の鱠云々　晉書張翰傳「翰因ニ秋風起ル思ニ吳中菰菜羹鱸魚鱠ヲ」秋風の吹くにつけて故鄕の食物を思ひだしたといふのを福原の近くの生田の鹿の聲に舊都を懷ふのである。
○いと程ならねど　極めて僅かの月日であるが。
○門前改めず　唐の趙嘏の詩に門前不改舊山河の句がある。
○ふりにし　萬葉集「みかの原久邇の都は荒れにけり大宮人の移りいぬれば。」
○三の道云々　陶淵明歸去來辭に「三逕就荒松菊猶存。」

は有りと聞ゆるにぞ、さればよと、やすからず下に歎く人も侍りとなむ。秋になりゆく儘に、あたらしき都の有樣もたゞならず、賑はしうめでたかりぬべき事は露ならで、すゞろに物悲しう夕の空も、いとゞ身に入りて覺え給ひつゝ、又住み馴れぬ人々の心どもには、何となうさうゞしく、旅心地のみして、うら寂しき秋風の夕暮、初鴈の鳴きわたる曉などはさらなり、生田の奧の鹿の聲にも、怪しう鱸の鱠思ひいでらるゝやうなるを、ことたがひて思すめり。月の頃は、若き殿原いひあはせて、一葉の船に棹さしつゝ、近き浦々の月など見給ふも、さすがにをかしう思されき。實定の大將は、めづらしき處の月よりも、なれし故鄕の忘れ難くて、內に御いとま聞え給ひ、忍びておはしたり。いつしか人々の住み捨てたりし都は、野らとなりて、蟲のみ所えがほに鳴き亂れたる、いと哀れなり。猶殘り居ける人の家ども、こゝかしこにあれど、人のけはひなどもせずかすかなり、いと程ならねど、いたく打荒れにける心地して見渡し給ふ。加茂河の流れ、八幡山の姿のみなむ、ありしにかはらぬも哀れにて、「門前改めず。」と、まづ覺え給ひ、「ふりにし久邇の都にも。」など、かへすゞ思ひいでられ給ふ。大后の宮猶爰に殘り居させ給へば、とぶらひ聞え給ふ。さし入り給へる儘に、庭も籬も千種の花のみ咲きみだれ、拂ふともなき道の露は、誰が爲にか白玉敷き渡しつれど、ふみ分けたる跡もなし。「大宮人の移りいぬれば。」と思す儘に、深き蓬のとてそことしもなき三の道をたどりつゝ、「黃菊猶存。」と、忍びやかに獨りご

○容もことなく　容も整つて異様なことなく。
○故づきたる　由緣ある。
○女　小侍從。
○御前　大后の宮。
○日頃の覺束なき　平素御機嫌伺はず如何かと氣にかゝりてゐる事など。
○わりなき御心　せんかたなく切なる御心。
○御文など　二條院から御文が來ても。
○參らせ給はむ　御入内の事は。
○けざやか　著しく
○めづらか　奇怪だと。
○むつからせ　憤る
○音聞もやさしからず　評判も穩かでない。

ちて見めぐらし給ふ。人影もたえ〴〵に、物寂しけなる御有樣の心苦しう思ひいづる事多くて、涙ぐまれ給へり。こなたにさぶらふ小侍從の君は、容もことなく心ばせありて、歌なども故づきたるふし讀みいでて、人にも心にくきものと思はれける。大將もとより見はなたぬものにおぼいて、時々かよひ給ひけり。今日もまづそなたにおとづれ給ふ。女もめづらしう見奉りて、御前のありさまなど聞ゆ。大將この人して御消息聞え給へば、宮、「こなたに。」とのたまはす。やがてまゐりて、御簾の前にさぶらひ給ひ、日頃の覺束なきなど聞え給ふ。宮もなつかしげに、昔今の御物語せさせ給へり。此の宮と申すは世の人二代の后など申しし御事にて、故公能の大臣の御女におはしまし、近衞の院の御時、内に參らせさせ給ひ、后に立たせ給ひしかど、帝はやう隱れさせ給へりし後は、世をうき物に思召されし、御行ひなどせさせ給ひしに、又二條の院の、わりなき御心にて、父大殿にもせちに聞えさせ給へば、遁れがたくおぼいたるを、宮いとあるまじうはづかしき事に思召されて、御文などあるにも、御かへりだに奉らせ給はす。まいて參らせ給はむ事は、けざやかに思したえつるを、帝あやにくに恨み侘びさせ給ひけるにぞ、終に二度内にいらせ給ひにき。院に聞召して、ことに例もなく、めづらかなりとてむつからせ給ひ、上達部なども世の音聞もやさしからず、おもひなやみ給ひしに、上は唐土のためしをなむ引かせ給ひ、人のいさめにもしたがはせ給はず。はゞかる方なき御もてなしにて、もて出でて后にする奉らせ給ひ、いみじう御思ひなりけるに、其の帝さへながくもおはしまさざりければ、宮はかへすがへすも、人わらへなる世を、處せう、「物にもがなや。」と思し歎かせ給ひ、其の後はうき世の事聞召し入るべくもなく、ひたみちに御行ひがちにておはします。何れの帝の御時も、皇子の生まれさせ給はざりしをなむ、宮人どもも口をしき事にし侍りし。近衞の院の御時は、故頼長の大臣の御子にならせ給ひて參り給ひしぞかし。されど誠の御筋は、德大寺におはすれば、大將は御兄にて、父の大殿失せ給ひしこなたは、たのもし人にて、御後見つかうまつり給へり。大將はしばしさぶらひて立ち給へるまゝに、小侍從の君のもとにとまり給ひぬ。かくわざとまうで給へるも、多くはこの人によりてなれば、淺からぬ樣に語らひ給ふ。「逢ひしあへば。」といふめる秋の夜の、げにいととく明けぬる心地して、曉の別れも常より身に入りて覺え給へば、かたみに袖のみ露けくてやすらはれ給へど、明け果てなむもはしたなくて、なく〳〵出で給へり。女も殊にいみじき朝けの姿を遙かに見送りてたてり。大將もあかずのみおぼいて、かへりみがちなるを、御供なる經尹あはれに心ぐるしう見參らせけるが、立歸り女のうちながめてある處によりて、

○人わらへ　人の前きまりわるく。
○物にもがなや　源氏物語の引歌に「とりかへす物にもがなや世の中をありしながらの我が身とおもはむ。」
○ひたみち　只管。
○何れの帝　近衞院
○何れの時も。二條院
○父の大殿　實定及び后の父公能。
○かくわざと　實定がわざと舊都に來たのも小侍從に逢ひたい爲だから。
○逢ひしあへば　古今「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬるものを。」か。
○曉の別れ　後朝の別れ。
○やすらはれ　躊躇せられて。
○はしたなく　きまりがわるい。
○朝け　早朝。

物かはと君がいひけむことの葉のけさしもなどか戀しかるらむ

これは大將の通ひ給ふ頃、いつの時にか小侍從、

待つ宵にふけゆく鐘の聲聞けばあかぬわかれの鳥はものかは

○御いとまの日數　暇暇の日數も限りがあるから。
○今の京　福原。
○淺茅生　短い茅の生えてゐる處。
○いかですむらむ　源氏物語桐壺「雲のうへも涙にくるゝ秋の月いかで澄むらむ淺茅生の宿。」
○やさしき云々　優雅な方面の事にはまづ實定の噂をした。
○色にこそ云々　顏色に表はしては出さぬが心には不安を歎きながら。
○流木　流人。
○目代　國司の代理
○もののきこえ　風評。

と讀みたりけるを、思ひいでてなむきこえけるなめる、いみじうも仕うまつりけりとて、大將ことにほめ給へりとぞ。

大將はた優なる歌人におはすれば、かうやうの事につけても、心とまりて、故鄕の見すてがたさも、せむ方なきまでなれど、御いとまの日數もあれば、心にもあらで、又今の京に歸り給ふ。若き君達のこよなき事にめで惑ひ給ひし須磨明石の月のながめをばさし置きて、はる〳〵と物寂しう淺茅生の陰をわけつゝ、「いかですむらむ。」といふばかりの月をもてはやし給へる、大將の心深さを、たぐひなうもおはしけりと、時の人やさしき方には、まづ聞え侍りしよ。都遷の後は、大方の世長閑にもあらで、入道の心のおそろしさに、色にこそ出でね、やすげなう歎き渡りつゝ、神佛に仕ふる人々は、世の中なほりなむことを、起きふし祈り申すのみなりし。此の頃大中臣爲定、伊勢に參りて、御神の御前にて、君の御祈りつかうまつりけるが、月の頃より侍りし。

月讀の神し照らさば天雲のかかる浮世も晴れざらめやは

源の頼朝とて、伊豆國の流木なりしものは、平治に亡びにける義朝の子なりしが、此のごろ軍おこして、其の國の目代なる平の兼隆を討ちとりて、やがて伊豆國をも出でつゝ、日に添へて勢ひまさりにければ、いつしか關の東の國民をなびかせたりとて、福原にもののきこえあり。入道安からずおほいて、公に奏し給ひ、官軍をつかはして討たしむべくおきて

○さらぬ軍　平家の侍でない軍兵。
○めざましう　驚くべく大變な事に。
○いかならむ云々　噂は眞らしくはないがどうだらうかと淸盛も心配に思つた。
○心をかはし　心を合はせ味方をする。
○堪へても見えず　堪へられさうにも思はれず。
○けしきばかり　ほんの形ばかりの一寸した。
○嫉き　口惜しく憎い。
○心づきなう　寄りつくすべもなく。
○まめごと　信實なこと。

給ふ。少將惟盛、三河守知度、薩摩守忠度、おの〳〵討手の使にて、平家の侍ども、さらぬ軍もかず〳〵に從へて、長月十日餘り、東に下り給ふ。此の亂れによりて、關東の國々の貢物は、絶えてもて參らぬを、おほやけにも、めざましうおぼしめさるゝに、又世には富士の裾野のわたりに戰ひありて、官軍うちまけつゝ、人々逃げて伊勢國に到れりと聞ゆるも、よに誠しうあらじとおぼゆれど、入道もいかならむとは、さすがに思したり。討手人達は、富士河につきて陣するたまへるに、源氏の軍そこばくなるよしにて、そこらの國國みな心をかはしけりと聞ゆれば、こなたは、さのみ兵も多からねば、堪へても見えず、いかにせましとためらふほどに、源氏の軍ども、陣の後を塞がむとかまふるよし聞ゆるにぞ、いよ〳〵うしろめたくて、けしきばかりの戰ひもなく、ある限りひき退きたり。霜月はじめ、大將軍なる惟盛の少將は、從ふ兵僅かにて、もとの京なる六波羅におはしつきたる、こと人々もとり〴〵に逃げてのぼるとて、忠度、知度、貞俊、忠綱などは、三河國に止まり、忠景は伊勢國より、京に入りける。福原には、入道を始め誰も〳〵あさましう、嫉きこと限りなく討手の人々をさへ、いふがひなしと心づきなう思ひきこえたまふ。猶かくてやむべきかはとて、又々さし加へつかはすべきさだめありて、賴盛の中納言、敎盛の宰相むかひ給ふなりと聞ゆれど、まづ淸綱定安などの武士を、陸より下し給ひ、又筑紫の兵を、船にてつかはすべく仰言ありきといへど、まめごとにもあらぬにや、いそぎたつと

○たゆたふ　ゆらゆら心動いて定まらず
○座主　明雲僧正。
○やくなし　無益。
○ろうじ　論じ。
○五條洞院云々　土御門の北、東洞院の東にあつた里内裏。五條洞院の里第を里内裏としての意。
○新院　高倉院。
○あつしう　篤しうで、病氣にかゝる。
○泉殿　寢殿造りの附屬建物で、泉水の上にかけて造る。
○思しむすぼほれ　御心が晴れず。
○高倉の宮の御事　以仁王兵を擧げ給ひし事。
○此の御前　後白河院が御承知のやうに
○山の訴へ　延暦寺の衆徒が福原から京へ再遷都を歎願したこと。

しもなく、たゆたふ樣なり。山には座主の僧正、東の仇どもほろびぬべき御祈りに、いみじき法行ひ給ふを、衆徒はやくなしと、ろうじて、おの〳〵いひあはせつゝ、舊き都に還らせ給ふべく、公に訴へ申すめり。かやうのまぎれにや、大嘗會などは音もなくなりて、新嘗會ももとの京なる神祇官にて行はれて、五節も例のさまなれど、東のみだれに、よろづつゝしませ給ふとて、さのみはえ〳〵しうもあらず。節會に參り給ふ殿原さへ、多くも侍らざりき。此のいそぎ過ぎつれば、又もとの京に歸らせ給ふとて、上まづ御首途せさせ給ひ、土御門の大納言の家に入らせ給ふ、二十三日やがてそこより行幸おはしまし、二十六日京に入らせ給ひ、五條洞院の殿を内裏にて、渡らせ給ふ。新院は日頃あつしうのみせさせ給ふとて、此の折も御乳母の別當三位仕うまつり給ひ、御車にて御幸坐す。やがて池殿とて、賴盛の中納言の家に入らせ給ふ。一院は御輿にて、人道の家なる六波羅の泉殿に渡らせ給ふ。此の御前は去年法住寺殿を出でさせ給ひし後は、何處にても、はれ〳〵しからぬ御住居に思しむすぼほれてのみ過させ給へる。人々哀れに見奉れど、入道は高倉の宮の御事をさへ、此の御前のしろしめしたらむ樣に、心づきなう思ひて、いよ〳〵心置き奉り給へば、仕うまつる人もありしまゝにて、こと人は更にゆるし給はずなむ。こたびの都遷は、山の訴へ、東の亂れなどによりてなりと聞ゆれば、大衆はかひありておほゆるに、殿原さへ心ゆきたる事にて、急ぎ渡り給ふ。平家の人々だに殘り給はず、皆かへり給へり。たかきもくだれるも、住み馴れし故郷のなつかしさに、いと嬉しき事にしけり。今は長閑に春のいそぎをこそなどいへど、公には東ざまの事を、殿も大臣達もうしろめたう思しやれば、新院も御心苦しう思召されて、人々御前に召させ給ひ、さりぬべき祈りの事など仰せあはせ給ふ。官の廳にて、仁王會行はるゝとて、撿校行事をも定められ、又陣には御守り怠るまじう、衞府の人々に仰事あり。六波羅の入道も、さこそ心強がり給へ、近江路のわたりまで、軍おこりてみだりがはしき由聞きて、すべなく思せば、ひたぶる心も少しはなごみにけるにや、去年つかさどけぬる人々も、かつ〳〵ゆるされ給ふやうなり。前の關白大臣も、京にかへり給ふべき宣旨ありて、召しに遣はしつれば、其の方ざまの人人、いみじうよろこび給ふ。花山の院のおほき大臣、北の政所の御親に坐すれば、殊更に近きゆかりとて、去年のさわがれの折より、門もとぢてひき籠り居給へど、御かうじにはあらねば、關白殿歸らせ給ふと聞きて、すなはち開かれき。殿の文書どもも、公の御さたにて、こなたにあづかり置き給ひし、此の頃返し參らせ給へり。殿は憂きに沉み給ひし涙の川の、早くもうれしき瀨にながれよりけりと思すも、中々夢のやうにてなむたどられ給ふ。珍らしう見奉る人々は、御容の事なるを、ほいなく口をしう思ひきこえ給ふ。法皇は新院にさへ御對面のたはやすからぬを、いぶせう思召さるゝが、かたじけなしとて、ひとつ處におはしますべう、入道聞えたまふを、いづ方にもよろこばせ給ひ、やがて新院のお

○春のいそぎ　新年の準備。
○殿　基通。
○官の廳　太政官廳
○仁王會　朝廷で毎年三月七月又は臨時に御祈りの爲に仁王護國般若經を講ずる儀式。
○撿校　物事の點檢勘校を掌る職。
○行事　儀式公事などを主として取扱ふ職。
○ひたぶる心云々　一轍の短慮も少しは和らいだか。
○かつ〳〵　ほつほつ片はしから。
○前の關白　基房。
○花山の院のおほき大臣　忠雅。

○池殿　頼盛の邸。
○驛の鈴　官人諸國に赴く時に賜はる驛路の鈴、振り鳴らして驛馬を徵發する證としたもの。
○山寺　延暦寺や園城寺。
○金堂　本尊を安置する佛殿。
○こゝら年經つ　多年傳はつた佛法の場
○春の野の心地　草を燒いた春の野のやうな心持。
○夷のきぬ　戎衣。甲冑。
○怠り　をらど。罪過。
○こはかりし　手強くはあつたが。
○山階寺　興福寺。
○三井寺の燒けぬる云々　三井寺の燒けただけでさへ未來で罪を得ると思はれるのに。

はします池殿に渡らせ給ふ。仕うまつる人も、定能の宰相資時の少將など二三人、入道のゆるし給へりとて、參り加はり給ふ。法皇は前の關白殿の事をも、あらまほしう嬉しき事にせさせ給ひき。公には、師走又左兵衞督知盛を討手使にて、驛の鈴賜はせ、近江路より駿河國に向ふべくさだめさせ給ふ。近江の軍には、山寺などの法師原心をかはしけりと聞ゆれば、平家の兵どもゆきむかひて、たちまちに法師原うちまけにしかば、淡路守淸房、三井寺の僧房ことゞく燒き失ひて、金堂ばかり殘りぬる事のあはれに、こゝら年經つる御法の場の、時の間に春の野の心地し侍るこそ、世に淺ましうは見給ひつれ。京には上達部受領などの人々に、兵を參らすべく仰事ありて、陣のまもりも殊にきびしう、祭の折の樣にはあらず、衞府のつかさども、うとましき夷のきぬにて、夜晝つとさぶらひて、くらうなれば、「たぞ。」と咎むるも例の事なれど、思ひなしむくつけう侍りにし。かくて今年は暮れぬめりとおぼゆるに、又いみじう侍りし事は、六波羅の入道、御子の頭中將重衡を奈良の京に遣はし給ひ、衆徒どもの、高倉の宮にこゝろよせ奉りし怠りをとがめ給ふ。頭中將、奈良坂に打向ひ給ふに、大衆きびしう防ぎて戰ひ、こはかりしかど、終に破られて、法師原山階寺に籠りしかば、やがて平家の兵ども、火をさしつればなむ、衆徒もせむかたなく逃げ惑ひて、命を失ふも多く、さしもいみじう造りみがかれし大佛も、煙のまよひにそこなはれ給へる、いと淺ましう、平家の人々の、後の世の罪も恐ろしう。三井寺の燒けぬるだにあるを、それは金堂の殘りしぞかし。爰は東大寺も興福寺も、御堂々々殘りなくて、東大寺の御佛は、聖武の帝の御願にて作られたりし、其の後多くの年を經て、またかかることはなかりしとよ。興福寺は淡海公の建て給へりとて、藤氏の殿原殊にたふとみ給ひ、公にもおぼろげならず思し置かせ給へりしに、衆徒の心をさなさに、かかる事もありけりとはいへど、さしあたりては、平家の人々の用意なきに聞えなして、心あるも心なきも、世の中いかゞあらむと、うち歎きたり。まして藤氏の君達などは、やすからず下にはなやみ給ふめれど、入道のひたぶる心の煩はしさも知り給へば、ことに出ででものたまはぬさへ、いとほしうぞ侍りにし。年も歸りぬ、朔日にも、藤氏の君達は、山階寺の燒けぬるによりて、籠り坐しければ、内に參り給ふ人も多からず、御節會もかたばかりにて、奈良の火事にはゞからせ給ひ、雅樂づかさもめさず、國栖の奏もなし。春の始めの御儀式のうるはしからぬを、ゆゝしき事に思ふ人もありとなむ。新院いぬる年より例ならず坐して、物なども御覽じいれず、臥しがちに物せさせ給ふとて、中宮も御心苦しう見奉らせ給ひ、さまゞの御祈りせさせ給ふ。去年の冬も禎善僧正仰事うけたまはり、東寺にて孔雀經の法行ひ給ひ、さらぬ處々にても、驗ある僧綱達、とりゞに仕うまつり給ふ事絶間もなけれど、更にしるしも坐さず。そこと苦しげにもせさせ給はねど、いといたう痩せ細らせ給ひ、日にそへてよわらせ給ふ樣にて、春になりてはいよ〳〵頼みすくなく見えさせ

○淡海公　藤原不比等。
○おぼろげ　ひと通りならず、鄭重に思召された。
○用意なき云々　平家の施忽であると言ひなして。
○年も歸りぬ　治承五年になつた。此の年七月養和と改元。
○御節會　元日の節會。節會は節日に羣臣に宴を賜はる儀。
○雅樂づかさ　雅樂寮の官人。
○國栖の奏　大嘗會節會の時大和國國栖の人參賀して樂を奏し御贄を獻ずること
○孔雀經の法　孔雀明王を本尊として除災などの爲に修する祈禱。
○そこと苦しげに云云　別にこれと取りたてて苦しさうにはなさらぬが。

○まめやか　御看護何やかと忠實にしたが。
○御けしき　御容態
○池殿　高倉院の假御所たる頼盛の邸。
○寮の御馬　左右馬寮に飼つてある馬。
○春の雪云々　消え易い春の雪に競うて
○かなしうし　悲しみ愛し。
○限りある御身　此の上なき高い御身分最高の限りの御身分
○たはやすからぬ　容易ならぬ。
○いぶせう　窮屈に

給ふを、内にも宮にも思し歎く事限りなくて、御修法などは更にもいはず、神の社、佛の御寺に、御祈りの使ひまなく立てさせ給ふ。上達部上人達も心を惑はして、つとさぶらひ給ひ、見奉りあつかひ給ふさま、おろかならず。中宮もそひてさぶらはせ給ひ、よるひる御心をつくさせ給ふ。ちかう仕うまつる女房達も、見奉りなやみて、御藥何やかやとまめやかなれど、すべてかひなき御樣にて、睦月十四日、御けしきかはるとて、世の中ゆすりみちたり。攝政殿左右の大臣こゝらの殿原、みな池殿に集ひ參り給ふ。平家の君達も足を空にて惑ひ給ふ。山の座主何くれの僧達、心をおこして加持まゐり騒ぐ。こゝかしこの御幣使御誦經の御使の五位六位などは、寮の御馬にて走りまどひつゝ、いみじげにのゝしりつるに、遂に其のしるしなくて、春の雪にきそはせ給ふばかり、はかなう消え入らさせ給ひぬ。淺ましなどもいへばおろかにて、誠に照る日の暮れし心地に、院のうちの男女どよみて泣きまどひたり。中宮の思し入りたる御樣もことわりなるに、一院の御心のうち、おしはかり奉るもかたじけなう、更にたとふべき方なう思しまどひて、臥しまろばせ給ふ。皇子達の御中に、とりわけかなしうし奉らせ給ひしに、限りある御身どもにて、御對面などのたはやすからぬをさへ、いぶせう堪へがたき事にせさせ給ひ、近き頃より同じ處におはしまし、覺束なさの御恨みも殘らず、かたみに御胸あきて、はかなしごとをも、まめごとをも隔てなう聞えかはさせ給ふるにこそ、いちはやき世のうれはしさも、すこしはなぐ

○同じ帝と聞ゆれど　歴代の帝は同じく一樣に帝とは申し上ゆるけれど特に高倉院は。
○あへなく　張り合ひなく、頼みなく。
○なよびか云々　柔和で物事に巧者で。
○ほゝゆがむ　事實を違へて語る。
○下に　心の中に。
○屈しいたく　嘗々として御心晴れず。
○御心知るごち　御心を知り申してゐる人たち。
○末の代には云々　末代には過ぎる位に御心がすぐれてお出でになつたのを。

さませ給ひつれ。それさへ幾日もあらで、かく淺ましき御事を、更にうつゝとも覺えさせ給はず、夢かとのみ惑はれ給へり。同じ帝と聞ゆれど、御心ばへの殊にありがたう物せさせ給ひ、民を育ませ給ふ御心のあまねさは、昔の聖の帝のためしに劣らせ給はず、山風の寒き夜は、片田舍の賤の住家を、はるかに思召しやらせ給ひ、竈の煙の立ちそふ朝は、國民の豐かなるをよろこばせ給ひ、人を憐ませたまふ御心ふかう坐せば、男も女も仕うまつりよくて、萬代とのみ祈り聞えさせしに、思ひの外なる御事の、いとあへなく、御本性のあまりなるまで、なよびかにらう〳〵しうおはしまして、入道の心の儘にふるまひて、世の政などのうちほゝゆがむことの多きを、つねに御心苦しう思しなやみて、下に歎かせ給ひけるに、一院の思はずなる御住居に、屈しいたく眺め侘びさせ給ひしを、御覽ぜしより、いとゞしうむすぼゝれさせ給ひ、いみじき御物思ひのつもりぬるまゝに、いつとなく御病がちに、はれ〴〵しからず坐しし事の、かたじけなき事と、御心知るごちは、限りなう悲しう思ひ聞えけり。六つにて東宮に立たせ給ひ、八つにて御位に卽かせ給ひ、二十年にて去年おり居させ給へば、今年ぞ二十一に坐す。盛りの御世を讓らせ給ひ、院と聞ゆるだに、あかず口をしう人々思へりしに、いともあわたゞしういそがせ給へる御事を、かへす〴〵あたらしう、末の代にはあまるばかりの御心のめでたさを、天が下こぞりて惜しみ奉らぬはなし。まいて年頃なれつかうまつりし君達は、哀れに心細うより所なく思い

○ゐて奉る　葬送し奉る。伴ひ奉る意。
○いみじげなる物　喪服をいふ。
○心をさめたる　心落著いた。現心ある。
○御幸かなしき　玉葉集「道かはる御幸悲しき今宵かな限りの旅と見るにつけても。」
○内のまだ云々　主上はまだ何事もおわきまへにならぬ御年輩であるのを。
○内も　内裏も。
○椎柴の袖　喪服。椎柴は喪服の染草。
○かいしめり　かきしめり。
○さやうの方云々　武事の方にたづさはつて。
○ありしにかはらず　昔にかはらず。
○いろはせ給ふ　關係し處理し給ふ。
○のちのきさらぎ　閏二月。
○いみじき云々　すぐれた前世の因緣があつた。幸運な。

ためり。なく〳〵清閑寺にゐて奉る、御送りの人々の、いみじげなる物を上に著たるなり□どもは見るに目もくるゝわざにて、女房達は心をさめたるもなく、聲をも忍びあへず泣きたる、ことわりなりかし。「御幸かなしき。」と、西行上人の言の葉も、さらに思ひいでらるゝ折に侍りしか、中宮にはめる御衣奉るも、夢のこゝちせさせ給ふ。内のまだ何事も思召し入れぬ御程の、うしろめたう思さるゝにつけても、こと御腹の宮々達、いときなき御服姿を、哀れに御心くるしう思ひやり奉らせ給ふ。内も、諒闇とておろしこめられて、上人なども、なべて曇らはしき椎柴の袖は春の色もなく、物あはれなり。此の程三條の入道左の大臣、梅を折りて實守の中納言のがりつかはし給ふとて、

いかでかくうき世をしらで梅の花今年も同じ色にさくらむ

花鳥の色音も、今年は徒らに物うく詠め給ふ處おほくて、世の中かいしめりたる樣なれど、國々には公にそむき奉り軍をおこす由、ひまなく京に聞ゆれば、平家の人々は絶えず さやうの方にかゝづらひ、入道もしづかならぬ世を思ひ侘びて、一院をもはしたなくもてなし奉らむは、あしかりけりとおぼいて、又ありしにかはらず政をもいろはせ給ふべう啓し給へり。今年は二月二つありときこゆれば、春の日數おほく、人の心もわきてのどやかなるべきに、さはなくて睦月より、あやしうさう〳〵しげなりし。のちのきさらぎには、六波羅の入道さへ、俄に病して失せ給ひき。六十四にいましけり。いみじき宿世ものしつる人にて、子うまごと、處せうさしならべて見る事は、更にもいはず、中宮の御親にて、當代の祖父にいまし、上なき位をきはめ給ふのみか、后になずらふる御定めのやんごとなく、世を心にまかせてまつりごち、露ばかり心に適はぬ事なく、帝は代らせ給へど、いづれの御時にもはゞかる方なう、もてなし給ひ、たぐひなき幸人なりといはれ給ひしかど、末の露もとの雫の常なき風にはえ遁れ給はず。春の夜のはかなき夢に見なされ給へる、げに盛者必衰なども、今更の事のやうにて、二位殿君達は、明けぬ夜の闇にまどひ給へり。殊に東路越路なども、靜かならぬに、又西の國南の海も、波風立ちさわぎぬと告げたりければ、平家の人々、折しもあれ、世の中のやすからぬ歎きをさへとりあつめて、心苦しう思す事限りなし。今は宗盛ぞ世の事をしたゝめ給ふとて、一院のはれ〳〵しからぬ御住居も、かたじけなしと見奉り給ふにや、法住寺殿に御幸なし奉れ給へり。猶殿原は、入道の忌の程もやすき空なく、弓箭の道におり立ちつゝ、法事をさへ過し給はで、重衡は關の東にうち出で給ふと聞きしかど、いかめしき戰ひなどなくて、源氏逃げちりしかば、やがてのぼり給ひし。勝ち得つとて、兵どもしたりがほにほこりありき侍りしはや。中宮は、霞の衣たちかさねさせ給ひ、鶯の百囀りも聞き厭はしう、御涙のつまに思召さる。何方にも花の盛りさへすさまじう、けに墨染にもさかせまほしく、心とゞめてもてはやし給ふ人もなく、春の光の長閑なる折だに、しづ心なくちり行くめるを、まいてあらましき風に任せ

○后になずらふる　后に准じて年官年爵を賜はる宣旨があつたこと。
○末の露云々　新古今「末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつ例なるらむ。」
○二位殿　清盛の妻時子。
○いかめしき戰ひ云云　平重衡維盛等と共に源行家を尾張洲股に破つたのをいふ
○御涙のつま　鶯の囀りも御涙催す種と
○墨染にもさかせ　古今集「深草の野邊の櫻し心あらは今年許りは墨染に咲け。」
○春の光の　古今集「久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ。」
○あらましき風　荒き風。

○つかさもかへし　辭職し。
○時の人　時めいた人。
○よせ重く　上下の人から信頼され重んぜられ。
○故院　高倉院。
○此の後の撰集　玉葉集に土御門内大臣の歌としてある。
○尊勝陀羅尼　佛頂尊の陀羅尼。これを誦持すれば增壽無病心身安穩といふ。陀羅尼衆德を具足してゐる經文又は名號。
○物のさとし　天の戒の前兆。
○古き跡　古代の先例。

たるは、惜しみとゞむべくもあらぬが哀れにて、世の中の常なさにも、まづよそへられたり。邦綱の大納言も、病おもくなりて、つかさもかへし奉り、かしらおろし給ひにし。やがてなくなり給ひしとぞ。これも平家に、したしうおはしければ、入道何事をも聞えあはせ給ひ、うち〳〵は公の御後見のやうにおもむけ給へしかばなむ、いみじき時の人にて、心ばへあらまほしう、世の爲かひ〴〵しう物し給ひしとて、内にも惜しませ給ふ。御女達は、故院の御乳母別當三位をはじめ、中宮内などの御乳母達にてさぶらひ給へば、ことによせ重くこそは侍りつれ。かかるにつけても、故院の御事を忘るゝ世なく、何れの殿原も戀ひ忍び奉り給ふ。花の散るを見て、誰とかや、

散り殘る花だにあるを君かなど此の春ばかりとまらざりけむ

此の後の撰集には、土御門の内の大臣となむはべるよし、承りし。故院は御葬りのころ、御諡奉らせ給ひ、高倉院となむ聞えさせ侍る。公には國々の亂れのことなく治まりぬべき御祈りとて、處々にて尊勝陀羅尼、不動明王の御容など、書寫し奉るべう仰言ありしに、又人々の失せ行くをさへ、物のさとしにやとおぢ聞えさせたまひ、さやうの御祈りの爲にや、東大寺興福寺いそぎ造らすべう、宣旨下させ給ひき。上の御位の後、年の號も改まるとて、去年師走さやうの御定めありと聞えしかど、博士ども古き例を考へ出でて、「御卽位の同じ年改めさせ給ふ事は、古き跡多くも侍らず。」と奏しけるにぞ、暫し音もなくて、今

○うれはしき事　憂ふべき事。
○飯飢　饑饉。
○田子　農夫。
○たづきなく　よるべなく。
○院號　女院の名。天皇の御母准母内親王等に授けられる尊號で宮城の門號をつける。
○齋院　範子内親王は御父高倉院の喪で齋院を御退下。
○さてのびぬる　其の儘で延期された。
○院の御事　高倉院崩御のこと。
○神祇のつかさ　神祇官。
○あへなくなり　逝去された。
○五壇の法　東西南北中央の五壇を設けて行ふ修法。
○心地おこりて　病氣に罹つて。
○うけひかせ　承諾する。

年文月、さきの御代の治承は止めて養和になさせ給ふ。こたびの文字は、敦周なむ奉り侍りしとよ。年の號も、かはりぬれば、事なほりて、天が下安らかならむと、國民ども喜びあひつるに、いとゞしううれはしき事おほく、秋になりては、飯飢とか世に淺ましう、田子の刈り積む稻とほしくて、賤の住居の堪へがたうわびしきは更なり、つかさある人々、名ある僧綱達、たづきなくまどひて、つかれ臥しつゝ、きし方ためしもなきまでなるを、一院も攝政殿も、御心苦しう、すべなく思召されたり。冬の頃中宮も院號えさせ給ひ、建禮門院と申しき。齋宮も此の御代にはまた居させ給はず、齋院も院の御服にておりさせ給へり。いづちも御かはりなるべき姫宮おはしまさぬなめり。内には御禊なども去年ありぬべきを、都遷の後かしこにて御行ひがたきよし、人々申ししかば、さてのびぬるに、今年は院の御事にて、又音もなくなりぬ。長月兵の亂れにより、御祈りあるとて、遠き昔の跡を尋ねさせ給ひ、伊勢の御神に、こがねの鎧を奉らせ給へる。御使は神祇のつかさなる定隆なりける。伊勢に下りし道の程にて、あへなくなりにしかば、こと人かはりてなむ、神垣には參り侍る。京には誰も〳〵、ゆゝしき事に思いたるに、神無月日吉の社にても、同じ祈りとて、五壇の法行はれ侍りにし。覺管法印を、阿闍梨に召されしに、仕うまつりもはてず、俄に心地おこりて、失せ給へりと聞ゆるも淺ましう。佛神のうけひかせ給はぬにやと、かた〴〵心ほそき世を、殿も大臣達もいかならむと、うしろめたう思すめり。は

○たづさひ　たづさはり。
○追儺　毎年十二月晦日疫鬼を拂ふに朝廷で行はれる儀式。
○振鼓　振つて鳴らす鼓で小球が絲でついてゐるもの。
○なやらふ　儺卸ち疫鬼を追ひ拂ふ。
○次の年　養和二年五月壽永と改元。
○霰走　蹈歌の節會正月十六日男女舞人をして蹈歌を奏させられる朝廷の儀式。
○院の御はて　高倉院の御一周年。
○今日も御祓　源氏物語「藤衣きしは昨日と思ふ間に今日は御祓の瀬にかはる世を。」
○とくさ刈る　新敕撰「とくさ刈るきそのの麻衣袖ぬれて磨かぬゆめも玉とおきけり。」

やう東の討手使なりし知盛も、歸りのほり給ひしかば、又陸奥守などに宣旨下りて、東路越路の亂れしづむべうおもむけさせ給ひしに、越後守はかしこまりて從ひ奉れど、陸奥はいかゞありけむ、覺えなきやうなり。さらぬ處々、西の國南の海も亂りがはしうなりぬれば、平家には人々こゝかしこの討手使に出で立ち給ひ、むくつけき姿どもして、弓箭の道にのみたづさひつゝ、心のいとまなげなり。いつしか年も暮れなむとす。追儺の夜は、上のをさなう坐せば、殿上人振鼓などして參らするを、珍らしき事に興ぜさせ給ふ。「畫袴朱衣四隊行。」と唐の歌にもいひ置きし夜とて、雲居の庭の御有樣は、日の光ばかりの火影明らかに、なやらふ聲々も、一年の餘波を告げわたれるにこそと聞くは、さすがに哀れなりかし。次の年は、故院の御思ひの程にて、節會も行はれず、霰走もとゞめられて、睦月とて、何のはえ〴〵しさもなく、院の御はてにてさへあれば、いとゞ物悲しう、宮の中かいしめりたるに、十七日大祓ありて、人々御服ぬぎたりし。二月は六波羅の入道の一めぐりなり。女院はさま〴〵に御歎きの立歸りぬる心地せられ給ひ、今日も御祓のと思召さるゝにも、御袖のみしをれさせ給ふ。大宮人の花の衣にたちかへたるは、はな〴〵しき春の色にて、さはいへど、都の中は長閑なるに、遠つ國には猶戰ひの聲絶えずなどきこえ侍る。義仲とて賴朝の同じ筋なりける、これも去年より北の國に起りて、いつしか勢ひ猛になれり。木曾路の方に忍びて、年頃ありしかば、とくさ刈る麻衣の賤しきさまなりしも、

○さのみはにて　さほど嚴重に警衛するも如何かといふので
○あつかはし　煩はし。なやまし。
○家の風云々　代々家の道、家の名譽として傳へ來た武道。
○中々はるか　武道を遠ざけて殿上人の交際をし。
○絲竹の音　管絃。
○池の大納言　頼盛
○門脇の中納言　敦盛。
○一ぞう　一族。
○當代はうち〴〵の云々　當代安德天皇の御外戚で特別に上下の信賴を負ふのだけれど。

日にそへて劒の光耀きしより、後には大將軍など申し侍る。京には國々の亂れぬる由も、しば〴〵聞えきにければ、御祈り何くれと、公にもしづ心なう思さるゝ樣なれど、風の音にのみ聞き渡り天飛ぶ鴈の遙かに思ひやる程は、殿も大臣達も、さすがに世の大事ともおほいたらず、おだしうて、近衞外重のまもりも、さのみはにて、師走のころ陣解きつゝ、春のけはひは、例にかはらぬうらゝかさに、少しは心ゆるびもせられたり。唯平家の殿原ぞ、たゆみなう、あつかはしげにて、ついでよき國々の受領どもに、ほろぼすべういひやりなどし給ふ。此の人々も年頃をさまりたる世にならひて、家の風吹き傳へたる弓箭の道をば、中々はるかにのみ思ひつゝ、心にもいれず、たかき雲ゐのまじはりに、歌をも口とくいひなれ、絲竹の音をも身に入れて翫び、いうなる方にすゝみて、武士めきをゝしきわざはありつかず、すべてらう〴〵しうのみもてなして、司位などのまさらむ事をねがはしうし給ふればなむ、とり〴〵にやんごとなくなりのぼりて、上達部殿上人いと多く、池の大納言門脇の中納言、知盛も新中納言と聞えさせ、參議にては經盛居給ふ。重衡も惟盛も三位中將になり給ひ、資盛清經も左の中將なり、宗盛の大納言の御子なる清宗の侍從と、通盛とは三位にや。又國々の守なるも、あまたあり。此の一ぞうの榮え給ふる事は、初めにも申しつれど、當代はうち〴〵のよせことなるものから、いとゞ時めかしう、目驚かるるまでに侍り。此の程猶よろこび加へて、攝政殿内大臣のかせ給ひし御かはりに、宗盛の

○還らせ給ひにしこなた　還幸以來。
○功德の方　佛法の勤行して功德をつむ方に。
○鶴の林の昔　釋迦涅槃の當時。涅槃經序品によると二月十五日釋迦入滅の時拘尸那城の娑羅樹の林が白く變じて白鶴の如くなつたといふ。
○法の筵　法會。
○山　延曆寺。
○世に誠ならじ　全く眞實であるまい。
○御禊　大嘗會の前に天子が身を淨められる儀式。
○悠紀主基　大嘗祭の兩齋國と云ひ、神饌の霰を奉る國郡。國郡は豫め卜定する中世以後悠紀は近江主基は丹波備中交番と定まり郡を卜定する。

大納言宣旨かうぶり給ひ、内大臣になりたまへり。一院は法住寺殿に還らせ給ひにしこなた、さきぐ〳〵にかはらず、御幸も御心にまかせてあらまほしき御有樣を、世の人めやすく見奉る。故院の御事につけても、いよ〳〵功德の方にすゝませ給ひ、御經供養など、絶えず思しいとなませ給ふ。今年は釋迦如來の光隱れ給ひてより二千百三十五年にあたれりとて、鶴の林の昔を遙かに仰ぎて、法の會行ふ寺々もありきとぞ。卯月の事にや侍りけむ、日吉の社にいみじき法の筵をのべけりと聞召して、院の上御幸坐す。舞をもめでたう調へて、いと高き樣なれば、院も御涙とゞめがたうせさせ給ひける。此の折やがて山にものぼらせ給ひ、處々拜ませ給へる程、京にはいかなるにか、けしからぬ事を聞え出でて、山の大衆平家に叛きて、院の上を迎へ奉り、軍をおこし、今たゞいま攻め來るなりとて、人人俄にあわて惑ひたり。内には世に誠ならじと、殿ものたまひ、平家の君達も、信じがたくはし給へど、さすがにうしろめたき方もありて、重衡の中將、兵どもを從へ、御迎へに參り給ひ、事の由啓すれば、院驚かせ給ひ、いそぎ還らせ給ふ。かくて後は、人の物いひの怪しきに、御幸も處せう思召されにき。五月より年の號も又改まりて、壽永にぞ成りはべる。十月御禊ありて、十一月大嘗會行はせ給ふ。去年一昨年さはりありて、御位の後かく年を隔てたるも多からず。昔は水無月頃までに御即位あれば、其の同じ年に行はるゝとか聞え侍りき。悠紀は近江國野洲郡なり。主基は丹波國氷上郡とかや。御屏風は朝方の中納言、伊經と二人してかき給へり。主基の神樂歌は、兼光の中納言つかうまつり給ふ。神南備山、

みしまゆふかたにとりわけ神南備の山のさか木をかざしにぞする

同じ稻舂歌、長田の村、同じ中納言、

神代より今日の爲とや八束穗に長田の稻のしなひそむらむ

此の歌は元曆の折のよし、增鏡に見え侍るを、いぶかしけに聞ゆる人侍れば、またこゝにも申すなり。撰集には壽永とてなむ入り侍るとぞ。次の春は、二月、法住寺殿に朝覲の行幸せさせ給ふ。院も久しう御覽ぜざりし程に、上のこよなうおよすけさせ給ひ、拜し奉り給へる御容の、めでたうゆゝしきまでにおはしますを、うつくしう見奉らせ給ひ、故院の御事をさへ思召し出され給へば、事忌もしあへさせ給はぬ御けしきを、おとなしき上達部などは、いと哀れに見奉り給へり。御贈物心ことにてあり。院司どもの加階など、故院の折のまゝなり、まこと妙音院と聞えしおほき大臣は、物うかりし事の折、御ぐしおろして、其の後ゆるされて京に歸り給ひしかど、後世の事はひたぶるに思ひはなれて、佛の道をのみ行ひ給ひける。此の頃東山に妙音堂作りて供養し給ひける。院もいとめでたき事にさせ給ひ、忍びて御幸坐し、さりぬべき莊をもよせさせ給へり。今年又内の大臣は、從一位にあがり給ひ、内大臣をば返し奉り給ふ。御かはりの大臣には、實定の大將なり給ひ

○稻舂歌　大嘗祭の時神饌の稻を舂く時歌ふ歌悠紀又は主基の地名をよみこむ。
○元曆の折云々　壽永二年安德天皇西海におはして京都で後鳥羽天皇卽位あり、翌三年京都では元曆と改元になり後鳥羽天皇大嘗祭あり。增鏡にこの稻舂歌は其の折のだと云つてあるとの意。
○およすけ　成長して。
○事忌もしあへず　御めでたい折落淚といふ不祥を避けられず。
○おとなしき　大人しき。
○妙音院と聞えしおほき大臣　師長。
○さりぬべき　然るべき莊園を寄進された。
○内の大臣　宗盛。

○幣使　平定祈願の奉幣使。
○越路よりは使　義仲征討軍の北陸からの戰況報告。
○心ゆるび　安心。
○しづ心　靜かに落著いた心。
○中將　維盛。
○はつか　僅少。
○大殿　基通。
○新中納言　知盛。
○三位中將　重衡。
○左の中將　資盛。
○筑後の前司　貞能
○山階寺　興福寺。
○前の内大臣　宗盛
○むねとある人　重だつた人。
○いなみ難く云々　拒絶しかねて平家の身方しようか如何かなど云つたが。

ぬ。此の頃都の外は、いよ〳〵亂れまされりと聞ゆれば、卯月には惟盛の中將を始め、平家の殿原、十萬の軍を帥ゐて、義仲を討たむとて、越路に向ひ給へり。去年も通盛の中將下り給ひしかど、はか〴〵しからで歸り給ひにし。五月そなたざまに戰ひ始まれりとて、大方都の中も靜かならず。處々に幣使も立つるめり。山々寺々には、御祈りかず〳〵につかうまつらせ給へり。越路よりは使ひまなう通ひ參るに、心ゆるびせらるゝ折もあり。又胸つぶるゝ事もありて、京に居給ふ平家の殿原も、北の空を望みて、しづ心もなうおぼいたり。初めは官軍まさりぬるよし聞えしが、終にうちまけつとて、中將其の外の人々、からうじて歸りのぼり給ふ。京出で給ひし程は、雲霞と野山にたな引きつる兵も、處々にて亡びつゝ、殘りぬるはいとはつかなり。内にも聞召し驚く。大殿もいかにせましとさわがせ給ふ。宗盛などの平家の人々も、暫しはあきれ給ひけるが、さてうち捨てむやはとて、こたびは知盛の中納言、重衡の中將、資盛の中將、貞能などを遣はし給はむとす。新中納言と三位中將は勢多より、左の中將と筑後の前司は、宇治路よりと定めて、文月二十一日都を出で給ふとぞ聞ゆ。又山に使をやりて、衆徒ども公の御方に參るべく、さらば今より日吉の社を、藤氏の春日の社になぞらへ、延暦寺を山階寺のためしに、平家の氏の社氏寺になし聞えて、ながく尊び奉るべき由、前の内大臣を始め、平氏のむねとある人々、ひとつ心に名をつらねて、文こまやかに書い給へり。大衆もいなみ難く、いかになどいひかはせど、義仲もねんごろに聞ゆる事あればなむ、軈てそなたになびきて、京には返り事も奉らず。義仲はそこばくの軍を從へ、いかめしきいきほひにて、近江路より坂本に到り、大衆のしるべするまゝに、山にのぼりぬと聞えしかば、都の中いみじう騷がしうなりて、人人は唯物にあたりつゝ、あわて惑ひたり。五條わたりに住むばかりの下が下なる者どもさへ、恐ろしき事に思ひて、野山の末にも身を隱してむとて、かなしと思へる妻子などを引きつれ、あるは老いたる親をたすけて、あくがれさまよふ程、大路の樣もいとらうがはしく、俄に淺ましき世となりぬるぞせむ方なき。一院さへ忍びて、山に御幸あり。攝政殿又慕ひて參らせ給ふ。平家にはさりともと思ひし山の大衆も、源氏に語らひとられぬるが心やましう、今は都に堪へ難く見えければ、内をも院をも具し奉り、暫し福原に移ろひなむと思ひ立ちけるに、院はいつしか忍びて出でさせ給ひしと聞ゆれば、いとほいなくて、行幸ばかりを催し奉り、三種の御寶（おほんたから）をもゐて奉り、女上鈴鹿などの代々の御物、殿上の御倚子、時の簡（ふだ）、さらぬもかず〳〵にとり具して、上も御車に奉り、何の御儀式もなくて出でさせ給ふ。女院二位殿親族の殿原、みな行幸におくれじと、急ぎ給ふ程、いひしらずうがはしく、唯今仇のよせ來らむ樣（やう）に、女房をさなき人々の泣きまどひたるも、あわたゞしげなり。大臣中納言達などは、うへをも御子達をもいざなひ奉り給へど、さならぬはとどめ置き給へるもあれば、見捨てがたく出でがてなる程、いはむ方なう哀れなる事のみに

○しるべ　案内。
○物にあたり　周章狼狽のさま。
○かなしと思へる妻子　慈愛してゐる妻子。
○あくがれ　心も落ちつかず。
○らうがはし　亂れがはし。
○一院　後白河。
○攝政殿　基通。
○ほいなく　本意なく。
○女上鈴鹿　女上は禁中に傳はつてゐる琵琶の名器。鈴鹿は同じく和琴。
○殿上の御倚子　清涼殿の殿上にある御倚子。
○時の簡　侍臣で殿上に出仕する者の姓名を記したふだ、日給簡。
○女院　建禮門院德子。
○二位殿　時子。
○うへ　妻。

○淺ましうて失せ　成親が鹿谷の謀露はれ備前に流されて殺されたのをいふ。
○男君　維盛。
○らうたければ　可憐であるから。
○あたらし　惜し。
○びんなく　不便。
○さらぬ鏡　源氏物語「身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影ははなれじ。」
○こしらへ　すかしなだめる。
○そゝのかし　急がせる。
○經正　經盛の子。
○いとゞ深草　古今集「年をへて住みこし里をいでていなばいとゞ深草野とやなりなむ。」

て、一人心強きもおはさず、唯夢路にまどふ思ひにて、あるにもあらぬ御さまどもなり。惟盛の中將は、とりわけて心苦しうおぼいたり。此の北の方は、昔の成親の大納言の御女にて、をさなき程より見そめ給ひ、年頃わく方なう、かたみに淺からず思ひかはして、君達もうつくしげなるもち奉り給へば、いよ／＼哀れなる契りおろかならず、女君は、父の大納言淺ましうて失せ給ひしこなたは、心細きやうなれど、男君のかひ〴〵しう物し給ふる、うしろやすくて、ひたすらにうち頼み給へる心ばへもらうたければ、男君、我が身こそあれ、此の人々をさへ、ゆくへなき波路の末に、たゞよはしなむことの、いとあたらしう、びんなくて、とゞめ奉りつゝ、心にもあらでふり捨て給へるを、女君はうらめしう、いかならむ巖の中にもと、したひ聞え給へり。中將ことわりに見聞え給ひ、「さらぬ鏡の。」と、こしらへ給へど、我も心のみかきくらされて、出でもやり給はず。兄弟の殿原、馬引き立ててそゝのかし奉り給へば、なく／＼かへり見がちにて出で給ふ。經正の君は、年頃なれつかうまつりし名殘も忘れ難くて、仁和寺の宮に、御いとま聞えむとて詣で給へり。人々都を出で給へば、やがて家々に火をさして、燒きあげたり。保元よりこなた、二十年に餘りて住みなれし故郷も、今日を限りと覺ゆる心地どもには、「いとゞ深草。」とのみ思ひて、行きもやられ給はず。忠度、

ふるさとを燒野の原にかへり見て末もけぶりの波路をぞゆく

○後の代の撰集　流れての歌は新敕撰集雜歌二にある。
○なきかけも　死んだ人。行盛の霊も。
○大后の宮の大夫藤原俊成。
○さりぬべき云々　敕撰集に入る位な相當な歌があつたら。
○公のかしこまり　敕勘。
○文治のころ　千載集の出來たのは文治三年九月。
○奏覽　敕命による撰集が出來上つて叡覽に入れること。
○池の大納言　頼盛
○聞えおこせ　申してよこす。

とのたまふを聞きて、經盛、

はかなしやぬしは雲ゐに別るれど宿はけぶりと立ちのぼるかな

行盛の左馬頭は、都出づるほどあわたゞしけれど、日頃よみおき給へる歌どもを、定家の君の許につかはすとて、つゝみ紙に、

流れての名だにもとまれゆく水のあはれはかなく身は消えぬとも

後の代の撰集に入りてはべるをば、いかになきかけも、本意ありてうれしうこそ見給はめと、いとあはれになむ。又忠度は、歌の道に志深くて、常に大后の宮の大夫の御許に、參り給ひけるが、今年二月、此の大夫の君に、院の仰事ありて、撰集の事侍りしかば、かかる折もまづまうでて、「さりぬべきもさふらはば、撰びあつめさせたまふ中にも加へ給ひてよ。」とて、讀み置き給へる歌を一卷さし置きつゝ、いとま聞えて出で給へる、いというにも侍るかし。さてなむ集には入れられ侍りしかど、此の人々は公の御かしこまりなればとて、名をあらはにはいはで、讀人しらずとぞ侍る。故郷の花といふことを、

さゞなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

集は千載集とて、文治のころ奏覽ははべりしぞかし。かうとり〴〵にいそぎ出で給ひけるに、池の大納言ばかりは、京に殘り給ひき。東よりかねて頼朝の聞えおこせつる事ありてとぞ。又平氏ならぬは、上達部殿上人大臣達まで、行幸にも仕うまつり給はず、皆とゞま

○夷の衣　甲冑。
○御前　前驅。
○世の常云々　太平の時平生の御幸では武裝いかめしい警衛は忌むべきであるが
○かうやうの折　今のやう亂世。
○かしこき帝　桓武天皇の遷都をいふ。
○内　安德天皇。
○女院　建禮門院。
○一院　後白河院。
○殿上の御簡　日給簡。侍臣殿上に出仕する者の名を記した札。
○しるよししける處　領地。
○除目　京官地方官の任免更迭。
○妙音院の大臣　師長。

り給へば、院の上、山に坐すと聞きて、引きつれ參りたまへり。かくあわたゞしかりしは、文月二十五日なりける。二十八日には、院の上都に還らせ給ふ。今日は上達部殿上人よそほしう引きつくろひて仕うまつりたまふ。義仲行家などの源氏の武士も、夷の衣なれど、いとうるはしう花やかにて、六萬騎の兵を從へ、御前つかうまつれるもめづらかに、世の常にては、うたてもありぬべきを、かうやうの折は、中々賴もしう、つき〳〵しかりし。一とせ都遷など、ことやうなる入道の心より、あいなき世のさわがれにて、行幸御幸と急ぎ立ちつゝ、かしこき帝の、萬代をかねてトおかせ給ひし都をしも、あらしはてむとし給ひしこそ、いく程なくて、かく思ひかけぬ事の出でまうで來べきしるしにはありけれと、内、女院などの、淺ましうはる〴〵とおはしましける事を、かたじけなく、世の人思ひ奉れり。平家は福原にもあり經がたくて、遙かなる筑紫路に行幸なし奉れたり。京には一院、政をしたゝめさせ給ふとて、平家の人々の、司位をとらせ給ひ、上人は殿上の御簡けづらる。時忠の大納言ばかりは、元の儘なり。又その人々のしるよししける處々をば、源氏の武士どもに賜はらむと思召されき。八月院の殿上にて、除目の事ありて、賞行はせ給ふ。義仲を左馬頭にて、伊豫國を賜はり、行家備前守とぞ。此の程前の中納言師家の君、大納言になり給ふ。これは基房の大臣の御子にて、父大殿、一年淸盛入道のはからふむねにて、妙音院の大臣同じこと流され給ひける。又の年はゆるされて歸り給ひ、此の

○おはしまいし　おはしましし。
○きびは　幼稚。
○おぼろけならず　一通りの事でない。
○入道殿　師家の父基房。
○おもだゝしう　面目ある。榮えある。
○よしなきゆかり　つまらぬ關係で、御母后が平氏であるので。
○攝政殿　基通。
○おりゐの帝　御讓位になった上皇。
○高倉の宮　以仁王

殿は暫し嵯峨におはしまいし。今は五條の殿に住み給ふ。院には罪なくてしづみ給ひし事を、よとともに御心苦しう思し渡らせ給へば、立歸り公の御後見にもと思召さるれど、うかりし折、樣をも替へ給ひてしかば、口をしう本意なく思されけるにぞ、御子のきびはなるにつけさせ給ひ、睦まじき御心見ぇさせ給へるなるべし。此の大納言、治承三年十月、年八つにて正三位中納言に成り給へる、世にためしもあり難う、人も淺ましきまでに見聞え侍りしに、いく日もあらで、父の殿同じ日官とられ給ひ、其の後ゆるされ給へど、またつかさなどもなかりしに、今年十二にて、大納言と聞ゆ。これはたおぼろけならず、目もあやにて、入道殿もおもだゝしう、よろこびかしこまり給へり。唯今大將とていましける は、實定の内の大臣、右の大殿の御子なる良通の中納言ぞかし。院の上、帝の由なきゆかりにひかれさせ給ひ、思ひかけず都を出でさせ坐して、鄙の長路にさすらへさせたまへるを、御心苦しう思召されつゝ、時忠の大納言の許に仰事ありて、還御の儀を催させたまへど、平家したがひ奉らざりければ、口をしう思召されて、皇子の中、いづれにまれ、殊更にする奉りなむと、思召しよらせ給ひ、攝政殿其の外の殿原、みな御前に召されて、御定め侍り。古よりおりゐの帝、ことに御ぐしなどおろさせ給ひて後、御卜何くれの公事、伊勢の幣使の御定めなどは、例なき事とて、此の度やはじめならむと、世には申しあひ侍り。人々御位は何方にかはと、とり〴〵に啓して定めかね給ふ。昔の高倉の宮の御子も、

○故院　高倉院。
○すぎ〳〵　引きつづき。
○うけめきて　釣絲の浮標のやうでいづれと定めかねて。
○先帝　安德天皇。
○日嗣の君　天皇。
○かたじけなく　畏れ多く。
○高倉の院の四の宮　尊成親王。
○さりぬべき御宿世　位にお卽きになるべき前世からの因緣
○三の宮　惟明親王
○院の上　後白河。
○まめやか　忠實。
○夷心　荒々しい野蠻な心。
○かたくなし　へんくつで片意地な。
○上人　殿上人。
○北面　院の御所警衞の武士。
○御殿　院の御所となつてゐた法住寺殿
○入道殿　基房。
○御母君　七條院藤原殖子。

おとなしうならせ給ひておはします。又故院の宮達も、いとけなき御程なれど、すぎ〳〵うつくしうて坐せば、人々思ひなやみ給ひ、院も釣する蜑のうけめきて思したる、ことわりの御事になむ。さるは先帝、西の國に行幸ありて後、二十日に餘りて、都に日嗣の君おはしまさず。寶の位むなしき事のかたじけなく、天照神の御覽ぜむ處もおそれあり、まいて劍璽などもおはしまさねば、院もいとゞ御心細う、かた〳〵に思し侘びさせ給ふ。さてやませ給ふべきならねば、終に高倉の院の四の宮、四つにならせ給へる、御位に卽かせ給ふべく、おもむけさせ給ふ。さりぬべき御宿世やおはしましけむ、三の宮をもさし越えさせ給ひ、かく定まらせ給へる御事の、いみじさぞたぐひなう侍り。攝政もかはりたまはず、天が下は院の上御心にまかせ坐す。都の御まもりは、義仲仕うまつりけり。はじめはうしろやすく、まめやかなる樣なりければ、院も御心落ち居て思召され、都の中も靜かにて、上下の人々よろこびけるが、もとよりさる片田舍に生ひ立ちし者なりければ、ひたぶるに夷心にて、かたくなしき事のみなりしが、はては院のおはします法住寺殿に參り、いといたくみだりがはしきふるまひどもをしつゝ、やんごとなき御方々の、そこなはれさせ給へるもかたじけなく、上人北面の侍どもなどは、數もなう失はれけり。御殿に火をさへさして、むくつけき事いふ限りなし。院もからうじて忍びて出でさせ給ひ、入道殿の妙音堂に渡らせ給ふ。上は御母君の七條に行幸せさせ給へり。攝政殿は宇治より奈良の方に

○たいゞ〳〵し　輕々しい。
○なめき怠り　無禮な事の罪惡。
○かたは　物の疵はず見苦しいこと。
○けちもなければ　闕官もないから。
○内の大臣　實定。
○睦月　壽永三年正月。
○粟津野　近江國。
○宮作り　宮殿を造營すること。
○津國　攝津國。
○處せう云々　狹苦しいまで多くの軍勢を籠城させて。

行かせ給ふ。平家の人々のあくがれ出でにしをりにも、やゝたちまさりたるらうがはしさの、めづらかなるまでに侍り。賴朝は傳へ聞きて、いとたい〳〵しき事なりと、めざましう思ひけり。此の人は前の兵衞佐なりし。十月よりつかさ位、もとのまゝなりき。はやう鎌倉の里といふ處に、家居して住みけり。やがて弟なる範賴義經などを、都に上らせて、義仲がなめき怠りを咎めてむとすめり。京には、政も義仲心に任せぬるやうにて、見苦しうかたはなる事多かりし。殿をも攝政とゞめ奉り、かはりには、師家の大納言の、無下に若うおはするをなし奉り、大臣になしあげ參らせむとすれど、唯今けちもなければ、内の大臣の服にて、しばしとけ給へる程、攝政殿に内大臣の宣旨下れり。節會も行はれず、更に例もなくかたはらいたき事は、義仲申し行ひ侍りとぞ。明くる春は、義仲征夷大將軍にさへなれり。攝政殿の御父入道殿は、義仲に睦ましう坐して、政をもうち〳〵口入れ給ふればなむ、世の人の參り仕うまつる樣、いにしへにかはらず、勢ひありて物し給へり。内には御卽位も、去年は音なくて、今年行はるゝなりと聞え侍る。睦月の二十日ばかり、東より範賴義經、そこばくの軍を從へて、都に入りしかば、義仲堪へずなりて、兵どもことごとく討たれ、その身も粟津野のわたりにて、滅びにけり。まこと、平家は筑紫にもありわびて讃岐國に遷ろひ、八島に宮作りしてありけるが、今年春のはじめ、又福原までのぼりて、津國一の谷に城をかまへ、處せう兵をこめおきつゝ、須磨浦より生田森かけて、夜

○掟てたり　警備を殿重に命令した。
○おぼいたり　おぼしたり。
○そこ　一の谷。
○先帝　安徳天皇。
○女院　建禮門院。
○草のゆかり　云々　玉葉集に「前右近中將資盛に物申しける頃左近中將重衡草のゆかりを何か思ひはなつ同じ事と思へと申し侍りけれは。」と詞書してぬれそめしの歌が載せてある。
○東にゐて行く　重衡を捕虜として鎌倉につれて行つた。
○そなた　奈良。
○生田の川も　生くの意を言ひ懸けた。

晝まもり忘らず、きびしう掟てたり。去年より處々にて、折々戰ひありしかど、源氏いとかひなくうちまけぬるやうなりしかば、平家の人々、いみじうよろこびて、すこしは心安く、つよ〳〵しうおぼいたりしに、今年も院の仰事にて、都より範頼義經、討手使にて向ひにければ、つひにそこをも落されて、先帝女院御船に奉り、大臣中納言達、船にて海つらにたゞよひたまふ。殿原多く討たれ給ひ、そこばくの軍失はれて、數すくなうなりぬ。忠度も討たれ給ひ、重衡はからめられて、京にゐて來れと聞えしかば、いにしへ女院に宮仕へしてありける、右京大夫の君、

まだしなぬ此の世の中に身をかへて何心地して明け暮すらむ

この人は年頃資盛の中將淺からずかたらひたまへりとて、平家の人々わきてむつまじう思ひ置きつゝ、そのよは重衡后の宮の亮にて、居給ひて、草のゆかりをば、何かは同じ事とやは見ぬ、などたはぶれごち給ひし折、女、

ぬれそめし袖だにあるを同じ野の露をばさのみいかゞわくべき

ありしにかはる有樣を、いとあはれに思ひやりきこえしとぞ。重衡をば東にゐて行きしかど、東大寺燒きける人とて、奈良の大衆申し賜はり、そなたにてうしなはれ給へり。惟盛の中將は、忍びて高野熊野などに詣で給ひ、那智の海に身を投げ給ふるは、げに生田の川もかひなく、其のわたりの軍の破れぬる折、こゝらの人々なくなりて、世の中たのみすくなきまゝに、今はと思ひ果て給へるこそ哀れなれ。京にも物の聞えありて、右京の大夫、

悲しくもかかるうき目を三熊野のうらわの波に身を沉めける

清經の中將も、同じはらからなりける、それも去年西の海にて、柳が浦とかやいふわたりに沉み入り給へりとよ。落ちとまる平家の人々は、須磨の波風のあらましかりしのち、又八島に御船こぎよせて、上をもしばし坐させたり。京の事も折々ほのかに聞えて、文月御即位もありきといふをば、さすがに御心うごきて、女院などは哀れに思召さるべし。秋になり行く海つらは、朝霧さへたち隔てて、いとゞ故郷の方は、遙かに初鴈のこゑ待ち出でても、新玉章の言傳も覺束なく、まいて無きは數そふ世の、心ほそさもせむ方なく、人々同じ處にだにあらで、かたへは立別れつゝ、仇となりなど、たえず心遣ひせらるゝさへ、うれはしううち歎かれ給ふ。行盛の左馬頭、備前の道をかため給ふと聞えければ、過ぎにし年は經正忠度などもろともに居給ひしを、今年はいかに心ほそく哀れならむと思ひやりて、全性大德、消息聞ゆるとて、

ひとりのみ波間にやどる月を見てむかしの友やおもかげにたつ

とあるを見て、こなたも忘れがたうし給ふ事にて、返しに、

もろともに見し世の人は波の上に面影うかぶ月ぞかなしき

忠快といへる聖は、教盛の御子にいますかし。ありつる一の谷のみだれに、兄弟の君達

○京にも物の聞えありて　惟盛が那智の海で身を投げた事の風聞が都にもあつて
○落ちとまる　逃げ殘る。
○無きは數そふ　新古今集「あるは無くなきは數そふ世の中に哀れいづれの日まで歎かむ。」
○消息聞ゆる　音信申し上げる。

○左馬頭　左馬寮の長官。行盛。

○年の號も　京都では後鳥羽院御即位あつて四月元暦と改元になつたが、西海の平家方ではなほ壽永と云つてゐた。
○官の廳　太政官廳
○日嗣　帝位。
○またなき事　例のない事。
○とみに　急に。
○うしろやすく　安心して。
○使の宣旨　檢非違使の敕命。
○又の年　壽永四年即ち京都の文治元年

一時に失せ給ひしを、歎きわたり給ふ程、左馬頭おそくとぶらひ給へりければ、

うき身をば事とはずともかかる世のかなしき事は知るやしらずや

といひやり給へるに、行盛、

悲しさを餘所の歎きと思はねば人をとふべき心地だにせず

都には年の號も、壽永三年はとゞめて、元暦に改まり、上の御位は、文月官の廳にて即かせ給ふ。攝政も、義仲うたれし後、基通の大臣立ちかへり仕うまつり給ひ、師家は大臣も攝政も退き給ひ、もとの大納言にや、大嘗會も同じ年行はせ給ふ。三種の神寶おはしませで、日嗣に備はらせ給へる御事は、昔よりまたなき事にて、院も思しなやませ給ふやうなりしかど、御位の後、都の中ものどやかに、義仲が亂れも、とみに靜まり、雲の上も昔にかはらぬ御有樣にて、上達部上人うしろやすくつかうまつれるを、御覽ずるにも、御心おちゐさせ給ひ、天照神の御慮にもかなはせ給へる事にやと、うれしう思召されき。平家さへ次第に勢ひ衰へぬるやうにて、失はるゝ人おほし。須磨の浦波の立ちさわぎし折、討たれし人々の首ども、京に參らせつるをば、大路の樹にかけられ侍りしとよ、鎌倉の頼朝も、四位の加階賜はり、義經は五位にて、使の宣旨かうぶり、左衞門の尉と聞えし。範頼は三河守にや、又の年も平家討つべう仰事ありて、源氏の兵ども、京を出でつゝ南の海に到りしかば、平家は八島をも出でて、船の中に日數を送りにけるが、彌生の末、つひに

○水底のみるめ云々　みるめ（海松）に見る目をかけて、海底の海松のうるさい中とも云はず心を一にして皆海に入つた。
○右衞門督　清宗。
○水屑　水底の塵芥水屑とおほすは入水して崩御にならうと思召されの意。
○とかくして　いろいろとして。
○處もなう　場所もなきまで。
○又のぼり給へ　一度鎌倉に引きゆかれ再ひ上洛する。
○よそほしく　嚴めしく。おごそかに。
○源左衞門尉　義經
○御前　前驅。
○溫明殿　大内裏綾鑑殿の東。賢所は此の殿の中にある。
○上も大内に行幸　後鳥羽院は里内裏から内裏へ行幸になつた。

長門國文司の關のわたりにて戰ひのありけるに打負けて、先帝も大海の波に立ちまじらせ給ひ、二位殿知盛の中納言、資盛の中將、其の外の人々水底のみるめの物むつかしさもいはで、一つ心に深う思ひ沉み給へる程、いみじなど聞えむも中々にぞ侍る。宗盛の大臣、御子の右衞門督、時忠の大納言はいけどられ給ふ。神璽も海に入らせ給ひしかど、浮び出でさせ給ひしかば、源氏の兵とりあげ奉る。寶劍はあがらせ給はずとぞ聞え侍る。女院も同じ流れの水屑と思し入らせ給へるを、源氏の方に見付け奉り、とかくして船に移し參らせたり。平家ことゞく亡びにければ、源氏の大將達、急ぎ歸り登るとて、御鏡神璽二種の御寶、女院をも具し奉り、いけどりの人々ひきて、卯月都に參りたり。公には何事よりも、御寶のことなくて還らせ給へるを、いみじうよろこばせ給ふ。宗盛清宗などの京に入り給ふ日は、物見る人そこら處もなう集ひ侍り、やがて鎌倉にゐて行きしに、又のぼり給へる道の程にて、二人ながら失はれ給へり。御寶はまづ鳥羽殿に渡し奉り、内より上達部殿上人引きつらねて、御迎へに參り給ひ、いとよそほしく、源左衞門尉も御前仕うまつり、まづ官の廳に入らせ給ひ、そこより溫明殿に渡らせ給ふ。上も大内に行幸坐し、三日がほど御神樂侍りとぞ。公には又時忠の大納言、其の外にも平氏なる大德達など、國々に流しつかはさる。大納言能登國、御子の内藏頭信基は備後國、忠快法印は伊豆國とか、とり〴〵に別れて、遙々とおはすなりけり。忠快大德、都を出で給へる頃、おそくとぶら

○女院　建礼門院。
○故入道　清盛。
○御心にもあらで　御本意に反して。
○ありしに替る　昔にかはる。
○御ぐしおろして　御剃髪になつて。
○先帝　安徳天皇。
○後の世の云々　女院の供養廻向が先帝の冥途を照らす光となつて極樂往生なさる位に眞心から佛道を行はせられた。
○一院　後白河院。

ひたりし人の許に、

身のうさか人のつらさかさりともと思ふ日數をとはで過ぎぬる

全眞僧都は筑紫に遷され給ひける。程へて召し返されてのぼり給ひ、女院の大原におはしましけるとぶらひ奉りて、御物語聞えさせつゝ、昔の事さま〴〵に思ひ出でられて、涙もとゞめがたければ、

今もかくてめぐりあふにも悲しきは此の世へだてし別れなりけり

と啓し給へり。

僧都は故入道の弟に坐すれば、はなれ奉らぬ御事にて、まづと此の御前にも參り給ふなめり。女院は御心にもあらで、ながらへさせ給ひ、京に歸らせ給ひても、ありしに替る事のみにて、故郷とも思されず、中々うひ〳〵しう、世の中はしたなき御心地せられ給ひける。しばしは吉田といへる處に、忍びておはしましかど、後には大原の奥なる寂光院に入らせ給ひ、御ぐしおろして靜かに行はせ給ふ。先帝の淺ましかりし御宿世を、物うく悲しき事に思いて、後の世の闇路のひかりなるばかり、まめやかに佛の道をのみなむ、願はせ給ひ、まぎるゝ方なく、つとめさせ給へる、いと尊き御樣に侍り。さぶらふ人とても、大納言の局、阿波の内侍などばかりにて、松風の音物さびしく、樒の煙かすかなる御住居なれど、後には昔の心よせなる人も、とぶらひ參り、一院さへおとづれ聞えさせ給へり。

○事なくて　無事。
○院の上云々　後白河院の院宣をいふ。
○公の御さた　朝廷の御命令。
○淺ましき御事　崩御になつた事をいふ
○奉りしはや　はやは歎辭。
○おどろが下　増鏡「奥山の蔭の下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ。」
○此の御時　後鳥羽院の御時。
○六十帖の草子　源氏物語五十四帖を大まかに六十帖と云つたのである。
○葉月望　八月十五日。
○さりぬべき　さうあるべき因縁だと。

公には御寶の事なくて還らせ給へる所、其の賞とて、頼朝をば二位になさせ給ふ。義經は伊豫守にて都にさぶらひ、内の御守り仕うまつれり。又平家の領したりし國ども三十にあまりて侍りけるを、源氏の武士共にも賜はせ、さるべき處々は上達部などにも分ち給はせけり。院の上はさき〴〵にかはらず、世の政をしたゝめさせ給ふとて、先帝の口をしかりし御事を、かたじけなく思召されて、文治三年とか申し侍る頃、公の御さたにて、御諡奉らせ給ひ、安徳天皇となむ聞えさせ侍りし。天が下の君にて僅かに三年おはしまし、六つにならせ給ふ秋、都を出でさせ給ひ、八つにて淺ましき御事に侍りし。其の世に聞き傳ふる人々、唯はかなき夢のやうになむ思ひ奉りしはや。かくて都の中は、むかしにかはらず時めきて、二度加茂川の水澄める御代とぞなり侍る。さてなむ増鏡にも、おどろが下もふみわけてなど聞えけるも、此の御時に侍るかし。

さき〴〵も聞えし紫式部の六十帖の草子は、葉月望より書き始め給ふと聞きしに、今は其の夜しも筆をとゞめ侍る事も、やうかはりつれどさりぬべき事と思ふなむをこがましかりき。名をばいかゞいはむとおもひわづらうたるに、月を見る〴〵、人の「月のゆくへ。」などこそいはめと聞え給ふに、いと嬉しうまことにいみじき名なりとゆゑありて覺えぬ。さりし月も七夕祭る日より、手習はじめしを思ひて、この月も又七日に筆をとり侍る、三卷にて今日名におふ月の夜なむみちぬる事も、さすがにはなれぬゆゑもこそと思ふさへい

○おふけなし　力にあまる。不相應である。

とおふけなしや。
あくがるゝ心のはては千とせともかぎらぬ月のゆくへとぞ思ふ

月のゆくへ　終

池の藻屑

池藻屑序

文之體裁、雖有區別、記事之爲難焉。而事有虛實、記實最難焉。何謂實也。如歷代正史、是也。何謂虛也。如野史小說、是也。何以謂實難也。玄之謂玄、黃之謂黃。牝固不可稱牡、牡豈得呼牝乎。巨細多寡。長短遠近、生沒尊卑、榮辱忻戚、凡事之與物、定規在彼、不可變移。而我就其中損益焉、取捨焉。拘束牽攣、雖有奇才難於馳騁矣。野史小說、不然也。玄黃牝牡、已無根據。凡事之與物、任意結撰、唯務理義湊合、意境新巧也。於是乎辯博之徒、假之發其學殖、逞其辭才。以故正史、馬班之後、一解不及一解。而野史小說、輓近多稱精妙矣。由是思之、我邦著作、豈其不然乎。舍人親王、鑒裁史筆、自是一時之選。雖有續紀、不啻退舍也。文德三代之錄、正統一覽之記、所謂辭達而已、亡論其、

國字與不國字也。榮華成編、修辭相尙、可補史之闕文。空穗竹取、所謂齊諧志怪。枕艸紙、詹言不凡。大和叡志所載、雖蕞爾冊子、髣髴于臨川之筆。字治著聞、野史先鞭、玉石竝收。若論其詳、更僕奚罄、但紫氏六十帖、才識幻妙、體裁曲暢、可謂絕技矣。雖然要之、鏡花水月、如有如無、亦唯玄黃牝牡、任意結撰。若夫水鏡、大鏡、今鏡、增鏡、四部書、引據確實、垂徵後昆。惜乎作者或失、又無繼者。今而始得焉。豈可不奇歎激賞乎。繼者爲誰。荒木田氏是也。荒木田氏伊勢人、其族爲宗廟祠職。幼而穎悟、婉娩聽從、無俟姆訓、組紝裁縫、百爾女工、無不精妙。而暇則好讀書史、又學和歌聯歌。既笄爲慶德如松室。如松亦好學博古、夫妻相得。日夜展玩卷帙、咀嚼理義、以爲娛樂。人比諸趙明誠、李易安夫婦云。於是荒木田氏、中饋之閒、益從事于其所好。覽涉愈博、辭藻愈縟。乃有著撰。積以歲月、無慮數十種。今所刻池藻屑、亦其一耳。蓋增鏡紀載肇于元曆、訖于元弘。此書乃接其武、直至於慶長、初中閒二百七八十年、朝綱張弛、羣下利鈍、以迨于諸藩、逆順、南北紛爭、事跡無有遺脫。其文簡而明、其義典而實、得良史體。此文之所最難、與彼玄黃牝牡、任意結撰者、殊有逕庭。況優柔之辭、婉縟之語、成于閨閤中者乎。可謂四鏡之書、併此爲五、豈可不奇歎激賞乎。然而荒木田氏則反自卑謙、不敢比諸古人著作。其所以名池藻屑、取義堀川後百首中、伊勢卽可謂辭事之和歌云。嗚呼四鏡之書、雖曰妙撰、惜乎作者或失。今此池藻屑流傳之久、後或失作者姓氏、猶四鏡耳。荒木田氏筆硯、餘波及詞詩者、請正於余。以故池藻屑之序、余不得辭。乃錄此書、荒木田氏所著以贈之。庶幾後來不失作者云爾。

安永甲午秋九月

北海江邨綬撰

池の藻屑目次

卷第一　後醍醐天皇……一一三
卷第二　光嚴院……一一六
卷第三　光明院……一二七
卷第四　崇光院……一三〇
卷第五　後光嚴院……一四二
卷第六　後圓融院……一六〇
卷第七　後小松院……一八二
卷第八　稱光院……一九九
卷第九　後花園院……二一八
卷第十　後土御門院……二三四

目次終

巻第十一　後柏原院……二七一
巻第十二　後奈良院……二八五
巻第十三　正親町院……三〇二
巻第十四　後陽成院……三一八

○石山寺　近江國石山村。眞言宗。西國三十三札所の一。
○涙の花にも　新古今集「鳴の海や月の光のうつろへば涙のはなにも秋は見えけり。」
○さばかり云々　それほどの才學ある人
○ひとりごちつゝ　獨言しながら。
○陸奥の金もて　東大寺大佛鑄造の時、僧良辨敕命によつて黄金を得べき祈願をするにつき、靈夢に從ひ石山に廬を作つた。間もなく陸奥から黄金を獻じたので觀世音像を作つて石山寺の本尊としたといふ。

池の藻屑

巻第一

葉月の頃、都に上らむとて立出で侍るに、石山寺なむ久しう詣でざりつれば、此のついでにとて立ちより侍る。山のもみぢはまだしき程なれど、處がらなる秋の景色はいひしらず物哀れにて、岩のすがた水の流れなんど、うき世の塵を離れていみじう清げなり。遙々と見やらるゝ湖のおもては、うち出づる浪の花にも秋ありて、遠き望みも又たぐひなくなむ。いにしへ紫式部とかいへる宮仕人の、源氏物語つくらむとて、まづ此の寺に籠りて御佛に祈り申し給へりしに、八月なかばの月の、湖にうつれるを見つゝ、須磨明石の巻は書き給へりといひ傳へ侍るは、いみじきわざにこそ。昔はさばかりのざえある人もおはしけりと、ひとりごちつゝ、先づ御佛をこそは拜み奉らめとて、御前に參りたるに、いみじう心すみて、極樂の莊嚴おもひやらるゝ御堂の清らは、目もあやにて、いと有り難く、更に涙もとゞまらず。誠に此の御佛なむ、陸奥の金もて作り奉りしと聞くにぞ、殊に尊く覺えてとみにかへり出でむ心地もせず。とばかり見めぐらすに、此の御堂の傍に、老いぬる尼

○かう怪しけ云々　かう様に見すぼらしいやつれた旅姿を見馴れぬと思つたやうすで。
○常にもかくや　平生も此の通り御參詣になりますか。
○たづき　よるべ。
○うひ〳〵しう　物馴れず。初心らし。
○大悲　苦の衆生を遍く救ふ慈悲。また觀世音菩薩。觀音の衆生濟度の誓願。
○又なき家づと　此の上もないみやけ物
○うちつけ　率爾。
○よするなぎさ　古今集「白波の寄する渚に世をつくす蜃の子なれば宿もさだめず。」
○後夜　後夜の勤行
○はか〴〵しからず　確かでなく覺束ない。
○飛鳥井　玉葉集「假初と思ひしものを飛鳥井のみま草隱れ幾夜経ぬらむ。」

の、いとたふとげに念珠してあるが、かう怪しげなる旅衣の窶れを目馴れずと思へる樣にて、時々みおこせたるは、此のわたりの人なめりと思ふに、處の古き物語などをも、聞かまほしう思ひなりて、近くさしよりつゝ、「尼君はいづこよりか詣でさせたまへる、此の近き所に住み給ひて、常にもかくや坐す。遠き國より詣で侍る身は、更に見知れる人もなく、處の案内をも尋ね問ふべきたづきさへ侍らで、いとうひ〳〵しう侍れど、大悲のあまねき御誓ひばかりに賴みをかけ奉りてなむ、かくはさぶらふなり。あはれ處につきてゆゑある古事なども侍るべきを、知召されむには、少し聞えさせ給ひなむや。又なき家づとにてこそは侍らめ、いとうちつけなるやうには侍れど、これもさりぬべき御佛の導かせ給へるにやと、思ひてなむ。」といふに、尼君打笑みて、「よするなぎさに世を過す身ながら、年頃都の方にさぶらふが、早うより此の寺の御佛に賴みをかけ奉りそめて、とき〴〵なむ詣で侍る。今夜も御前に通夜して、後夜をも爰にてつとめ侍るべきなり。遠き國よりと承れば、椿市にやどりは坐すべけれど、今夜は爰におはしましねかし。處の古き事などは聞き知る事も侍らず。故郷人に語り給はむには、都の事こそよろしく侍らめ。はか〴〵しからずとも、夜もすがら聞えはべらむ。」と、むつましげにいふに、いとうれしくて、「さらば飛鳥井の影とこそたのみ侍らめ。」といへば、「御まぐさやいかゞ侍らむ。」といらへて、「いでや人の命程つれなきものはさぶらはず。古より命ながき、うき事になむいひ置き侍るは、

○思ひわび云々　思ひ煩つてたまらなくなつた時は、穴を掘つて話をして入れたいと思つた位だの意穴を掘る云々は大鏡に出てゐる。
○上りてのは　上代の事は。
○ゆかしう　聞きたく知りたく思ふ。
○かつ〴〵　片端からほつ〳〵と。
○けしきこる　機嫌を伺つて見る。
○玉垂のうち　玉を飾つた簾のうちで宮中のことをいふ。
○かけ奉らむ　口のはにかけて物語る。
○無下に　一向に。
○いぶせく　氣が晴れず。

ことわりに侍り。こゝら人集むる世に、眉をひらくばかりのうれしきをば、いとはつかにて、身を虎ふす野邊に捨つるばかりのからき世をのみ經侍れど、猶玉の緒の絶えやらず、かくてさふらふも、我ながら怪しきに、過ぎこし方の事なむ、問はず語りもせまほしけれど、おなじ程なる老人などは皆跡かたなくなりて、今は昔の事しれる人も侍らねば、思ひわびたるをり〳〵は、穴を掘りても、いひ入るばかりに思ひて侍るを、今夜なむいと嬉しき人に逢ひ奉りて、くつし出で侍らむは、さらに老いの後の思出にこそ侍れ。」と、いと心よげに打笑ふ。こなたもむべ心有ると見るに、いとなつかしう聞かまほしくて、「まことに昔より老人の言の葉は、かひある事にし侍れば、かつは此の身の學問にもし侍らむ。おなじうは皇のしろしめす御代の事、上りてのは、はかなき書などにてほの〴〵見し事も侍るを、後醍醐の帝の芳野に移らせおはしましし頃ほひより、末のことなむいとゆかしう侍るを、かつ〴〵ももらし給はむや。」とけしきとるに、「あなかたじけな、さばかりの玉垂のうちなる事しるべき身にもはべらず、又かるゞ〳〵しうかけ奉らむは、憚りありておぼえ侍れど、ほのかに聞きしる事などをも、かかるをり無下におしこめて侍らむも、いぶせく思ひ給ふれば、知れらむ限りは、事のこさず語り侍らむ、ひが〳〵しく、同じことのみやいはれ侍らむ。」と恥ぢらへる樣もさすがにゆゑありてなむ。

○談天門院　忠子。
○花山院内大臣　師繼。
○横さまなる　正道にはづれた變亂。
○しほたれ　歎きに沉み涙に濡れるを潮に濡れ水垂れに喩ふ
○立歸らせ　元弘三年六月の事である。
○蘆原の涙靜か　泰平な世。
○記錄所　禁中で訴訟を裁斷される所。
○本院　後伏見院。
○新院　花園院。
○先帝　光嚴天皇。
○重祚云々　後醍醐天皇は高時擁立の光嚴院が京都におはした故重祚の形であるが、神器も御一緒であつた故遠い行幸の還御といふ事にお定めになつた。
○いみじきもの　尊氏を優れた者と寵せられた。

後醍醐天皇

九十五代の帝は、御諱尊治と申し奉る。後宇多院の二の御子にぞおはします。御母は談天門院とて、花山院内大臣の御女とはいへど、誠には參議忠繼の女となむ聞え侍る。此の帝は御才も賢く渡らせ給へば、世をしらせ給ふ始めより、天が下擧りてなびき從ひ奉りしに、中頃横さまなる世のみだれ出で來て、思ひかけず蜑の苫屋にしほたれわびさせ給ひしかど、いく程なくて立歸らせ給へば、蘆原の浪靜かなる世となりて、よろづ御心の儘に世をまつりごたせ給ひ、記錄所を置かせ給ひて、民のうれへを聞かせ給へば、古にもはぢぬ御代とて、ありしに增りて仰ぎ奉るにぞ、都の内はいみじうときめきぬるに、本院、新院、先帝などは、いとかすかなる御住居に、參り通ふ人もなく、替りはてぬる世を御覽ずるも、夢の心地せさせ給ふ。殊に重祚などにもあらず、たゞ遠き行幸ばかりの御定めなれば、先の帝は、正しき御位にさへ用ゐられ給はぬぞいとほしき。なべての世は、はなやかなる事多くて、人々も樣々に、慶びしつゝ、武士どもさへ取り〳〵になりのぼるめり。尊氏は三位にて武藏守になさる。帝いみじきものに思召して、尊の字をさへ賜ひしかば、後は尊氏とぞ聞えさす。猶打續きて、弟の直義をも、四位になされて國をも賜はりしかば、何れも御惠みの露にせばき袂もうるほひわたりて、更に二心などあるべうもなきに、そこ

○征夷將軍の宮　護良親王。
○内侍の三位　藤原公藤の女藤子。
○准后　三后の位に准じて年官年爵を賜はること。
○おとずけ　成人する。
○こなたにのみ　藤子の方にばかり。
○顯家　北畠親房の子。
○たゞ〳〵し　確かならず覺束ない。
○下るべく　陸奥へ下る。
○力なく　辭退しきれず仕方なく。
○御子をも一所　義良親王。
○奥のかため　奥州鎮定。
○二つの國　陸奥出羽二國。

の心やいかゞ御覽じけむ、征夷將軍の宮は、いとうしろめたく御心おき給ひつゝ、ようせずば世をもみだりぬべきものなりとて、いかにもして、失はむことを思召しはかりつゝ、忍びて上にも奏せさせ給へど、「いかでかさるやうあらむ。」とて、ゆるさせ給はねば、かひなくて過ぎ行きぬ。まこと内侍の三位といひしも、此のころは准后とて、いと時めき給へり。此の御腹の御子達も、取り〳〵におよずけ給へるを、上はいとうつくしう御覽じて、こなたにのみ、しげう渡らせ給ひ、御遊びをも、好ましう御心をやりて、過し給へり。年の名も、正慶といひしは、止められて、もとの元弘になりぬ。同じ年の十月、顯家の中將を陸奥守になされて、東の奥しづめらるべしとて、遣はすべく定めさせ給ふに、「おほやけに仕ふる心づかひは、かず〳〵なむし侍れど、弓箭の道はいとたど〳〵しく、習はぬわざなり。」とて、たび〳〵いなび申し給へど、すべて何事もおほやけの御さたとなれる世なれば、今よりは、文武二つの道を兼ねて、御子達といへども、軍の大將にもたち給ふべきなりとて、強ひて下るべく宣はせて、族の銘をも、御みづから書かせ給へれば、力なくておもむき給ひなむとす。絶えて久しき例などを尋ねて罷申しつるにも、お前に召して仰事あり、御衣御馬など賜はりつゝ、御子をも一所、伴ひ奉る。動きなき奥のかためにと思ひ給へるなめり。かしこに到りつきぬれば、國民待ち迎へつゝ、いみじうもてあがめ聞ゆるにぞ、二つの國は事なくて治まりぬ。十二月には、直義の左馬頭なるを、相摸守をも兼ね

○上野の御子　成良親王。
○まだきに　花の時節にもならぬに早くから裝束に花の錦を重ねられた。
○のゝしる　聲高に騒ぐ。
○萬代もかくて　行末萬代まで今の御盛りの有様だらうと。
○兵部卿の御子　護良親王。
○さかしら　諫言を受けられたのをいふ
○心おきて　心底。
○ありし騒ぎ　元弘の亂。
○思ひの外なる事　護良親王都より追はれ給ひし事をいふ。
○相摸守　直義。
○かへさひ　返す。辭職する。
○右　右大臣。
○二條の左大臣　道平。

て下るべく宣はせて、こたびは上野の御子をなむ具し奉れり。かうやうの急ぎにて、あわたゞしく年も暮れぬ。立返る春をば建武元年とか云ふめり。騒がしかりし名殘もなく、いとぞうらゝかなる日影に、玉の砌は光をまし、磨きまし給へる御かたゞ〳〵の御よそひは、まだきに花の錦を立ちかさね給へり。袖をつらねて出で入り給ふ雲のうへ人も、ことさらに珍らしう見わたされたり。今年大内裏作らるべしとて、睦月より事始あり、今よりいと賑はしうのゝしるに、まして行末の春のけしき、いかばかりにと思ひやられ侍る。花の盛りなどは、いとゞ内わたりもはえ〳〵しくて、人の心も、のびらかなれば、萬代もかくてこそと思ふに、又何事にか、人々のさゝめき聞ゆるは、兵部卿の御子の御事なり。思ひかけぬさかしらによりて、都をさへ出で給ひ鎌倉に下らせ給へる御心の中おしはかられてなむ。此の御子は御心おきてのうるはしく、才もすぐれさせ給へれば、ありし騒ぎの折も、武士どものさばかりあさりもとめ奉りしだに、いとよく紛れさせ給ひて、遂に御本意のごと世の中も靜まりぬれば、世の人もこぞりて懷き聞えつゝ、又なきおほやけの固めなるべきに、思ひの外なる事と、うちかたぶく人多かりき。かかれば相摸守が預り奉りし御子ぞ征夷將軍になり給ひて、守は御うしろみつかうまつる。長月の頃、洞院の大臣内大臣をかへさひ申し給へば、定房の大納言を、内の大臣になさる。鷹司の大臣も、改めて右になり給へり。又の年二條の左大臣なやましうし給へりなどいひしも、二月ばかりに、かくれ給

○氏の長者　一族の長たる者。
○鞠小弓　蹴鞠と楊弓。
○いちもち　逸物。すぐれた物。駿馬。
○萬里小路の中納言　藤原藤房。
○心づきなし　不相應である。
○うしろめたし　氣遣はしい。
○あながち　具管。
○たどらせ給ふ　御迷ひになつた。
○唐の帝　玄宗。
○はか〳〵しう　容易く。
○浮世に何か　伊勢物語「歆れはこそ櫻はいとゞめでたけれ浮世に何か久しかるべき。」
○八幡　石清水。
○こちたき　事々しい。
○挑みかはし　互に競ひあつて。

ひぬ。氏の長者にて、もろ〳〵の事をつかさどり給ひしかば、又なき御さかえなりしに、あかず思へる人々おほし。御年四十九にぞなり給ふ。やがて鷹司の大臣左に轉じ給へば、洞院の大臣も、又右にかへりなり給ふ。定房のおとゞ内大臣を辭し申し給へば、一條の大納言ぞかはりになり給へり。上は治まれる世の御すさびなる鞠小弓などの御遊びの絶間には、馬場の御殿に渡らせ坐して、御馬さへ御覽じ入りけるに、出雲國より、龍の馬とて奉れりしは、尋常にはあらぬいちもちなりければ、いみじうめでさせ給ひて、またなきものに思召されけり。さぶらふ人々も、めでたき御代のしるしならむと、ことぶきあひぬるに、萬里小路の中納言ばかりは、心づきなくおぼえて、「かかる物のときめくこそ、世の中うしろめたけれ。」とて、見ぬもろこしの例をも引き出でつゝ、「をさまれる世には、ふよう物なり。」とのみあながちにいさめ奉りたまひて、あまねき政を施させ給はむこと奏し給へり。君もさかしうおはしませば、たどらせ給ふにはあらねど、唐の帝の楊貴妃に心を惑はし給ひしばかりの御思ひのありて、はか〳〵しう聞き入れさせ給ふ事もなきやうなれば、中納言は行末たのみがたき世を、いとすさまじううち歎きて、「浮世に何か。」と、ひとりごちつゝ、内に參り給ふこと物うげなり。彌生の頃、八幡に行幸あり。こちたき世のひゞきにて、上達部殿上人殘りなくつかうまつり給ふ。御よそほひ、珍らしき樣にて、とり〳〵に挑みかはして、清らを盡したり。藤房の中納言は、思ふ心ありて、殊更によそほしく、

○父君　宣房。從一位になつたので上なき位と云つた。
○そむきはてむ　遁世してしまはう。
○女車　園簿拜觀の女房の乘れる車。
○又いつかはと　再び何時見る事だらうか見られまいと。
○陣　陣の座。
○さま替へ　剃髪する。
○内　主上。
○せちに　切に。
○さまたげ聞え　出家しないやうに申し上げられた。

引きつくろはれたり。巻纓の老懸に、赤き裏のうへの袴きて、蒔繪の太刀はき給へり。附き隨ふ者も樣々に出でたたせたれば、人の目を驚かすばかりなり。此の人は君の御覺えもめでたくて、父君は上なき位をさへ極めつゝ、いと時の人なりしに、いつよりか世をうきものに思ひなりて、ひたすらにそむきはてむの志深く、これや限りのと思ひ給へば、かくはし給へるなり。おもしろかりぬべきたびの行幸なれば、いみじき見ものにて、女車などいと多くたてつゞけたり。若き人々は、こゝろづかひし給ふめり、中一日坐して、かへらせ給へり。其の後中納言は、内に參り給ひて、御前にさぶらひ給ひ、夜もすがら何となく昔今の御物語を聞え給ひて、あけがた近うまかで給ふに、大内山の月影も、又いつかはとかへりみのみせられて、涙にかき曇るばかりなり。車をば陣より家に歸して、我が身は侍一人具して、北山の岩倉と云ふ處にいたり、其處にてさま替へ給ひぬ。内にはかくと聞かせ給ふにぞ、いみじう驚かせ給ひて、「立ちかへり再び世につかへ給ふべくいさめられよ。」と父の宣房を召して、仰せ下されしかば、急ぎ使を遣はして、「いとあるまじき事なり。」とて、せちにさまたげ聞え給ひつゝ、立ちかへり給ふべくいひ遣はし給へる返事に、

何事のうらやましさに歸るべき世にありとてもそむきこそせめ

とのみ聞え給ひしかば、父君はなく〳〵彼處に尋ね行き給ひけるに、中納言はけさまで岩倉の坊におはしけるが、爰も猶都近くしてあしかりなむと思ひ給ひ、いづちともなく出で

○誰見よとてか　誰にこの歌を見よと云つて書いたのか。
○事のよし　藤房出家の事。
○あたらしう　惜しく。
○公宗　實衡の子。
○公重　公宗の弟。
○失はれ　殺され。
○いかなる事の云々　どうした事のくひちがひで誅罰されたかと思つたが。
○ことゆかで　事成就しないで。
○越路　北陸地方。
○東路　關東地方。

給ふれば、父君はいと本意なく悲しくて、涙もとゞめがたし。住み捨て給へる庵の内に、立ちいりて見給へば、誰見よとてか障子の上に、

住みすつる山をうき世の人とはばあらしや庭の松にこたへむ

と書きのこされしを見給ふにぞ、いとゞ胸ふさがりて、思ひまどひ給へど、かひなくて立ちかへり、事のよし遣ひし給へば、上もいとあたらしう思召されて、御涙をうかめさせ給へるぞかたじけなき。秋の頃は、公宗の大納言、北山のもみぢ御覽ずべく、行幸をもよほし聞え給へば、渡らせ給はむとて出でたたせ給ふるに、公重の中納言の奏し申さるゝことによりてなむ、道の程より俄に歸らせ給うける。やがて定平の中將に結城の親光、名和長年を添へられて、大納言其の外の人々をもからめ捕りて來るべく仰事あり。中將二千餘騎の兵を帥て彼處にゆき向ひ、速かにゐて參るを、中將に預けさせ給へば、一間なる所に押込め置きつるに、遠き國に流し遣はさるべきなりと聞えしかど、さはなくて失はれ給へり。いかなる事のたがひめにやと思ひしも、後に聞き侍れば、故相摸守高時が弟の時興といひしは、ありつる元弘のみだれに、鎌倉をのがれ出て、爰かしこに身を隱しつゝ、近き頃より此の大納言を頼みて、北山の家に忍びて居たるを、大將にて世をくつがへさむとはかりたるに、ことゆかでかくはなりたるなりけり。その儘に都は事靜まりつれど、越路、東路などは同じ筋なる平氏の末葉どもの、消え殘りたる露の身をもて、再び花咲く春に逢はむ

○かつ〳〵　片端からほつ〳〵。
○兵どもを催す　兵を誘ひ集める。
○勢ひも猛に　勢ひ盛んに。
○直義　相摸守足利直義。尊氏の弟。
○兵部卿の宮　護良親王。
○めざましき　あきれるほどの。
○なべてにはあらず　尊氏を一方ならず御寵愛になつたが。
○さのみは　それ程までは、征夷將軍總追捕使までは如何だらうと。
○いちじるければ　著しいから。護良親王を弑し奉つた事で尊氏兄弟の惡事も著しくなつて。
○御かうじ　敕勸。
○中務の親王　尊良親王。
○こちたき　甚しき

と企てて、かつ〳〵兵どもを催しなどするに、淺はかに語らひとられたるものも多く、勢ひも猛になりし程に、又鎌倉山のわたりは、物騷がしくなりて、敵攻め來れりとひしめくにぞ、直義は防ぎ難く思ひけるにや、御子を伴ひ來りて都にのぼらむと、鎌倉を出で侍りし。かかる騷ぎのまぎれに、兵部卿の宮をば失ひ奉りしこそ、いとめざましき事なめり。都には尊氏に東の方しづむべき詔あり。尊氏承りて出で立たむとする程に、この度征夷將軍をも、諸國總追捕使と云ふ事をも、望み申したるは、古の賴朝のたぐひならむ事を思ふなるべし。君もなべてにはあらず思召されしかど、さのみはいかゞとて、征夷將軍とぞ聞えさす。三河國に到りしかば、直義が上りぬるに行き逢ひたり。さらばとてそこよりうちつれて、鎌倉に入りぬれば、いく程なくて鎭まりぬ。越路も又たひらかになれりとぞ尊氏は猶鎌倉に在りつゝ、義貞を亡ぼさむ事を都に訴へ申したりしに、兵部卿の宮を失ひ奉りし事も、いちじるければ、おほやけも殊の外に惡ませ給ひて、かへりて尊氏を御かうじのよしにて、義貞に亡ぼすべき宣旨くだり、中務の親王を上將軍にて、多くの兵を添へられ、關の東に遣はされける。かうひしめくは、建武二年の冬の頃ほひになむ。猶都には御修法、祭祓などさま〴〵こちたき御祈りあり。東ざまに向ひし人々は、道すがらの戰ひに勝ち得しかば、いみじういさみて、箱根路まで進みいたれるも、其處にてとかくいどみつるに、かひなくうち負けて、又都に引きかへし、關の戸ざしを固くして、守り聞えたり。

○かうやうの騷ぎ　斯樣の騷ぎ。
○送り迎へむ　舊年を送り新年を迎へる用意。
○顯家　北畠顯家。
○親王　鎭守府將軍義良親王。
○奥のつはもの　陸奥出羽の軍勢。
○山法師　延曆寺の僧徒。
○かうぶりし給ひて　敍爵され。
○公の御方人　官軍の御味方する人。

かうやうの騷ぎに、送り迎へむいそぎをもうち忘れたるさまながら、年は歸りぬ。正月十日の程、又君の軍破れぬれば、敵近づきぬとて、上下騷ぎみちたり。おほやけも内裏を出でさせ坐して、東坂本、日吉に行幸なる。かかれば、尊氏は軍を帥て京に入りぬ。陸奥にありし顯家の中將は、此のみだれを傳へ聞きて、親王を具し奉り、奥のつはものを從へて、責め登りたるに、同じ睦月の十三日に、近江國に著きしかば、やがて事の由奏して、又の日ぞ坂本に參りたり。君も臣も歡びあひたるに、山法師ばらは、たゞ萬代とのみよばひき。さてなむ十六日より軍はじまりて、つひに晦日といふにぞ、敵は都を落ち去りしかば、其の夜京に歸らせ給ひぬ。猶尊氏は津の國にありと聞かせ給ひて、追つて武士共を遣はしたるに、二月十三日、其處にも堪へ難くて、船に乘りて、西の國へなむたゞよひ行きだり。難波にありし人々は、みな京に歸り參れば、東の事も心もとなしとて、親王も歸らせ給ひ、中將も下るべき由仰せられたり。みこはこたびかうぶりし給ひて三品と聞ゆ。陸奥の大守にさへなされしかば、御兄の親王をさへ越え給へるは、こたびの功によりてとぞ聞えし。顯家も中納言になり給へば、義貞をば左中將になされて、筑紫までも責め下り、悉く亡ぼすべく仰せられて、遣はされしに、まづ播磨國たひらげむとて、其處に滯る程に五月にもなりぬ。尊氏は筑紫にて、兵を集むるに、かしこにも菊池などいへる公の御方人ありて、戰ひもありつれど、叶ひ難くて、西の國の兵は皆尊氏に靡きたり。又尊氏は忍び

○内には　帝は。
○雲霞の兵云々　多數の軍勢を率ゐて來るのを喩へたのである。
○又いかさま　又如何なる戰亂になるかと思ひ惑ふ。
○東の軍　鎌倉の軍勢。
○司位　官位。
○まめやか　忠誠。
○かくあへなく　斯くはかなくも戰死した事を聞召して。
○本の根ざしも賤しからず　祖先の系統も賤しくはなく。
○村上の帝の御筋　村上天皇の血統。
○春宮　恆良親王。

て京に申して、院宣をなむ賜はりしかと聞え侍る。卯月には、本院隱れさせ給へり。後伏見院となむ申し奉る。四十九にぞ坐しき。内には、西の國平らかならむ事のみ思召しつるに、いつしか尊氏は雲霞の兵を棚引かしつゝ、都をさして上るなりと聞ゆれば、又いかさまにかと、人々思ひ惑ふに、五月には、義貞いくさを帥てしりぞきぬる由聞えしかば、正成にぞ義貞を援けむ事を仰せ下さる。さらばとて、義貞に力を合はせて、兵庫湊川などいへるわたりにて、いみじう挑み戰ひたるに、敵の勢ひ猛くして破り難ければ、つひに正成は亡び、義貞はからうじて京に歸りのぼりたり。此の正成は、はやうより公に賴まれ奉りて、元弘の始めは、東の軍のいくらともなく競ひ到れるをも、つゆ恐るゝ心なく、城を守りてありつゝ、再び君の御代となりても、よく身を愼みて、司位などをも望むことも なし。弓箭の道はさらにもいはず、公に仕へても、いとまめやかなりしかば、かくあへなく聞かせ給ひては、公にもいみじう惜しませ給へり。同じ二十七日にひえの山に行幸なりて、暫く爰に坐せば、武士どもは、たび〳〵京に出でて戰ひをなしつるに、勝ち得る事も難くなむ。伯耆守長年と云へるは、本の根ざしも賤しからず、村上の帝の御筋にて、心ざまも、かひ〴〵しきものにて、君隱岐國を出でさせ給ひ伯耆に遷らせ坐し時より仕うまつりて、多くの戰ひに心を勵ましつるも、終にこの度なむ討たれ侍りき。斯くて八月にもなりぬれば、春宮は越路に行啓ある。實世の左衞門督ぞ從ひたてまつる。義貞を始め

○本意なくており居させ給へ　本意でなく不承々々に御讓位になつた光嚴天皇。
○新院　花園院。
○御心ゆきて　御滿足に。
○山の帝　御山に行幸の帝。後醍醐天皇
○上野の親王　成良親王。
○義貞が籠りし城　越前金崎城。
○上　後醍醐天皇。
○三種のおほんたから　三種の神器。
○折々の節會などをも云々　折々に行はるべき節會儀式なども從來の宮中に行はれたと變りなく芳野で行はせられた。
○天津日嗣　皇位。
○夷の軍起り　蒙古の軍。
○他の國　諸外國。
○此の國　我が國。

として、さりぬべき兵多く仕うまつれり。都には、元弘の頃、本意なくており居させ給へる先帝の御弟の親王豐仁と申し奉るをなむ、尊氏が計らひにて、御位につけ奉る。近衞の左の大臣關白し給ふ。今は先帝新院などは御心ゆきて思さるべし。神無月には山の帝都に遷らせ給へり。頓て花山院に坐す。尊號のさたなんど聞ゆ。されど御心をなぐさめ奉らむとにや、上野の親王を春宮にする奉る。尊氏は其のまゝ都にとゞまりて、高經師泰なんど云へる武士を越路に遣はして、義貞が籠りし城をなむ責めさせける。十二月ばかり花山院に坐す。上は忍びて都を出でさせ給ひて、河内國に、故正成が子息の在りけるを召し具し給ひて、芳野に入らせ給ひ、行宮をなむしつらはせて、渡らせ坐す。三種のおほんたからをも御身に添へさせ給へれば、猶もとの儘なる御位にて坐す。折々の節會などをもありし九重に替らず行はせ給へば、これより後は、南朝と聞えて、天津日嗣の二流れに分れさせ給ひぬ。抑天地開けしよりこなた、人の代となりて皇のかしこき御位におはしまさむには、三種の御寶をしるしとせさせたまひて、天が下を知召し、君も臣も身を合はせて、直なる世の政をほどこさせ給へるにぞ、國富み民榮えて、神も佛も一つ光の普く、萬代までも、秋津島根の動きなき國なりとて、唐土の帝も書を奉りて、睦まじき心見えなどすれば、此の國よりも、又使を遣はし給へる事も、昔より絶えずなむ。中頃夷の軍起りて他の國を責めかたぶけなどせしに、其の後此の國をも隨へむとて、多くの兵ども舟に乘り

て筑紫の方へ漕ぎ寄せ侍りしに、神風さへあら〳〵しく吹き出でぬるまぎれに、船どもそこなはれて、ちり〴〵に逃げ失せぬるにぞ。神の守らせ給ふ國なりとて、いみじうおぢ聞えて、其の後あへてひまを窺ふこともなかりき。いよ〳〵國の中豐かに、君の御光も增りて、御裳濯川の流れ一筋に傳へさせおはしませしをなむ、民の戸までも仰ぎ奉りしに、如何なるにか此の世には、天が下に二人の君坐して、何れもさりぬべき御傳へにて、おろかにおもひ奉るべうもあらず、年の名さへかなたこなたひとしからぬにぞ、國々の民どもは、いづ方にかはなどたゆたひつゝ、芳野殿にまゐるあれば、引きたがへて京に隨ふもありしかば、つひには戰ひの媒にて、四方の國々は皆亂れて、こなたかなたと、たち別れつつ、都にて又なく時めきし者も、露ばかりの憂きふしをかごとにて、芳野殿に急ぎ參りては、きのふけふまで睦まじかりし友をも、いつしか打亡ぼさむ事を思ひ構ふるに、又京よりことよくいひあざむくにぞ、やがてかたらはれて、たちかへりなどするは、誠に淵瀨も定めなく、何か道なる世の中とて、さらに爭ひのやむ時なくなりぬるにぞ、國破れて山河あり、城春にして草木深し、といひけむ古事にかよへる世とはなりぬ。

○御裳濯川の流れ　皇統。御裳濯川は伊勢神宮の側を流れる故神の御末に喩へた
○民の戸　民家。
○何れも「云々」　どちらも適當な皇位を嗣がれるべき神の御子孫で疎畧には思ひ奉つてはならぬ。
○年の名さへ　南朝北朝と年號が異つて
○たゆたひ　心が動いて決定しない。
○ことよくいひあざむく　言葉巧みに欺くのに誘はれて。
○淵瀨も定めなく　古今集「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨になる。」
○國破れて云々　杜甫「國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、白頭搔更短、渾欲不勝簪。」

○廣義門院　藤原寧子。
○公衡の大臣　西園寺公衡。實兼の子。
○おりゐさせ給へ　御讓位になつた。
○さきにいひ置きたる人　增鏡に載つてゐるのをいふか。
○此の御ぞう　此の御一族。
○思しこりにける　思ひ詰める。
○世をそむかせ　遁世出家されて。
○夢窗國師　僧疎石で天龍寺の開山。
○後の世の御つとめ　後生菩提の御勤行

卷第二

光嚴院

九十六代に當らせ給へるは、御諱量仁と申し奉る。後伏見院の一の皇子にて、御母は廣義門院とて、公衡の大臣の御女ぞかし。元弘の頃、御位に卽かせ給ふ。此の御事は、世をしらせ給ふ程も久しからず、いとあわたゞしくて、おりゐさせ給へり。ことに御位に坐しし世の事は、さきにいひ置きたる人も侍れば、今更に同じ事云ひ出でたらむは、ゆかしけなきやうに侍れば、とゞめ侍るなり。されど御つぎ〳〵のかぞへにもれさせ給ふべくもあらず。又後々は此の御ぞうのみ傳へさせ給ふれば、いとなむいみじき御事に侍り。おりゐさせ給ひて後も、世の中いよ〳〵みだりがはしくなりまさりて、芳野の方に御幸などありしも、いとほしき御さまなりしに、又立歸らせ給ひしかど、世を憂き物に思しこりにけるにや、ひたすらに世をそむかせ給ひつゝ、夢窗國師の御弟子にて、後の世の御つとめおこたらせ給はぬも、ありがたき御事になむ。初めは嵯峨のほとりに住ませ給ひしに、後には伏見の奥なる光嚴院と云ふ處に、渡らせおはしましに、雲のうへ人などの、たまさかに事とひ奉るも、厭はしう思召れて、こゝも猶住みうくせさせ給ひつゝ、忍びて都の外の

○あやしげなる　賤しくみすぼらしい。
○やつさせ給ひ　姿をみすぼらしくして
○三津の濱　今の大坂地方。三津は難津、高津、淀速をいふ。
○上　後醍醐天皇。
○すくよか　きすぐに、ためらふ所なくさつぱりと。
○かろらかなる　行脚の簡單な行幸。
○かへり見すべうも云々　顧みて留まるに足らぬ俗世間。
○惟喬の親王　文德天皇の皇子。
○あるじの上　後醍醐天皇。
○御聖心　光嚴院の佛道に熟心な御心。
○處につけたる　芳野山で處がらの。

國々をも御覽ぜむとて、立出でさせたまふに、御供にはあやしげなる僧一人ぞ參れり。御姿をもいたうやつさせ給ひける。まづ津國におはしまして、三津の濱を御覽じつゝ、

誰まちてみつの濱松かすむらむわが日の本の春ならぬ世に

堺の浦などを見めぐらせ給ひて、高野に詣でさせ給うける。奥の院にて、

たかの山迷ひの雲もはるゝやと其のあかつきをまたぬ夜ぞなき

又芳野殿にも立ちよらせ給ひて、上にも御對面あり。こなたの上もいとあはれに見奉らせ給ひ、「今しも思ふやうなる世にて何事も御心に任せ給ふべきを、いとかくすくよかに思し捨てつゝ、かろらかなる御ありきの、いとうらやましきに、爰をしもよぎらずとはせ給へるも、中々夢かとのみ、たどるばかりになむ。」と宣はするに、しか樣々にうかりし世を夢とのみ見はてて侍れば、かへり見すべうもなき塵の世は、とく捨てざりしとか。惟喬の親王の言の葉も、今なむ哀れに思ひしられ侍り。」とて、昔今の御物語細やかに聞えかはさせ給ふ。あるじの上は、ありがたき御聖心を尊く思ひ聞えさせ給ひつゝ、處につけたる御あるじこまやかにせさせ給へば、とまり給ひて、又の日急ぎ出でさせ給ふに、あかず思召さるれば、「今しばし。」と、とゞめ聞えさせ給へど、しひて出でさせ給ふ。見送り奉る人々も、たぐひなき御有樣を、哀れにぞ見奉る。昔はうしとのみ思召されし御すみ處も、中々なつかしくてかへりみせられ給へり。山また山を分けゆかせ給ふに、松の嵐もいとひやゝ

○百首の歌云々　新後拾遺集に「貞和二年百首の歌召しけるついでに。」と詞書して草枕の歌が出てゐる。
○ひたおもむきに　一向に。
○なきかずのみ云々　死ぬ人の數が多くなりゆく。
○例ならず　御病氣に御かゝりになつたのをいふ。
○文月七日　北朝貞治三年南朝の正平十九年七月七日。
○淺ましう云々　嵶御をいふ。
○御送り　御葬送。
○仕うまつる上人　御葬送の御供奉仕する殿上人。
○御わざ　御法事。
○仰せ置かせ給へる　御遺命によつて光嚴院を盜し奉つた。

かなる曙の氣色を、見渡させ給ひて、古都にて百首の歌めされしついでに、旅の心を、

草まくらかりねの露に我を置きて伴ふ月もあけがたの空

とよませ給ひしも、我が御うへとぞ思召し出でさせ給ふ。猶處々めぐらせ給ひて、伏見殿に歸らせ給へり。今はひたおもむきに、佛の道にのみ入らせ給へば、世の憂き事は聞えじと思召さるゝに、二品法親王などかくれさせ給へるを、告げ知らせ參らするに、又其の外の人々もなきかずのみ增り行くを聞かせ給ひて、いと哀れに思召しやらせ給ふ。

見し人は俤ちかき同じ世にむかしがたりの夢ぞはかなき

此の御住居も御心にかなひ給はずやありけむ、丹波國山國といふところに移らせ坐して二とせばかり明し暮させ給ふ。六月頃より例ならず思召されしに、文月七日にぞ遂に淺ましうならせ給ふ。御年五十二にぞ坐す。やがて後の山に納め奉るに、御送りの夜は、院も宮もおりたたせ給へる、いと哀れなる御さまどもになむ。仕うまつる上人どももあまた侍り。御わざなども、殊にこちたき事どもせさせ給へり。後には光嚴院と申し奉るも、仰せ置かせ給へるまゝとぞ聞え侍りき。

○九十七代の帝　光明天皇。　御伏見天皇の第二皇子。
○建武三年　二月延元と改正。光明天皇即位は八月。
○しひて御位云々　尊氏が擁立したのを
○後鳥羽院の御例　後鳥羽院即位の時は神璽は安德天皇と共に西海に御遷しになつてゐたその例。
○先帝　光嚴院。
○むくつけき　氣味惡い、恐ろしい。
○花も昔の　新葉集「天授三年三月十一日如意輪寺にて御佛事行はれける時前大僧正頼意の許へ申し遣はし侍りし。幾春か散りて見すらむつらかりし花も昔の別れながらに。」

卷第三

光明院

九十七代の帝は、さきにも聞えさせし豐仁と申し奉る御事よ。御母は廣義門院にておはします。建武三年御年十六にて世の中騷がしかりし頃御位に即き給へり。此の時神璽は芳野に渡らせ給へど、しひて御位につかせ給へるは、後鳥羽院の御例にや侍らむ。又由の奉幣とて伊勢使を立てられて、天照大神に事の由を申させ給へるなるを、それもとゞめられぬるは、處々うち亂れて道ふたがれる故とはいへど、神の御慮もいかゞと時の人いひあへり。今は新院をば本院と申し奉り、先帝をば新院と聞えさす。近衞の大臣關白にて世をまつりごち給へり。帝わかう坐せば、新院萬の事をしたゝめさせ給へり。十一月に尊氏を大納言になさる。世の中靜かならましかば、御禊大嘗會などにて内わたりもはえ〴〵しかりぬべきに、かかる騷ぎの程なれば、何の儀式もおとなく侍りき。都の中には武士共の集ひて、むくつけき事のみ聞えかはしつゝ、年も暮れぬ。京には建武四年の春を迎ふれば、芳野殿には去年より改まりて、延元二年とか聞えさす。何方にも世のみだれの限りなきを思召し歎くべし。まして芳野には梅の匂ひにさへ、「花も昔の。」と故郷をこひ聞ゆる人々多

○上　後醍醐天皇。
○山の御住居　天皇樣の御供で芳野の山住居が心細い悲しい事に御推察申してなどと。
○北の國なる宮　越前に御出でになつた皇太子恆良親王並に尊良親王。
○義顯　義貞の長子
○親王も同じ如に　尊良親王も御自殺になつた。
○東宮　恆良親王は捕はれて京師へおはした。
○淺ましき御事　恆良親王と共に毒殺され給うた。
○近衞の大臣　經忠
○洞院の大臣　公賢
○一條の大臣　經通
○鷹司大納言　道敎
○大饗　任大臣祝賀の饗宴。
○親王　義良親王。
○中納言　北畠顯家

きに、上も御節會などの形ばかりなるを御覽ずるに、御心動きて思召さる。二月の頃御まへの櫻やう〳〵咲き出でたるを折らせ給ひて、勾當の内侍に賜はせて、

爰にても雲ゐの櫻咲きにけり唯かりそめの宿と思へど

同じ内侍のもとに、故里よりいもうとの君の文とてもて來れり。あけて見給へば、「山の御住居の覺束なく心ぐるしうなむ、常に思ひやり聞えて。」などこまやかなる、返事に内侍、

春は花秋は紅葉をみよし野に山のかひあるすまひとぞ知れ

三月には、北の國なる宮の御軍は尊氏が兵に城をも責め落されて、義貞は弟の義助を伴ひて、杣山とかやいへる城に入り侍るに、其の子の義顯は自害して失せぬ。親王も同じ如に失せ給ひて、東宮ばかりぞ京にゐて奉りしに、それさへ直義が計らひにて、後には淺ましき御事となむ聞えき。近衞の大臣は此の程まで關白なりしも、卯月には芳野に參り給へば、其の從弟の基嗣の大臣をぞ替りにはなさせ給ふ。洞院の大臣右大臣辭し申し給へば、一條の大臣を左に轉させたまひて、九條の大納言を右大臣に、鷹司大納言を内大臣になさる。何れも大饗などもありしなめれど、更に聞き置き侍らずなむ。冬つかた陸奥にゐましし顯家の中納言は親王を具し奉りて、奥の軍どもを催し打上らむとて、まづ鎌倉を攻むるに、義貞が次郎なりしもこれに從ひ奉る。また北條時行といへるは、失せにし高時入道が子にて、一年軍を起ししかど、尊氏に戰ひ負けて行方なかりしが、このたび中納言に附き

○こちたき軍　夥しい軍勢。奥州からの顯家の軍など官軍が鎌倉を攻めた。
○都は暦應元年　芳野は延元三年。
○かたみに勝負ありて　互に勝敗があつて。
○埋れぬ名　神皇正統記に「時や至らざりけむ忠孝の道こゝに極まり侍りにき。苔の下にも埋もれぬ物としては唯徒らに名をのみぞ留めし。」
○父母　顯家の父親房並にその北の方。
○こなたに　陸奥から父母います芳野に
○御心地もなき　現心もないやうに。
○いかさまにか　どうなるだらうかと從者が心配した。

ぬ。鎌倉には尊氏が子の義詮をさし置きつるに、こちたき軍のきそひ到れば、終に逃げて都に上りたり。今年もかやうにひしめき暮して、春にもなりぬれば都は暦應元年となむいへり。二月にもなりしかば關の東の國々は悉く平らぎて道ひらけしかば、宮中納言は心やすく伊勢の國にぞ著かせ給ふ。やがて芳野に參り給はむとて、伊賀國より大和路を廻りて、奈良の京になむいたり給へり。尊氏がかたより師直直常など云へる兵を春日の里までもさし遣はすにぞ、處々にてあまたたび戰ひありしに、かたみに勝負ありて日數をのみ重ねつつ、五月にうつりぬ。和泉の國にてありし戰ひに、中納言うち負け給ひて、安部野の露の草の原に埋れぬ名をのみとゞめ給ひしかば、殘りの兵も皆心をまどはして、ちり〴〵にぞなり侍る。芳野にもかかる事を聞かせ給ひて、上もいといたう御心を惱まさせ給へり。まして父母の御歎きはいひやらむ方なし。こなたに參り給ふべく聞き給ひしより、いつしかと待ち聞え給ひしに、かくいふかひなく聞き給ひては、唯夢かとまどひ給へるも、ことわりにいとほしげなり。父君なく〳〵、

さきだてし心もよしや中々にうき世の事を思ひ忘れて

と宣ふさまもいと堪へ難げにぞ見え給へり。北の方は其のまゝに臥ししづみ給ひて、御心地もなきやうなれば、いかさまにかと、さぶらふ人々思ひまどひたるに、からうじて、

玉の緒の絶えもはてなでくり返し同じ浮世にむすぼほるらむ

○同じ道　わが子顯家と同じく死出の旅にと。
○いとほしき　痛はしい。
○觀心寺　河内國川上村。檢尾山といふ。眞言宗。南朝の遺物がある。
○背きても　うき世を捨てて出家しても
○かしらおろして　剃髮して。
○行ひけり　佛道の勤行をした。
○義興　新田義貞の第二子。
○一條の左の大臣　藤原經通。
○山　叡山延暦寺。
○うけ引く　衆徒が義良應援を承諾したやうす。
○思ひの外なる　越前藤島城を攻めんとして流矢に中つて戰死した。
○頼もし人　頼み依るべき人。

同じ道にとのみ思ひ給ひたるも、いとほしき御氣色になむ。其の儘に御髪おろして、觀心寺といへる山寺の麓にいと微にておはします。其處にて常に忘れ難くや思ひ給ひけむ、

背きても猶わすられぬ偖はうき世の外の物にやありけむ

斯くて三年ばかり坐しに、世の中もやう〳〵鎭まりぬれば、芳野をも出で給ひて、元の都にぞ登り給ひぬ。資相の中納言の御女となむ聞き侍りき。又中納言の今はと見えしきはまで付き添ひ奉りし刑部丞といひしも、かしらおろして行ひけり。されば中納言は、後に芳野の帝より大臣の位を贈らせ給へり。御弟の顯信少將は、義興を相具して八幡山に籠りてありしを、尊氏が兵忍びて御社を燒きけるにぞ、事ならずして引き退きぬ。京には基嗣の大臣關白を返さひ申し給へば、一條の左の大臣に關白の宣旨下りぬ。此の頃ぞ義貞は爰かしこの軍に打勝ちて、北の國の兵皆從ひしかば、いかめしき勢ひにて都にうち上らむとはかりつゝ、まづ山の衆徒にいひ合はせてこそとて、語らひ聞ゆるに、うけ引くさまなれば、出でたたむとせし程に、思ひの外なる事にてあへなくなりたり。そこらつどひぬる武者どもも唯あきれ惑ふばかりなれば、弟の義助もせむ方なくて、猶越路に留まりぬ。去りにし頃義貞をば芳野殿に度々召されしかど上りあへず、終にかくと聞かせ給ひては、いと本意なく思召されつゝ、うちつゞき頼もし人の失せ行く事をなむ、いみじう心細う思召し歎かせ給ふ。京には八月に尊氏を二位になされて征夷將軍の宣下あり。又直義は左兵

○師直　高師直。
○一つ門　一門。
○おだしく　穏やか
○かたみに　互に。
○夷ごゝろ云々　荒荒しい野心の正しからず。
○そば〳〵しう　互に角立つて。
○顯信　北畠親房の第二子。
○みこ　義良親王。
○坊にゐさせ給へり　東宮にお立ちになつた。
○國にてこそ　陸奥では皇子義良親王と明らかになさるべきも道中は祕し給へと
○御舟に奉り　御乘船になつて。
○須磨の云々　源氏物語須磨の卷によつて非常な雜風をいふ
○こと浦　他所の浦
○みこの御舟　義良親王の御舟。
○もとの海　舟出された伊勢の海。
○芳野殿　芳野の行宮をいふ。

衞督にて副將軍とぞ聞ゆ。師直も今は武藏守にて尊氏がわたくしの後見をなむしければ、一つ門いみじう榮えて心のまゝに事行ひしかば、おのづからねぢけたる事も多かり。尊氏は心ざまおだしくて何事も聞き入るゝ事なく、弟の左兵衞督にぞ世の政をもおきてさせつるに、督は師直と中よからず、かたみに夷ごゝろのさがなくて、そば〳〵しうのみ成り行くにぞ、又いかなる世の大事か起らむと從ふ者どもは下に歎くめり。芳野殿の御武者義興は、ありし八幡のみだれの後又東に下りしかば、顯信の少將をば中將になされ、陸奥介にて鎭守將軍をも兼ねて下るべき宣旨を蒙り給ふ。みこも同じごと下らせ給ふべき御定めなれば、奥の軍は悉く從ひ奉る。さるは此の度みこは坊にゐさせ給へり。御兄の宮達も數多坐しつるに、帝いかゞ思召しけるにや、この御事の俄に定まり給へるもめでたき御宿世になむ、今は鄙の長路を凌がせ坐さむ事もいとかたじけなかるべきを、國にてこそあらはさせ給はめ、道の程などは御よういあるべく仰せられて、やがて舟にて下らせ給ふべきなりとて、文月末つかた、まづ伊勢に越えさせ給ひて、其處より御舟に奉り、長月十日頃伊豆の海といふわたりを過ぎさせ給ふ程、俄に空のけしきかはりて、須磨の御祓の餘波おもほゆるばかりの風、おどろ〳〵しう吹き出でたるにぞ、多くの舟どもは大海の浪に漂ひて、行方もしらずなるもあり、又こと浦によるもありしに、みこの御舟ばかりはいかに吹き分けたるにか、もとの海によりて篠島といふ處に著かせ給ふ。芳野殿にも事の聞えあり

○宮の中かいしめりて　宮中が物寂しくかきしめつて。
○朝覲の行幸　天皇が上皇又は皇太后の宮に行幸して拜謁されること。恒例としては新年、臨時としては踐祚後卽位後又は元服後。
○參りさかづる　參内したり退出したりする。
○大宮人云々　新古今集「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ。」
○永福門院　伏見院の后、名は鐘子。
○院の上　花園院。

しかば、敕使として僧正賴意を遣はされしに、歸り參りて事の由奏し侍りけるついでに、

神風や御舟よすらし沖津波たのみをかけしいせの濱邊に

誠に限りある御身の、例なき鄙の御住居を、神もいかゞと思召されて、かくはとゞめ申させたまへるにこそと、宮司どもも申しあへり。其の後ぞ、また芳野に歸りいらせ坐す常陸に著きたる舟もあるに、かしこは志ある輩も多かりしかば、いひ合はせなどして又義兵そこばくなれり。陸奥上野の軍ども、又の年の春なむ、國に下り侍る。都も猶靜かならねば、年ふりても節會など行はるゝこともなく、宮の中かいしめりて、朝覲の行幸もなければ、院の御前もいと物寂しうのみながめさせ給ふに、參りまかづる人目も幽なり。此の頃の世は何事も皆武家より捉てければ、おほやけは朝政もたえ〴〵にて、大宮人もいとまある樣なれど、櫻を翳して遊ぶ事もなし。さき〴〵のおりゐの帝は處々に御幸などありて、いまめかしうもてなさせ給へりしに、今の院の上は、二所ながらいづかたの御幸もなく、御遊びさへたまさかにて、何事も武家を思召し憚りたる樣なり。永福門院は西園寺におはしましけるが、花につけて本院に奉らせ給ふ。

咲き散るもしる人もなき宿の花いつの春まで御幸まちけむ

院の上御かへし、

世々を經て御幸ふりにし宿の花かはらぬ色もむかしこふらし

○受領　國守。
○御牧　御牧場。
○御莊　御莊園。
○道譽入道　佐々木高氏。北條高時に從つて剃髪して道譽と云つた。
○宮　妙法院の座主尊澄法親王。
○むつからせ給ふ　御怒りになつた。
○御とのゐ　御宿直
○ひたぶる心　一途な心。
○山　延暦寺。
○公　朝廷。これは北朝のである。
○御輿をも振り　日吉の御輿振りをもしようなどと。
○披講　詩歌の會で詩歌をよみ上げること。

まして國々の受領など云へるものは武家にのみ追從しつゝ、おのづから公を輕しめ奉るやうにて、院々宮々のしらせ給ふなる御牧御莊をさへ侵し掠めて、みだりがはしくたへがたき事の多きに、公より制せさせ給ふにも隨ひ奉らず、心のまゝに奢りて、貴なる人々をもさらに恐るゝ事なきは、いと淺ましき世の中なり。又道譽入道とて其の始めは宇多の帝より出でて、やんごとなき御末なれど、今は受領ばかりの者あり。武家に從ひていみじう時めきぬるが、秋の頃に鷹狩の歸るさに妙法院の御前を渡り侍るとて、供なる者に紅葉の枝を手折らせたり。宮ははし近くて、夕ばえを御覽ずるほどなりしかば、「心なくも。」とていみじうむつからせ給へるにぞ、御とのゐにさぶらふ山法師ばら走り出でて、いたう追ひうちぬ。入道はひたぶる心ある者にて、安からず思ひて、やがて三百餘騎の兵して宮の御所を燒かせたるは、いとめざましき事なりき。山の衆徒は憤りに堪へず、公に奏して入道を失はむ事を企てたり。されど武家猶入道をいたはりぬるにぞ、公も力及ばせ給はぬを、山には口惜しき事に思ひて、御輿をも振り奉らむなど聞えしかば、武家もさすがに世の大事なるを思へばにや、入道を遠き國に流し遣はすべき定めにて、内にもかくと奏し奉れば、やがて山へは院の宣旨下りてなむ、法師原の心もとけつゝ、都の中鎭まり侍りき。八月十五夜院の御前にて和歌の披講ありしに、月山を出づるといへるを、經有の三位、

空にすむ光ぞおそきみね越えて松原つたふ秋のよの月

○中務の親王　宗良親王。
○花染の袂云々、墨染の法衣を脱いで花染に著かへ還俗し給うて。
○思ひきや　この歌新葉集に出てゐる。
○あやしき歌のひじり　驚くべき歌聖。
○さるらうがはしき　それほどの亂世の
○かしこに待ち聞えたる　東國でお待ち申してゐるに何時までも此處に留まるのが心苦しいとて。
○芳野の上　後醍醐天皇。

芳野殿の中務の親王と聞ゆるは、ありし元弘の亂に、讃岐に御移ろひの程は、妙法院の法親王にておはしましに、いつしか御ぐしおろして花染の袂に立歸らせ給へるに、うち續きて世の中騷がしく、帝も南ざまに遷らせ給ひしより、武士の道にのみたづさはらせ給ひつゝ、征東將軍にて此の日頃、東の方におはしますを、御心にも思ひの外なるやうに思召されて、

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむ物とは

此のみこはあやしき歌のひじりにておはしませば、さるらうがはしき中にても、折節につけて思ひよらせ給へる御歌なむ、數多世上に聞え侍る。春の頃のぼらせ給ひて、芳野殿におはします。上も珍らしがらせ給ひて、とゞめ聞えさせたまへば、日ごろさぶらひ給へるに、爲定の大納言驚かし聞え給ふ。

歸るさをはやいそがなむ名にしおふ山のさくらは心とむとも

宮の御かへし、

故里は戀しくとてもみよし野の花の盛りをいかゞ見捨てむ

かくてもさぶらはせ給ふべきを、かしこに待ち聞えたるいと心苦しとて、またかへらせ給ひぬ。芳野の上はいつとなき太山の御住居に、秋の哀れさへ加はりて、身に入る風に故鄕の寒夜も思召し知られて、世を思召す御心のいとまなきにうち添ひて、此の頃は吉田の大

○春宮　義良親王。後村上天皇。
○左大臣　關白左大臣藤原經忠。
○八月十六日　延元四年八月十五日御讓位、翌日崩御。
○鶴の林にみまがふばかり云々　鶴の林は釋迦入滅の時其處の沙羅林の樹が白く鶴の如くになつたといふに喩へた。
○世をしらせ　御治世になつた。
○御送りの人々　葬送供奉の人々。
○興國元年　延元五年四月二十八日改元
○親房　北畠親房。
○義助　新田義貞の弟。
○こゝらの軍　數多の軍勢。
○先帝の御はて　後醍醐天皇の第一周忌

臣清忠の辨など、なくなりぬると聞かせ給へるにも、物心細う思召しつゞけさせ給ひて、事とはむ人さへまれになりにけり我が世の末のほどぞ知らるゝ

八月初めの頃より秋霧におかされさせ給ひて御心地例ならずおはしませば、誰も〳〵思召しまどひて、御誦經の御使隙なくたち騒ぎたり。御心にもいかゞ思召さるゝにや、急ぎ春宮をば左大臣の家に渡し奉らせ給ひて、三種の御寶をも傳へ申させ給ひ、御遺言もかずかず侍りとかや。終に八月十六日になむ、芳野の山も鶴の林にみまがふばかりの悲しみを留めさせ給へり。二十一年世をしらせ給ひて御年五十二にぞ坐しき。御遺言の儘にをさめ奉るにも、御送りの人々は限りの旅と思ふもいみじくて、物覺ゆる人もなし。此の御事は申し續けむに言の葉たるまじければ、中々にてとゞめ侍る。次の年ぞ東宮御位に即かせ給ふ、御諱義良と申し奉る。御母准后と聞えさせしは公廉右中將の御女よ。今は院號ありて新待賢門院にぞ坐す。延元もとゞめられて、興國元年とぞ申し侍る。先帝の御定めにて、親房の大納言御後見仕うまつり、洞院の實世四條の隆資なむ諸の事を執り行ひ給ふめり。大納言の御子顯能をば、伊勢の國司になさせ給ふ。又の年の秋義助は越路の軍に打勝ちぬれど、又京よりこゝらの軍を遣はしぬるにぞ、美濃に退きて、それより芳野殿に參りぬ。先帝の御はてもいととく過ぎて宮の中色改まりつれど、さる山里の御住居は物の榮えある事もなくて、明し暮させ給ひつゝ、興國も三年になれり。夏の始め義助に敕ありて、

○四の國々　四國。
○心地煩ひ　病氣に罹つて。
○康永　南の興國三年、北の曆應五年五月北は康永と改元。
○新院　花園院。
○故院　後伏見院。
○尊き事など　佛事の鄭重な有りがたく尊い事
○たど〳〵し　確かならぬ危なげな。
○御前ども　御前驅の者ども。
○いと珍らか　奇怪だと。
○賴遠　土岐賴貞の子。
○貞和　南の興國六年、北の康和四年十月北朝貞和と改元。
○百數　宮城。

ごたびは、南の海を渡りて四の國々を平らぐべしとて、遣はされしに、伊豫國にて心地煩ひつゝ身まかりぬ。まことや芳野の先帝をば今は後醍醐の天皇と申し奉る。御遺言の儘とぞ聞え侍る。都は今年より康永に改まりき。秋のころ新院は故院の御佛事行はせ給はむとて、伏見殿に渡らせ給ふに、さばかり見處多くしなさせ給ひし宮の中も、年月にそひて漸く荒れ行く樣なれば、哀れに御覽じ渡して、昔の事をも思召し出でさせ給ふに、御袖も露けくて、いとゞ見捨て難く思召さるゝ秋の色に御心とまりて、二三日ばかり坐ししに、尊き事などしつくさせ給ひて、程なく京に還らせ給ふ。道の程もたど〳〵しき夕月夜に、五條わたりを過ぎさせ給へば、いと怪しう鄙びたる武士の、馬に乘りつれてこなたざまに參れり。御前どもたち騒ぎて、「御幸なり。」といふをも聞きしらぬ樣にて、ようゐなくみだりがはしき事のみ出で來るにぞ、院の上にもいと珍らかなりと思召されて、御氣色あしかりければ、武家にも傳へ聞えて、やがて罪にぞ行ひ侍りき。賴遠とて美濃國の兵になむありける。此の頃は唯武家にのみ時を得て、公の政はやう〳〵衰へ行くにぞ、物の心もえぬ賤山がつなどの言種に、尊氏光嚴院に帝王の位をさづけしといふなるは、又なく珍らかなる言葉に侍るかし。いつしか康永も三年許りにて又貞和とぞ申し侍る。龜山殿とていみじう作り研かれたる宮は、龜山院位を去らせ給ひて後住ませ給ひし處なるに、又後宇多院もうち續きて坐ししかば、其の世は大宮人の常に行き通ひて、百數にもをさ〳〵劣らず今

○此の御繼　後宇多院の御世嗣後醍醐天皇。
○上人　殿上人。
○夢窗國師　僧疎石
○夢のたゞぢ　夢の直路、ゆめぢ。
○なき御影　崩御になつた後醍醐天皇の御寫影。
○御心とくる許り　先帝の御怨みの御心も解け和らぐ程の。
○世ゆすりて云々　世の中搖ぐ程に騷いだ。
○内　光明天皇。
○さる心して　上皇の御幸あるについての用意して。
○かいはらひて　きはらひて。
○結緣　成佛得脫すべき因緣を結ぶこと
○しめやか　靜まつた。
○落ちゐたる　落著いた。

めかしう華やかなりしに、此の御繼の芳野に移ろはせたまひてより、年頃に荒れのみ增りて住む人もなく、瓦の松は風に傾き、軒の蔓は木の葉に埋れて、おのづからなる松の聲のみ殘れり。たまゝ年老いたる上人などの、世にとまりてあるも、世のらうがはしきにことつけて、昔の跡を問ふ人もなく成り果てしに、夢窗國師とて内にも院にもやんごとなく思召され、武家にも尊み聞ゆる法の師なむ、常に芳野の先帝の御怨み深くてすぐさせ給ひし御事を、いみじう思ひ奉るに、夢のたゞぢの怪しくも心に懸りて覺えつゝ、なき御影にも御心とくる許りの御法事をも勤むべく、武家の人々にも言ひ合はせて、此の龜山殿の御跡を寺になさむ事を思ひはかり給ひしに、日を經て作り建てられたり。天龍寺とていとかめしく清らかなる事はいひやらむ方なし。八月の頃供養あるべしとて、武家より執り持ちて事ども掟てぬれば、世ゆすりて騷ぎのゝしる。内にもかねては御祈りなどをもつかまつるべくおもむけ聞えさせ給ふるにぞ、其の日は上皇も御幸あるべく思召されしかば、武家にもさる心して、佛の御飾りをも今一しほの清らをそへ、御堂の内も殊更にかいはらひて、何事をも珍らしき樣にて御覽ぜさせむと、いみじう心づかひしあへるに、俄に山の衆徒の訴へ申す事によりて思召しとゞまりつゝ、又の日に御結緣の爲にとて、めぐらさせ給ふ。今はかうやうなる御幸も有り難ければ、院もいと珍らかに思召されれど、暮れ行けばあかず歸らせ給ふ。此の頃は都の中も漸うしめやかなりしかば、今はと人の心も落ちゐたるに、又備前國なる芳野殿の御かた人高德といへる者なむ、故義助が忘れがたみにてありし義治を誘ひ、忍びて都に上り居つゝ、尊氏直義を亡ぼさむ事をはかりて、關守のうちぬる隙を窺ひけるに、事ゆかずして遠きさかひへぞ逃げ去り侍る。芳野殿には又改まりて正平とぞいへる。猶昔の御志を果させたまはむ事をのみたゆまず思召せば、さぶらふ人々もさやうの方を心にかけて、つはものをなつけなどしつゝ、何となく月日移りて正平も四つといふ年になり侍り。楠正行とてむかしの正成が子なりける、そのかみ正成湊川にのぞみし頃は、まだ稚くて故鄕に歸り居たりけるも、今はやう〳〵おとなびて、いみじき武士になりたれば、父が遺訓を違へ聞えじとて、いつしかと軍を起して河内國に打出でたり。京にも聞き付けて、さらばとていみじき兵を選びて遣はしたるに、待ちうけて藤井寺のわたりを戰ひの場にして挑みつるに、いくばくもなくて武家うち負けぬれば、安からぬ事に人人いひあへり。はては都にさへ打ちいりてゆくりなく攻め寄するにぞ、尊氏も直義もからうじて館の内を逃げ出でしかば、殘る兵はおのがさま〴〵に亂れ散りて、尊氏が北の方さへあへなく成りぬるぞいと淺ましき。正行はすみやかに國に歸りぬれば、人々爰かしこより歸り入りて都は又鎭まり侍る。かうしづ心なき世を御覽ずるにも、内のうへはよろづむつかしうのみ思召されて、いかでとくおりてむと思召さるゝにぞ、やがて武家にも仰せられて、今はひとすぢにさる御心づかひのみせさせおはしましき。

○かた人　味方。
○高德　兒島高德。
○うちぬる隙　眠つてゐるひま。
○正平　南朝興國七年七月改元。
○昔の御志　南朝の世にしようとの御宿志。
○藤井寺　河内國南河内郡。
○ゆくりなく　不意に。
○しづ心なき　靜心なき、落著かぬ。
○内のうへ　光明天皇。
○さる御心づかひ　御讓位になる御心持